

## 序にかえて

おはようございます。今回のテーマは「いま危機にある無形文化遺産」でございます。非常に多くの方から参加のご応募をいただきました。このことは、この無形文化遺産の休止・廃絶といった問題を切実な問題と考えておられる方が非常に多いということを、物語っているのではないかと考えております。

傍目から見ると非常にうまくいっているようなものであっても、全ての無形の文化遺産というものは、伝承にあたって、非常に多くの問題点を抱えているものです。さまざまな問題点を乗り越えるたびに、無形の文化遺産は変化していきます。そういった変化は、場合によっては、「昔は良かった」というような慨嘆とともに語られることが多いようですけども、それは必ずしも劣化ではありません。

無形の文化遺産にはさまざまなものがございますけれども、例えば「言語」も無形の文化遺産です。日本語を話す能力、読み書きする能力も無形の文化遺産です。『万葉集』の時代の日本語、『源氏物語』時代の日本語、『平家物語』、松尾芭蕉『奥の細道』、そして夏目漱石、村上春樹、日本語も随分変わってきました。でも、そういった中で、『源氏物語』の日本語と、夏目漱石の日本語をくらべて、随分と劣ってしまったなと思われる方は誰一人いらっしゃらないはずです。

無形の文化遺産は変化をしていきます。変化していくたびに、生き延びていく。再生産されていく。その力があるからこそ、変えながらも、変わりながらも存続していくわけです。本日のここでの議論が、多くの方々にとって、少しでも実りのあるものであることを祈念しております。それでは今日一日、よろしくお願いいたします。

(平成 30 年度「第 13 回無形民俗文化財研究協議会」挨拶より)

東京文化財研究所 無形文化遺産部長 飯島満



## 目 次

序にかえて

趣旨説明 無形民俗文化財のレッドリスト 久保田 裕道（東京文化財研究所）	1
---	---

### 第1部 報告

1. 祭り・行事の存続に向けて ―秋田県の事例から― 丸谷 仁美（秋田県立博物館）	7
2. 無形民俗文化財の継承と記録の役割について 森本 仙介（奈良県教育委員会）	23
3. 無形民俗文化財の危機から学ぶべきこと ―杉野原の御田舞を中心に― 蘇理 剛志（和歌山県教育委員会）	35
4. 麒麟獅子舞の保存伝承に向けた新たな取り組みについて 原島 知子（鳥取県教育委員会）	51

### 第2部 総合討議

コメント	63
ディスカッション	72

参考資料	88
------	----





## 趣旨説明

# 無形民俗文化財のレッドリスト

久保田 裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

久保田：それでは、早速、事例報告のほうに移らせていただきます。無形文化遺産部の無形民俗文化財研究室長をさせていただきます久保田裕道でございます。どうぞ、今日一日よろしくお願いいたします。

\* \* \*

## 1. 文化財の危機・民俗文化財の危機

### ① 文化財レッドリスト作成へ 伝統工芸の継承支援

最初に趣旨説明ということで、タイトルには「無形民俗文化財のレッドリスト」と挙げさせていただきました。「レッドリスト」といいますと、野生動物のレッドリストが本来のレッドリストなわけですが、今年の夏の報道で「文化財のレッドリスト作成へ、伝統工芸の継承を支援」ということが報道されました。文化庁のほうで、後継者不足で存続が危ぶまれる伝統工芸などを一覧にした「文化財レッドリスト」を作るということでございます。

私どもも、この報道で「そうなんだ」と知って、その後、何か動きがあるかなと思ったんですけど、まだ具体的な情報は何も入ってきておりませんので、どういうふうに進むのか分かりませんが、ともかくここに書いていますように、伝統工芸の継承支援のためにレッドリストを作るんだということでした。

もちろん伝統工芸も無形文化遺産の一部ですので、私どもに関わってくるのですが、今回テーマとしたいのは無形民俗文化財です。では、無形民俗文化財でレッドリストというものを作成することは可能なのか、という思いで、タイトルに挙げさせていただきました。

### ② 無形民俗文化財の伝統行事、20 県で 60 件休廃止

無形民俗文化財に関するショッキングな報道として、各都道府県、市町村のご担当のあいだでも驚愕の報道でもあったと聞きますが、2017 年の——『日本経済新聞』では 2017 年の 1 月 3 日でしたが——共同通信さんが行った独自の調査があります。この中で、20 県で 60 件の無形民俗文化財が休廃止になっているというふうな実態が報道されました。

私どもを含め、関わっている人であれば、たくさん休止があるというのは何となく分かっておりますから、今さら驚くわけでもなかったんですけども、これで驚いた方もいらっしゃるでしょう。県によっては、詳しい情報を提供したために数が明らかにされて、議会で問題になったというふうなことを聞きました。逆に、よく実態調査がされていないところでは大丈夫だったとも。

いずれにしても、こうした報道によって、無形民俗文化財というものが大変危機にあるんだということが世間に認知されていったのではないか、そういう一つのきっかけに——危機にあるということ自体は、もっと前からでありますけども——きっかけとなった報道だったと言えます。

### ③ 伝統の「鹿踊り」今年は見られない——61歳の主役が負傷、岩手・金ヶ崎

報道でもう一例あげますと、アメリカの経済誌『ブルームバーグ』の記者が、休止・廃止になった無形民俗文化財を取材したいと訪ねて来ました。そのときご縁のあった岩手県金ヶ崎町の「鹿踊り」を紹介したのですが、そこでは中心的な伝承者の方が怪我をされて、それ以来、休止せざるを得ないという状況になっていました。地域経済の観点から、そうした無形民俗文化財の休止・廃止がどのような影響を与えるかということで、非常に熱心に取材をされました。このケースは、無形民俗文化財というのは、例えば1人の方の怪我によっても危機に陥るんだということの、一つの事例でもあります。

以下は、私の今年度調査したところから、やや随想風にお話をさせていただきますと、9月に北海道で地震がございました。その2日後に、私は元々調査を予定していたもので、飛行機が飛ぶということで旭川まで行きまして、その近くにありますが深川市の獅子舞を見たんです。地震の2日後にもかかわらず、獅子舞はいつもと変わらず行われておりました。今日は北海道からお越しの方もいらっしゃると思うので、私がしゃべるよりもそういった方々にお聞きしたほうがいいと思うんですが、ごく簡単に言いますと、北海道には本州から渡った獅子舞がたくさんあります。この画像も香川県の人たちが開拓で持ち込んだ獅子舞です。非常に熱心にやっておられる。

そのすぐ隣の沼田町、ここにも「本願寺越中獅子舞」という、獅子舞に本願寺の名前がついているという、ちょっと驚く名前が獅子舞があります。ここでもやるはずだったんですけど、行ってみると、お祭りはやっていたんですが、今年から獅子舞はやらなくなったと。ちょうど今年から、もう子どもがいなくなって獅子舞ができなくなったと仰るんですね。大人の皆さんは神社に集まってお酒だけは飲んでいましたけども、獅子頭は公民館の倉庫に置かれておりました。地震うんぬんよりも、やはり子どもがいなくなってしまったというのが、非常に大きな問題であったわけです。

さらに、もっと北のほうに行きまして、羽幌町というところなんですけど。ここはもう休止しているという情報を得ていたんで、何か痕跡というか、道具とかを見れないかなと思って行きましたら、残念ながら道具も何も見れませんでした。しかも、さらに驚いたのは、この地区には立派な神社があるんです。ここも富山県の平という所から開拓に入った人たちの神社だったんですけども、こんな立派な神社の扉を開いてみたら、中はからっぽなんです。御神体が入っていたかと思う場所にも何もありません。まだ集落はあるんです。何軒か残っているんですけども、神社を羽幌町の中心部にある神社に合祀してしまった、お返ししてしまったというんです。獅子舞がなくなるだけならともかく、神社すら移してしまう、そういった状況にある北海道の厳しい状況というのを感じることができました。

また、この後、秋田のお話がありますので私が述べるまでもないんですけども。お盆の時に、秋田

の獅子踊りを幾つか見たんですけども、この獅子踊りは、見ていただくと、よい雰囲気であることがお分かりいただけるかと思うんですが、街の中でやって、お墓にも行って、獅子だけじゃなくて、棒術や大名行列、そういったものをやって、非常ににぎやかな感じの、地元の人たちががんばっている行事です。若い人たちがいるんで、ここは大丈夫なのかなと思っていたんですけども、話を聞いてみますと、やはり若い人が普段はいなくて、お盆なので帰ってきている。そういった子たちに一夜漬けで、さらには一夜漬けでもなくて、当日教えて、そのまま踊らせるというふうな形でやっているんだということを知りました。

この辺り、幾つもの獅子踊りがありまして、同じような日にやるので、なかなかまとめて見るのも大変なんですけれども、基本的に外部の人、観光客が見ている様子はなくて、何カ所か行きましたけども、外部の人は見ていない。でも、村の人たちがこうやって結構集まって見てるんです。村の人たちが、特にお年寄りなんか喜んで、若い子たちの踊りを見ていく。言ってみれば、何か村の運動会的なノリなんだな、無形民俗文化財の役割というのは、そういった村の運動会的な役割があるんじゃないのかなと思った瞬間でした。

一方で、これは、今年度の青年館での民俗芸能大会にも出演した富山県の新湊の獅子舞なんですけども、ここはものすごく盛んでして、若い人たちが熱心にやっていて、それを取り巻く観客たちもものすごい熱気で取り巻いて見ていく。5月15日にこの辺りに行きますと、もう何十ヶ所でそれぞれの獅子団体が門付けをして回っているんで、もうほんとに数百メートルごとに獅子舞がいるような状況で。昼間はそんなに観客が多くないんですけど、夕方になるに従って観客がどんどん集まってきて、こんなふうになにげやかに取り巻いて見ている。

そのように賑やかで、活気のある民俗芸能もまだまだあるんだな、この違いはどこにあるのだろうかというのが、今回の問題を考える上でも、1つのテーマになってくるのではないかと思います。

## 2. 無形民俗文化財のレッドリストは可能か？

それでは、先ほどの話にありました、無形民俗文化財のレッドリストは可能か、という話です。

ごくごく簡単にお話をさせていただきますけども、私どもで東日本大震災の時に「無形文化遺産情報ネットワーク」というものを作りました。これは組織としても作って、ウェブサイトでも作りました。それで、震災の被害を受けました無形民俗文化財、特に民俗芸能や祭礼の現状を示すという形で、図示してネットで公開しておりました。

この中に、その当時の状況、再開しているとか継続中とか、そういった情報がありますが、じゃあここに、例えば中断ということを書けるのかというのを、私どもも悩みました。結局、リストに、例えば「中断」「中止」とか書いてしまうと、たとえやりたくても中止と書かれてしまったというふうなことになってしまって、つまりはリスト化されることによって、その危機が現実化してしまうことを危惧しました。

それから、実際に今年はやらなかったけれども来年はやるかもしれないという状況を、「中止」と書いてしまっているのか。地元の人がもう絶対やらないというならともかく、そういう確約がないのに、また代が替わればやるかもしれない。そういったものを、果たしてレッドリスト的に書いてしまう方がいいのかどうか。あるいは、そのレッドリストに書かれたことで、あるいは伝承中のリストから除外されたことによって、本当に廃絶してしまうということがあるかもしれません。ですから、

レッドリストに書き込むことによって、デスノートみたいになってしまうという、そういう危惧があるわけです。

現在、私どもがやっておりますのは、その時に作った被災地の無形文化遺産データベースを基にして同じようなシステムを使って、とにかく全国にどこに何があるのかというのを、とにかく網羅的に収めたデータベースを作ろうとしています。各都道府県のご協力を得ながら、リストを作っている状況でございます。

そのリストは、今、実際に無形文化遺産部のホームページから見ることができます。まだ、和歌山県さんを中心としたごく一部のデータしか入っておりませんが、公開しておりますので、ご覧いただければと思います。併せて、それと連動した形でアーカイブス、これも画像や動画と結び付けて見られるようにしております。

### 3. さまざまなトピックス

さて、最後に、これまで、この協議会では、さまざまなテーマで問題を扱ってまいりました。例えば、「ひらかれる無形文化遺産」ということで、テーマにした回がございました。実はこれも、今日のテーマにつながってくる話です。この中で、報告書を見なおしていただくと分かるかと思いますが、その時に挙げた話題としまして、伝承者を拡大したらどうだろう。それまで駄目だった、例えば男性だけに限られていた所に、子ども、あるいは女性の方も入っていただく。あるいはUターンの方、あるいはIターンの外部の人、そういった者を入れていく。

それから、「享受者」という難しい書き方をしてしまいましたが、要は外部の人です。好きな、ファンの人たち、あるいは観光客、インバウンド、そういった人たちに向けての情報発信をどのようにするかといったようなことまで含めて、享受者の拡大ということが大切であると。ただやはり皆さん、そういう外に開くことに対しては、特に伝承者の方々にとっては、葛藤もあるということで、その葛藤も重要な点だと。

それから「無形文化遺産と防災」ということも、1度、テーマでやりました。防災、災害です。災害も東日本大震災を機に話題とはなりましたが、災害だけの問題ではなくて、日常的なリスクが災害によって一度に起こる、そういう問題です。やはり、今日、今回の問題ともリンクをしてきます。

その中で、無形民俗文化財の持つ意味というのが、より分かってきた。例えば、社会福祉へも寄与するという話がありました。それから、基本的には、地域コミュニティが持続可能な発展を遂げるための、そういうツールでもある。ですから、それが無くなるということはどういうことなのかということを考えなくてはいけないと思います。

そして、昨年が「ユネスコ無形文化遺産」でした。これも、「ユネスコ」という話となると、「ユネスコになるのもどうかね」といったような話題が出るんですけども、そうではなくて。本来、ユネスコの無形文化遺産というのは、世界遺産などとは全く違う制度で、「保護する」ということが一番念頭にあるわけです。あれによって、どう保護されるのか、無形文化遺産制度の中にも、緊急保護、グッド・プラクティスといったような保護を目的とした選ばれ方もあるわけです。それから、ユネスコの無形文化遺産になることを念頭に、あるいはなったことで、それぞれの団体がネットワークを形成する、そういった例が、例えば、山・鉾・屋台行事などでは出てきています。

そして、これは協議会のテーマではありませんが、昨今話題になっております文化財の「活用」で

す。民俗文化財をどのように活用するかという話ですが、民俗文化財は果たして活用できるのか、これは大きな問題だと思います。文化財機構の中にも文化財の活用センターというのがありますけれども、その中で、無形文化遺産は対象となっておりません。

そういった状況の中で、全国各地にあります民俗文化財を、どのようにアピールするのか、しないほうがいいのか。そして、他の文化財と違って、伝承者の方々が実際にいるわけで、そういった方々に負担を強いない活用というのは何かということ。アピールに関しては、どういうふうに魅力を発信するのか。それから、そもそも他の文化財とは違うんだということを理解しておかなくてはいけない。「負担を強いない活用」というのは、例えば伝承団体同士のネットワークに投資するということが必要じゃないか。あるいは、見る側です。見る側、外から参加する側、そういったところへ投資していくことが必要ではないかという、これは私のアイデアにすぎませんけれども、そんなことを書いてみました。

ですので、今回のテーマは、いろいろと捉えどころがある問題だと思います。そういったことを、今日一日かけて、みんなで考えていけたらと思います。

ちなみに、これは、私どもで作っております「いんたんじぶる」というファンサイト、無形文化遺産のファンサイトです。資料の一番下に URL を書いておきましたので、あんまり更新しておりませんが、ニュースだけはできるだけ載せるようにしようと思っておりますので、ご覧いただければと思います。どうもありがとうございました。



## 趣 旨 説 明

## 無形民俗文化財のレッドリスト

久保田 裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

## 1. 文化財の危機・民俗文化財の危機

## ①文化財レッドリスト作成へ 伝統工芸の継承支援

文化庁は 25 日、後継者不足で存続が危ぶまれる伝統工芸などを一覧にした「文化財レッドリスト」を数年かけて作成し、支援を強化する方針を決めた。リスト入りしたものは、担い手育成事業などを優先的に補助する。2019 年度予算の概算要求に文化財の次世代継承事業費として約 8 億円を盛り込む。（2018.8.25 日本経済新聞）

## ②無形民俗文化財の伝統行事、20 県で 60 件休廃止

都道府県が無形民俗文化財に指定した祭りや踊りなどの伝統行事のうち、継続的な実施が難しくなり休廃止されたものが 20 県で計 60 件あることが 3 日、共同通信の調査で分かった。（中略）文化庁によると、都道府県指定の無形民俗文化財は 2016 年 5 月時点で 1651 件ある。休廃止事例が多い県への聞き取りでは、背景として過疎や少子化、若者の都市部への流出などによる担い手減少を挙げる声が目立った。（中略）このほかに全国の市町村が指定した無形民俗文化財指定が同時点で 6264 件あるが、より零細な行事が多く、休廃止も多数あるとみられる。〔共同〕（2017.1.3 日本経済新聞）

## ③伝統の「鹿踊り」今年は見られないー61 歳の主役が負傷、岩手・金ケ崎

平安時代の「前九年の役」の古戦場として知られる岩手県内陸部の金ケ崎町では、何世紀も受け継がれてきた「鹿踊り」を今年は見送る。61 歳の主役の踊り手が背中を痛め、代わりを務める人がいないためだ。こうした話は金ケ崎町に限ったことではない。共同通信が 1 月に伝えた調査結果によれば、高齢化や人口減少を理由に 20 県で計 60 件の伝統行事が休廃止された。少子化と過疎化の進行に伴い、日本独特の文化的伝統の多くが失われつつある。（2017.2.7 ブルームバーグ）

## 2. 無形民俗文化財のレッドリストは可能か？

東日本大震災時の「無形文化遺産情報ネットワーク」

→リスト化されることで危機が現実化していく・リストから除外されることで認識されない問題

## 3. さまざまなトピックス

①ひらかれる無形文化遺産

②無形文化遺産と防災

③ユネスコ無形文化遺産

④文化財活用

無形文化遺産ファンサイト「いんたんじぶる」<http://intangible.tobunken.go.jp/>

## 事例報告 1

# 祭り・行事の存続に向けて

## ―秋田県の事例から―

丸谷 仁美（秋田県立博物館）

久保田：続きまして、事例報告の最初のご発表の方に移らせていただきます。まず最初に、秋田県立博物館の丸谷仁美さんからご発表いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

\*\*\*

### はじめに

秋田からまいりました丸谷と申します。聞き苦しいところもあるかと思いますが、どうぞご容赦ください。

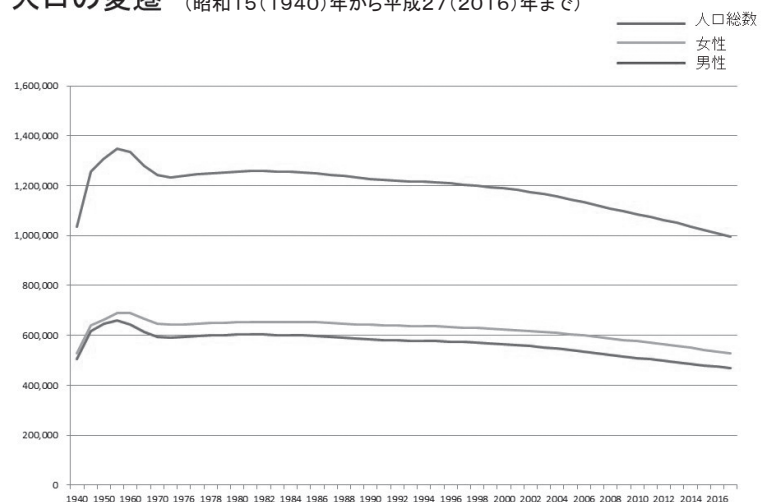
今回は「祭り・行事の存続に向けて」ということで、秋田県で祭り・行事を復活した例を2例ご紹介したいと思っております。後で皆さんから、いろいろなご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

まず、秋田県は東北地方の北部に位置しています。人口が97万8,754人(平成30年12月1日現在)で、100万人を切っております。

インターネットで調べましたら、全国の人口でも、秋田県は38位ということです。ただ、秋田県は海と山に囲まれておりまして、雪は多いんですけれども、やませの影響も受けにくく、気候の変動も受けにくい所です。

ただ、どんどん人口が減っていくことが問題になっておりまして、一昨年頃に、人口が100万人を切ったことが、県内で大きなニュースになりました。その秋田県の人口の推移を見てみますと、

人口の変遷（昭和15(1940)年から平成27(2016)年まで）



『秋田県勢要覧』より作成

図1 秋田県の人口の推移

図1は昭和15年から平成27年の人口の推移なんですけど、実はそんなにものすごく急激に落ちているわけではないんです。昭和20年代、30年代に急に人が増えましたけれども、そんなに変わってはいなくて、徐々に人口が減っているという状況です。

では、何が問題かというと、1世帯の家族数でして、圧倒的に1人世帯、2人世帯が多くなっております。お年寄りの1人暮らし、または老夫婦2人で暮らしているという世帯が多いことが、現在問題に

なっております。年齢別の人口構成をみますと、圧倒的に50代以上の男性、女性が多いという現状です。

こうした状況の中で、実は、秋田県は国指定の重要無形民俗文化財の数が一番多く、現在のところ、重要無形民俗文化財が17件ございます。民俗文化財に優劣を付けるということではないんですが、この指定になったことがマスコミ等で取り上げられると、民俗文化財に興味を持つ方が多くなってきて、観光振興や地域活性化として、民俗文化財を活用していこうではないかという話が盛り上がってまいりました。

これによって、祭り・行事を維持する試みがなされております。各市町村でも民俗芸能大会などが頻繁に行われてきて、県全体で民俗文化財を守っていこうという動きが広まりつつあります。しかし、なぜか平成に入ってから、行事を続けられない団体が増えてきたように思われます。

そういう状況の中で、地域の中で、祭りや行事を維持するためにどのような取り組みがなされているか、今日は2例ご紹介したいと思います。行事を中断した事例は数多いんですけども、その中で、復活した事例も幾つかあります。その中で、今回は、最近話題になってる「男鹿のナマハゲ」の復活例と、それから北秋田市の小正月行事の復活例について紹介したいと思います。

## 1. 男鹿のナマハゲ―男鹿市脇本飯ノ森の事例から―

### (1) 男鹿のナマハゲについて

ナマハゲ表記については、地元の男鹿市では「なまはげ」と平仮名で書くのですが、国指定の表記に従って、片仮名で表記させていただきます。

まず、男鹿のナマハゲとは集落の若者がナマハゲに扮して集落内を回り、怠け心をいさめ、無病息災や翌年の豊作を祈願する行事です。現在は12月31日の夜に、男鹿半島全域でほぼ行われているんですが、戦前までは旧暦の小正月、1月15日に行う地区が多かったです。昭和53年に「男鹿のナマハゲ」として、国指定の重要無形民俗文化財に指定されました。そして、今年、「来訪神：仮面・仮装の神々」の構成要素の一つとして、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。

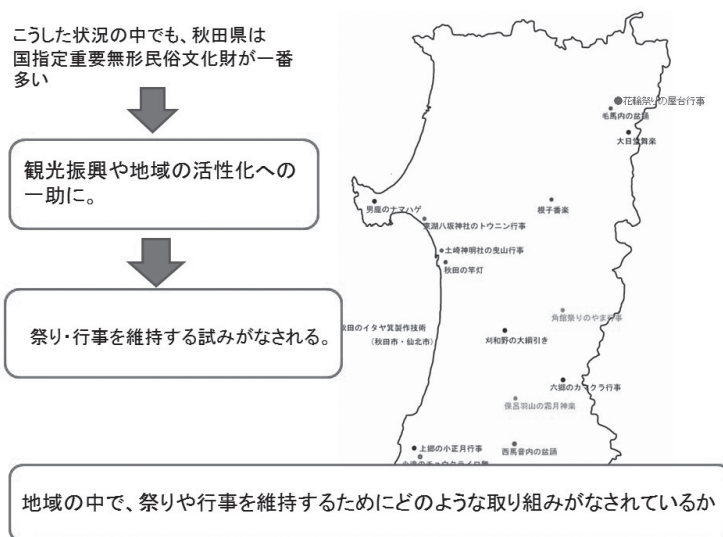


図2 秋田県の人口の推移



ナマハゲの記録というのは、あまり江戸時代に書かれたことはなく、よく取り上げられるのが図3の絵です。江戸時代の紀行家、菅江真澄が書いた「男鹿の寒風」の中の一場で、一番古いナマハゲの記録とされています。真澄が描いたナマハゲは角が生えていて、赤い面と、それから緑の面はひよっとこの面をかぶっているといわれています。

右が海藻でできた髪の毛を振り乱して、カラカと鳴る箱を身に着けて、家の中に入ってくる。左は、子どもとお嫁さんがおびえながら、ナマハゲに向かって隠れている図ですが、それを、この家の主人がナマハゲにお餅を出して取りなしているという図です。

図4は、2009年のナマハゲの様子です。大体、この鬼のような面をかぶりまして、「ケデ」と地元で呼んでいるケラ（藁）をまわって、ナマハゲの扮装をします。

まず、地元の神社でおはらいをしてもらってから、集落を回ります。基本は、集落全部の家を回りますが、その前の年に亡くなった人がいる家や、子どもが生まれた家には回りません。

図5は、皆さん、テレビでもよくご覧になっている映像かと思うんですが、悪いことをする子どもについて、昨年こんな悪いことをしたんだよというのを、あらかじめお父さんやお母さんから聞いておいて、その子を集中的に追い回して、「悪い子はいないか」というふうに言います。どうも子どもを追い回すイメージがあるんですが、前の年に結婚したお嫁さんやお婿さんにも、「いい嫁になれ」「いい婿になれ」というようなことも言います。昔のナマハゲは、お嫁さんのお尻をつねるというのをよくやっていました。そうしたことも、別にお嫁さんたちは嫌ではなかったという話でした。

これだけではなくて、お年寄りのいるお宅に行くと、お年寄りに「元気ですか。来年も来るから、来年まで元気にやってくださいよ」と言います。ですので、ナマハゲは子どもを追い回すというふうな恐ろしいイメージがありますが、お年寄りをいたわったりする面もございます。

ナマハゲが一通り子どもを追い回した後は、家の主人が出てきて、ナマハゲにお膳を振る舞います。このお膳を振る舞って、「よく来てくれました」とナマハゲをねぎらうと、ナマハゲは去っていきます。ナマハゲのケラから、藁がたくさん落ちるんですが、この藁は翌日までそのままにしておきます。藁が飛び散ることで家が繁盛するというふうにいわれています。また、その藁を頭に巻いたりすると、



菅江真澄「男鹿の寒風」(文化8年(1811))

図3 一番古いナマハゲの記録



神社から出発する

図4 男鹿市上金川のナマハゲ行事



悪い子はいないか〜

図5



家の主人がナマハゲをねぎらう

図 6



ナマハゲのケラはムウの境などにつけておく

図 7

病気が治るともいわれています。

ナマハゲが着ていたケデ（ケラ）なのですが、ナマハゲ行事が終わると、神社の境内のこま犬などに巻き付けます。男鹿にいらっしやると、ケラが巻かれたものをご覧になることがあると思うんですが、ナマハゲのケラは基本的にこのまま付けたまにします。

## (2) ナマハゲの現状

こうしたナマハゲの行事について、男鹿市が平成 27 年度にナマハゲの悉皆調査をいたしました。平成 27 年に実施した調査によりますと、83 町内で実施していることが分かりました（図 8）。

次に、図 9 の薄い色の印を付けた所なんですけれども、薄い色の印を付けた所は、昭和 40 年代から平成に入るまでにナマハゲが中止になった地域です。大体、平成に入るまでにナマハゲを中止した地域は、12 集落ありました。

次に、こちらの濃い色の印を付けた所ですが、これは平成に入ってから平成 27 年までにナマハゲを中止した集落です。これをみますと、平成に入ってから 30 集落でナマハゲ行事を中止しています。ナマハゲの悉皆調査の報告によると、平成 6 年から 7 年にかけて中止したという所が多いです。かなりまとまった地域で一斉に同じ年に中止しているという例がみられます。

平成に入ってから祭り・行事、民俗芸能が行われなくなったというのは、実は今、由利本荘市という市で番楽の調査をしているんですけども、番楽に関しても、平成に入ってからやめたという所が多いんです。これは秋田県だけのことなのか、他の都道府県さんでもそうなのかということを後でご教示いただければと思います。



図 8 ナマハゲが行われている集落



図 9 ナマハゲを中止した集落

### (3) 男鹿市飯ノ森のナマハゲ行事

たくさんのナマハゲが平成に入ってから中止されているという状況の中で、本日は、一度は中止したけれども復活したというナマハゲ行事の事例について、ご紹介したいと思います。

#### ① 地域の現状

男鹿市脇本飯ノ森という男鹿半島にある農村地帯の集落です。こちらは現在 60 軒ほどの戸数があります。

ナマハゲの行事全体は 12 月 31 日が中心なのですが、12 月中旬にナマハゲの装束であるケラ、ケデ編みのために、集落の男性たちが集まります。そして、31 日にナマハゲ面をかぶって、そこから神様になって、ナマハゲとして回ります。

昭和 30 年代、40 年代の方々は、高校を卒業したら自然にナマハゲをやるもんだと思っていたそうです。ナマハゲをやる日というのは、若者たちの無礼講の日、若者が何をしてもいい日だと言われていたそうです。

#### ② 中断の理由

それが、平成 15 年に中断されました。なぜ平成 15 年に中断されたかという理由をちょっとこれからお示したいと思います。中断の理由その 1 は、ナマハゲが暴れて、藁が落ちること。藁が落ちることは、本当は家を繁栄させることなのですが、藁が落ちることによって家の中が汚れるのが嫌だ。それから、ナマハゲは必ず、各家を訪ねた時にお神酒を頂くんですけれども、そのお神酒は必ず飲み干さなければいけないという決まりがあり、どんどん酔っ払っていきます。ナマハゲが酔っ払って家のものを壊して家の中を荒らすことが中断の理由のその 1 です。



家の中が汚れる  
ナマハゲが酔っ払って家の中のものを壊す

図 10 中断の理由その 1

その 2 は、飯ノ森集落では大体、夜の 9 時すぎぐらいまでナマハゲ行事が行われました。集落によっては、12 時すぎぐらいまでかかったのも、ナマハゲをやるほうも、家で待ってるほうも大変疲れました。12 月 31 日は「紅白歌合戦」があるので、「紅白歌合戦」をゆっくり見たいというのが、理由のその 2 になります。

もう 1 つの理由がナマハゲ膳です。ナマハゲにお膳を出してもてなすというのが、非常に煩わしいということです。ナマハゲのお膳は、大体 3 品ぐらい付けるそうで、お正月のごちそうなどをお膳に盛ります。ただし、ナマハゲがお膳に手を付けることは、ほとんどありません。家に行ったらお神酒だけ頂いて、また次の家に行くというものなんですけれども、ナマハゲへのお供え物なので、お膳は作らなければ



大晦日はゆっくり過ごしたい(紅白歌合戦を見たい)

図 11 中断の理由その 2





ナマハゲ膳など作ってもてなすことがわずらしい

図 12 中断の理由その 3



ナマハゲになる人がいない ◀ 最大の理由

図 13 中断の理由その 4

いけないことが暗黙の了解になっており、女性たちにとって非常に面倒な作業になりました。

中断の理由のその 4 として、これが一番大きい理由なんですけれども、ナマハゲになる人がいなくなってしまいました。この集落でも小学校、中学校のお子さんを持っているようなお父さんが、半分ぐらいに減ってしまったと聞いています。ナマハゲというのは大体 30 代ぐらいの男性がやると決まっていたんですが、若者がいなくなったため継続することができませんでした。

平成 15 年に一回やめましょうという話が出たとき、特に集落の人たちには異論なく、すんなり自然消滅という形でやめたそうです。

### ③ 復活に向けて

それから 10 年以上、ずっとナマハゲは行われていなかった地域が復活することになったのは、平成 27 年度に男鹿市が 148 町内で実施したアンケート調査がきっかけになっております。

集落では、ナマハゲが中止になっても寂しいという意見はあまりなかったのですが、年配の方々のなかには、「ナマハゲを自分たちが死ぬまで見られないのは寂しい」というような意見もちろほら出ていました。ちょうどその時に、男鹿市が大々的に男鹿市全域でナマハゲに対する実態調査をしたため、ナマハゲに対する意識が変わってきました。

アンケートを実施した調査員が、中止しているとか中断しているという集落を度々訪れて、もう一回復活しないですか？というような意見を投げ掛けていたんです。そういった投げ掛けもあって、少しずつナマハゲ行事を復活しようという機運が高まっていきました。

復活に向けては、今までの行事を少し改善しなければいけないということで、まず行事時間を大幅に短縮しました。午後 9 時までかかっていたナマハゲの行事を、7 時半までには終了するようにしました。

それから、ナマハゲ膳の簡素化ということで、以前は立派なお膳を出さなくてはいけないということだったんですけど、出さなくてもいいと、それを集落の人たちに周知するようにいたしました。

それから、ナマハゲを行うに当たって、ナマハゲが家に行っていないかどうか、事前にアンケートを実施することにしました。

こういったことで、平成 15 年までは、ナマハゲ行事とは若者が自由にできる日、無礼講を行える日だったんですけども、ナマハゲを迎える家の人の立場を考えるように、迎えるほうの気持ちを優先しましょうというふうに、集落全体でだんだん考え方が変わってきました。

図 14 は実際に行ったアンケートです。こちらの 2 番目に、ナマハゲを迎える側についてという項目で、a は都合により辞退したい、入らない。b は家に入ってもいいが、座敷には上がらないでほしい、玄関先でやめてほしい。c は自由に座敷に上がってもいい。ということをアンケートであらかじめ聞いておいて、当日、このとおりに家の中に入りました。

もう一つ復活に向けて非常に大きな力になったのが、「七日会」という存在です。七日会というのは、集落内の有志団体なんですけれども、昭和 50 年代に幼稚園や小学校に通っていた子供の父兄たちでつくった有志の会です。毎月 7 日に集まって飲み会をしましょうという会で、この会がずっと続いていて、現在 30 人ほどが会に入っております。

ナマハゲの復活は、最初、七日会のメンバーの 1 人に、男鹿市のアンケートを調査した人が話を持ち掛けて、じゃあ、やりましょうかということになりました。まずその人は「郷会」といわれている町内会に話を持っていったそうです。でも、町内会ではなかなか話が進みませんでした。次に、比較的若い人たちで組織されている消防団へ話を持ち掛けるんですが、そこでも話が進みませんでした。

今、七日会のメンバーというのは 60 代、70 代が中心で、町内会の役員になってる人が、ほぼいらっしやいました。今回は、町内会員になっている七日会のメンバー一人一人に、ナマハゲをやらないですかというふうな声掛けを辛抱強くしていきました。その結果、最終的に役員全員の同意を得ることができました。

ちょっと余談になるんですが、ナマハゲを引退する年齢についてです。男鹿市ではナマハゲの調査を昭和 52 年と平成 27 年に大規模な悉皆調査をしております。図 15 は、この結果を男鹿市の天野荘平さんという方がまとめたものです。ナマハゲを引退する年齢なんですが、昭和 52 年度は圧倒的に 30 代が多かったんですけれども、平成 27 年では 50 代、60 代、場合によっては 70 代までやるというふうになっています。七日会の人たちも 60 代、70 代が中心なので、自分たちがナマハゲをやりましょうかということで、ナマハゲの復活につながりました。

実際に昨年の 12 月 31 日にナマハゲ行事が行われたんですけれども、事前のアンケートでは、飯ノ森集落 60 軒中、座敷までナマハゲが上がってもいいというふうにいわれたのが 30 軒、玄関先のみにしてほしいというのが 8 軒でした。

ただ、行事が終わってみると、60 軒中、最初は玄関だけにしてほしいといった所も座敷に上がらせてくれた、それから、うちには来ないでほしいといった家もご祝儀のみで参加するということがありまして、60 軒中 43 軒が、何らかの形で行事に参加してくれることになりました。

当初は、ナマハゲを七日会の 60 代、70 代のメンバーが行う覚悟をしていたんですけれども、実際には他県に住んでいて実家に戻ってきた飯ノ森出身者

1) ナマハゲの開始時間 18 時頃出発

2) ナマハゲを迎える側について

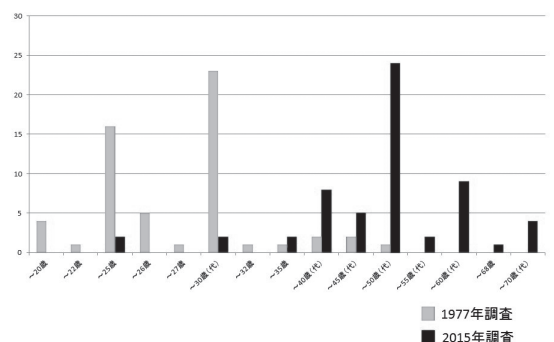
A 都合により辞退したい

B 家に入ってもいいが座敷に上がらない

C 自由に座敷に上がってもいい

3) お膳は準備しなくてもよい

図 14 ナマハゲ実施時のアンケート



天野荘平 2017「ナマハゲ行事の現状をどう見るか〜これから行事の伝承を続けるために〜」より

図 15 ナマハゲ引退の年齢

の若い人たちが、ナマハゲを行ってくれました。昨年やってみて非常にナマハゲが楽しかったということで、来年も帰ってきて、ぜひナマハゲをやりたいという人が増えたそうです。

飯ノ森集落では今年もナマハゲを行う予定なんですけれども、飯ノ森は男鹿市の中でも比較的古くからこの集落に住んでいる人たちがほとんどの集落です。ですので、話し合いもその七日会という会を中心にして進んだんですが、男鹿市の中でも新興住宅街といわれてる所ではお正月には実家に帰ってしまう人々が多く、ナマハゲを行うことができないというような現状も抱えております。

ですので、集落の事情によって、復活の度合いですとか、存続の度合いは違うんですけれども、こういった事例を紹介させていただきました。

## 2. 葛黒<sup>くそくろ</sup>の火祭りかまくら行事

### (1) 火祭りかまくら行事について

次に、「葛黒の火祭りかまくら行事」という行事の復活例を紹介させていただきます。

#### ① 地域の現状

葛黒は北秋田市の北部に接する集落です。七日市という親郷がありまして、七日市の本村から車で大体15分ぐらい行った所にあります。小猿部川という川がありまして、その川の流域に沿った集落です。農業と林業を行っております。

戸数は昭和30年代までは50軒ありましたが、現在は24軒です。1人暮らしの方も多くて、今、小学生のいる世帯は2世帯ぐらいしかありません。60代が若いといわれる集落です。

火祭りかまくら行事がどういう行事かというところ、伝承によると、宝暦年間、江戸時代後期ごろから集落で行われていたといわれています。ただし、文献記録はありません。行事内容は、旧暦小正月の前日1月14日に、稲わらや正月飾りを巻いたご神木を燃やして、無病息災や豊作を願うというものです。

平成10年に中断して、平成16年に復活しますが、また数年で中断しています。これは自然消滅という形ではなくて、何年も何年も集落で、やめるかどうか、何度も集落で話し合っ、苦渋の決断としてやめることになったということです。

実際にどういう行事かといいますと、こちらが葛黒の里山なんですけれども、ここから約10メートルの大木のクリの木を切ってきて、ご神木にします。ここに、わらや正月飾りを付けます。本来、この火祭りかまくら行事というのは、子どもの祭りというふうにいわれていて、準備だけ大人が手伝います。



10メートルほどの木を伐り、ワラや正月飾りをつける

図16 葛黒の火祭りかまくら行事



雪原に立てる

図17





神木のまわりに作ったかまくらへ供え物をする

図 18



神木を燃やす

図 19

切り出した神木を、雪の原の中で一斉に立てます。木を切ってくるところから、この木を燃やすまで 1 日で行われていました。今、実際には人がたくさん集まっていますが、中断する前までは葛黒の集落の人たちだけで行っていました。ですので、他の人はあまり知らず、集落内でこじんまり行われていた祭りです。

夜になると、ご神木の所に大きなかまくらを作ります。その大きなかまくらのそばに、集落の家の数だけ小さなかまくらを作って、ここに家の人たちがそれぞれお供え物をします。この小さなかまくらについての伝承は残念ながら集落には伝わっておりません。

夜になると、この 10 メートルのご神木を燃やします。この時、子どもが「おーい、かまくらのごんごろう」と叫んで、この木が燃えるのを見えています。

こちらの木なんですけれども、燃えると、全部その場で細かく切りまして、この木のかけらを家の中にそれぞれ持っていきました。以前はいろりにくべたということなんですけど、今は家に持ち帰ると風邪などをひかないというふうにいわれています。



燃えた木片を持ち帰ると風邪などひかないという

図 20

## ② 中止の理由

こういった行事なんですけれども、中断理由のその 1 として、行事の担い手がないということが大きな理由です。10 メートルの木を立ち上げるのに大勢の人が必要なのに、現在 24 戸、しかもお年寄りが多い集落では、なかなか担うことができません。この木を立てるのも、簡単そうにやっていますけれども、実は非常に大変で、熟練した葛黒集落の人たちが指揮をして行わなければなりません。

もう一つ、集落の人が中断理由として挙げるのが、ご神木に巻く藁が確保できないということです。藁が確保できないことが理由で、この行事が中断されたというんですが、人がいなくて続けられないというのが、一番大きな理由でした。

一時期、平成 16 年に復活するんですけれども、その時は集落で行ったのではなく、町村合併前の鷹巣町観光協会が町のイベントの一環として、この火祭りがかまくらを実施しました。この時は葛黒集



行事の担い手がない

図 21 中断の理由その 1



神木に巻くワラが確保できない

図 22 中断の理由その 2

落ではなくて、道の駅で実施しました。ですので、集落の人にとっては、別の祭りのように感じられたそうです。その後、市町村合併で鷹巣町が北秋田市になりまして、なおかつ木を立てるために大勢の人が必要だという理由で、中断されてしまいました。

### ③ 復活に向けて

このような祭りなんですが、復活に向けてどのような動きがあったかというのと、まず集落にあった「おさるべ元気くらぶ」という団体が大きな役割を担っています。

「おさるべ元気くらぶ」というのは、七日市を元気にしようとする会で、葛黒を含む七日市全体を元気にするための会です。七日市にある竜泉寺の住職さんが発起人で、小学校の校長先生や公民館長などに声を掛けて、元気くらぶを平成 24 年に発足しました。おさるべ元気くらぶの目的は、七日市の肝煎で、親方の家といわれていた「長岐家」という名家があるんですが、県の公文書館にある長岐家の文書を探ることによって、七日市の集落の歴史を知り、地域を盛り立てるということでした。

火祭りがまくらについては、発起人の住職さんが祭りを復活できれば、七日市も活性化するんじゃないかという思いを持ちまして、まず、おさるべ元気くらぶの方々に復活の話を持ち掛けました。おさるべ元気くらぶの中から、問題点をいろいろ解きほぐしていった、その後、長い日にちをかけて話し合いを持ちました。

集落の人たちは、別にやめたくてやめた祭りではないから、一回復活するといわれてもすぐにやめられては困るということで、最初はすごく抵抗があったそうです。それを集落の人、一人一人を説得して、最終的に祭りをやりましょうとなるまで 1 年間かかったそうです。

復活に向けて約束したのは、葛黒の人には迷惑を掛けないということでした。ご神木を切るとか、ご神木を立てる指揮は集落の人たちにやっていただきますが、そのための準備や資金集め、人員配置などは、おさるべ元気くらぶが中心で行いました。

この資金の調達については、初めての試みだったんですが、県の信用組合のクラウドファンディングを利用しております。これに国や市の補助金を足して、運営をしております。

それから、小中学生を動員します。木を立てるものに関しては、JA（農業協同組合）の若者が非常に大きな役割を担っています。

おさるべ元気くらぶの人たちが中心でやるんですけども、葛黒の人たちにも自分たちで定期的に勉強会を開いてもらって、自分たちの祭りがどういったものかを勉強してもらおう機会を設けることに



しました。

図 23 は、祭りの時に子どもたちが稲藁を集める様子です。今は稲藁をあらかじめ集めているため、現在では行われていないのですが、こんなふうに、あえて行事の再現をして、子どもたちに協力してもらうことによって、祭りに参加しているという意識が高まってきました。

こういったことがありまして、平成 26 年に復活して、来年で 6 回目になります。去年は 500 人ほどの人が参加したそうです。以前は旧暦 1 月 14 日に行っていたんですが、3 年ほど前から 2 月第 3 日曜日に行うということにしております。今のところ、継続して行う予定で、祭りがあるたびにマスコミにも取り上げられるので、葛黒の人たちの励みになっているということです。



子ども達が稲わらを集める

図 23 稲藁を集める子ども達

### 3. 2つの事例の比較

では、この 2 つの事例について比較をしてみたいと思います。

#### 共通点

まず、共通点なんですが、飯ノ森のナマハゲ行事、それから葛黒の火祭りかまくら行事に関しても、集落にあった伝統的な集団ではなくて、任意につくられた有志団体が行事の復活への大きな力になっていました。それから、自分たちが楽しむというよりは、参加する人たちが無理なく楽しめるような行事をどうやってつくったらいいか、試行錯誤しています。祭りの復興とはイベントではない、とよくいわれるんですが、数年後ではなく数十年後、数百年後、できれば続けていきたいという思いがありますので、その都度、さまざまな問題点について、柔軟に対応して解決していくことが必要だと思います。

#### やや異なる点

祭りに対してやや異なる点ですが、飯ノ森のナマハゲ行事に関して、今は、ナマハゲ太鼓ですとか、ナマハゲ踊りですとか、ナマハゲのマスコットですとか、今、いろんな観光化に向けてのものはあるんですけども、本来、ナマハゲ行事というのは集落内で行う行事であって、観光客の対応は考えておりません。

ただ、飯ノ森のナマハゲ行事でも 12 月 31 日に観光客にどう見せるかというのが、実は今年、ユネスコ無形文化遺産になって、新たに出てきた問題になっております。この観光化と男鹿のナマハゲ行事をどうするかというのを、いろいろ試行錯誤しながら話し合っている状況です。基本的には、集落では観光客の受け入れはあまり考えていない。そこをどうするかというのが、今、問題になっています。

葛黒の火祭りかまくら行事に関しては、先ほど映像で少しお見せしたんですけども、木を立てる

等々に関して大勢の人の協力が必要なので、観光化というか、開かれた行事にしたいと考えています。

おさるべ元気くらぶでは、冬の葛黒の小正月行事だけではなく、夏も沢歩きツアーなどを企画して、できれば、葛黒と周辺の集落を知ってもらおう努力をしたいとおっしゃっています。今、葛黒集落の方にもその話を投げ掛けているんですが、賛成する方もいらっしゃるんですが、反対される方もいらっしゃるんで、時間をかけてじっくりと話し合う必要があると感じているそうです。

## まとめ

この2つの事例は、集落をよく知っている人たちが自主的につくった有志団体が大きな役割を担っております。集落をよく知っているからこそ、いろいろ話し合っ問題点を解決することができています。

今日は行政の取り組みの話ができなくて申し訳ないんですけども、行政やマスコミ、観光客と、集落の人たちが、上手に関係を保ちながら、集落の人たちにとって自分たちの祭りがどういうものかということを理解を深めてもらうことで、祭りを続けていく原動力になると思います。それをこの核となる団体が一生懸命働き掛け、起爆剤みたいな役目で頑張っているということです。

けれども、問題点として必ず挙げられるんですけども、今挙げた、復活で努力したという有志団体、この2つの有志団体とも60歳以上の団体で、若い人が少ないといわれています。こういった祭り・行事の運営に関して、有志団体も高齢化しているので、どういう形で続けていけるかは、今後の課題になっております。

いろいろと不明な点もありますが、今回、秋田の2つの事例を申し上げました。各地の復活事例や存続のいろんな試み等について、後で皆さまからご意見いただければと思います。まとまらない話で申し訳ないんですが、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



## 無形民俗文化財研究協議会

## 祭り・行事の存続に向けて―秋田県の事例から―

2018 年 12 月 14 日（金）

於 東京文化財研究所

秋田県立博物館

主査（兼）学芸主事 丸谷 仁美

## はじめに

秋田県内では少子高齢化やその他の理由によって、各地で祭り行事の存続が危ぶまれている。その一方、重要無形民俗文化財が日本一多いことから、集落で行われている祭りや行事を、地域の活性化に利用しようとする動きがある。

ここでは祭り・行事の復活と存続に尽力している 2 つの地域の事例を取りあげ、復活への取り組みや祭り・行事に対する姿勢などについて考察をくわえたい。

## 1. 男鹿のナマハゲ―男鹿市脇本飯ノ森の事例から―

## 1) 男鹿のナマハゲについて

大晦日の夜（昭和 20 年以前は小正月）、集落の若者がナマハゲに扮して各集落をまわり、怠け心を戒め、無病息災や翌年の豊作を祈願する行事。

昭和 53 年（1978）「男鹿のナマハゲ」として重要無形民俗文化財に指定

平成 30 年（2018）「来訪神 仮面・仮装の神々」の構成要素の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。

## 2) ナマハゲの現状

現在、83 団体の地域でナマハゲが行われているが、平成に入ってから行事を中止した集落も多い。

## 3) 男鹿市飯ノ森のナマハゲ行事

## ①地域の現状

男鹿市脇本地区の農村地帯にあり、約 60 戸の集落である。

## ②中止の理由（平成 15 年から中止）

- a. ナマハゲが暴れて家の中のものをこわす
- b. 大晦日はゆっくりすごしたい
- c. 膳などを作ってナマハゲをもてなすことが面倒

## ③復活に向けて

七日会の存在 ←有志団体が町内会などに働きかけた。

七日会・・・地元の小学校の父兄らが中心となり、昭和 50 年に結成された会。

人々の意識の変化（マスコミ等で取りあげられることによって、気運が高まる）

## 資料 2-2

### ④今後の課題

今年、ユネスコ無形文化遺産への登録を受けて、5 集落がナマハゲ行事の復活を試みている。復活後、今後行事を継続していくための対策について検討していく必要がある（→有志団体の高齢化）。

## 2. 葛黒の火祭りがまくら行事

### 1) 火祭りがまくら行事について

北秋田市七日市葛黒集落に伝わる小正月行事。旧暦小正月の前日に、稲わらや正月かざりを巻いた神木を燃やして、無病息災や豊作を願う。

伝承では江戸時代後期から始められたと伝えられている。平成 10 年に中断。平成 16 年頃に復活するがまた数年で中断した。

### ①地域の現状

北秋田市の北部の林業地帯に位置する集落。現在 26 戸で高齢の人が多い。

### ②中止の理由

- a. 人材が確保できない
- b. 材料となるワラが調達できない

### ③復活に向けて

おさるべ元気くらぶの存在 ← 地域の有志団体が復活への気運を盛り上げる。

おさるべ元気くらぶ・葛黒集落を含む小猿部川流域の地域有志団体が平成 24 年に発足した会  
観光化に向けて積極的に活動する。

### ④今後の課題

費用面や人材の確保で行事を存続することはまだ難しい。  
行事を維持するために、新たな対策を打つ必要がある。

## 3. 2つの事例の比較

共通点：任意の有志団体の存在

参加者の気持ちにたって考える祭り・行事を作る。

やや異なる点：積極的に外に働きかけるか、集落内で祭り・行事を維持していくか。

## まとめ

今回取りあげた 2 つの事例では、祭り行事を存続するために有志団体の活動が大きな役割を担っていることが分かった。集落が祭りや行事を維持するためには行政の力や観光化などの視点も必要になると思われる。その時々で協力を仰ぎつつ、集落内で祭りや行事を存続するための力を蓄える必要があると思われる。



## 事例報告 2

# 無形民俗文化財の継承と記録の役割について

森本 仙介（奈良県教育委員会）

**久保田：**続いて、お二方目のご発表に移らせていただきます。奈良県教育委員会からお越しの森本仙介さんに「無形民俗文化財の継承と記録の役割について」ということで、お話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

\*\*\*

**森本：**こんにちは。奈良県から来ました、奈良県文化財保存課の森本と申します。よろしくお願いいたします。

今日の発表は、行政のほうで行っております無形民俗文化財の継承の支援と、それから記録保存に関する事業報告になると思います。よろしくお願いいたします。

先ほど久保田室長がお話しされたものと同じ記事なのですが、去年の『日本経済新聞』に20県で60件が休廃止という記事が出ました。実は、今年も確か別の新聞社から同じようなアンケートが来ていたかと思います。

これは『奈良新聞』という奈良県の新聞に載ったものですが、ここに各都道府県の指定無形民俗文化財の休廃止状況の一覧表が載ってまして。千葉、それから宮城、熊本ですね。熊本と宮城に関しては、震災の影響だと思うんですけど、休廃止が多い。また、今日もこれから発表のある和歌山県と、それから奈良県も4件ということで。ただ、実際にはたぶん皆さんちゃんと答えてないだろうと。ちゃんと答えた所がこういう数字として出てきてるのかなというのが、正直なところです。奈良県は正直に答えたので4件というふうになっています。

お配りした資料について、2枚目の映像記録の表（資料4）ですが、こちらに奈良県の国指定、それから県指定の50団体のものがあります。この中で、今ありました4団体、「\*」の印を付けた所が休止してる所です。この休止しているものに対して、どういうふうに県、行政として取り組んでいくのか。日経新聞の調査ですと、ここ10年ぐらいでどうなりますかというような問い掛けもあったかと思います。実際、これはどこでも一緒だと思いますが、これから、あと10年、20年後にはどうなっているかわかんない。私がやっているのは指定文化財が中心にはなりますが、その中で将来の継続に対してどういう取り組みをしているかっていうことをちょっと話させていただけたらと思います。



# 1. 無形民俗文化財の調査

奈良県では、まず無形民俗文化財の調査を平成16年頃から始めています。私は、平成16年には、まだ今の文化財行政にいませんでした。元々は県の博物館にいたんですけれども、まず前任者の浦西勉が平成16年、それから平成21年に町村史から抽出する形で民俗芸能と祭礼・年中行事のデータベースを作りました。その後、私の代になり平成23年に課内にありました民俗写真のデジタル化とデータベースを作りました。

以上の段階の後、平成18年から20年度にかけて、祭り・行事調査を実施しました。文化庁の緊急調査です。奈良県は実はそんなに早くないんです。今、兵庫県と京都府が調査をしています。奈良県も平成18年に祭り・行事調査、それから、民俗芸能調査のほうは平成23年からやっております。

奈良県では、まず平成18年から20年に祭り・行事調査をやったんですけれども、平成23年から25年にかけては民俗芸能緊急調査ということで、3年間かけてやりました。

元々データベースがありましたので、それに基づいてデータを抽出しまして、悉皆調査、それから詳細調査を行いました。39市町村で、71名の調査員にお願いしたわけです。この時に目標としたのは、まず芸能だけに限定しないということ、つまり芸能を取り巻くというか、芸能が行われる祭礼全体の記述をしてくださいというふうに、調査員にはお願いしました。それから、写真とか映像をできるだけ撮っていただいて、それを提出してもらい、県のほうでアーカイブとして保存しました。

それからもう1つは、文書はほぼ写真を撮って、できるだけ翻刻をしました。つまり、記録をするということ、まず一番に考えたわけです。

この3年間の調査で、実は奈良県の場合は、指定になってるものでも詳しい調査がないものが多いので、これを機会に県指定、国指定の調査も行う。それから、もちろん現状がどうなってるかということ調査しました。その中で、いろいろ現状の問題が分かってきたということがあります。

報告書ですが、これはPDFになってます。実は文化庁の規定で300部と決まってるんですけれども、PDFで足りない分はお渡ししてる状態です。こういうふうにかなり翻刻を入れたり、写真なんかもかなり入れて、記録をするということを試みました。860ページになって、ページ数がオーバーしましたので、実は補助金でできたのはPDFまでということになります。印刷は、別の民間の助成をいただいて、印刷をしました。

以上の調査で全体の現状を把握した上で、次は存続が危ぶまれてるものに関して、特に集中的に、それぞれの報告書を作ったり、あるいは記録を撮るということを目指しました。それが平成23年あたりから30年ぐらいまでで、それが次に紹介した単独の文化財を対象とした映像記録や報告書の作成ということになります。

奈良県教育委員会 Nara Prefectural Board of Education		2017年2月7日	
奈良県祭礼・年中行事		CODE: 002024	
カード	204-02-0099	区分	祭礼・年中行事
行事	農耕・儀礼(苗代まつり・焼米タマリ)		
地域	大和高原(東山中)		
名称	水口祭り		
カナ	ミナクチマツリ		
行事日	新暦	4月	初旬 ~ 頃
伝承	天理市 福住 福住		
場所	田(苗代の水口)		
主体	家、子供		
概要	ナツノロシメが終わるとミナクチに正月の予祝儀礼でもらったもの、福住では氷室神社のオンダにもう杉枝、勘定所の柳の木・鬼打ちの矢とヤマブキ、ツバキなど華やかな花を立て、焼米を供える。ムラの子供はこの日「ヤッコくれやなドンガメはなそ」とはやしなからヤッコをもらって回った。この習俗は山地のムラでは戦後まで行っていた。残った卵産子を焼いてミナクチに供え、田植の時には作ってハナコといったりするのは、焼米に呪術性を考えていたからである。		
芸能			
神韻	焼米		
食	焼米		
製作物			
用具	杉枝・柳の木・鬼打ちの矢とヤマブキ、ツバキ		
植物	杉枝、柳の木、山吹、椿		
分類番号		地域番号	06
資料			
文献	史18		
書名	改訂天理市史 下巻	頁	334 335
報告者	保仙純剛 尾田正幸		
参考			
特記			

図1 奈良県祭礼・年中行事データベース



## 2. 調査報告書（単独の文化財対象）と映像記録の作成

報告書もそうなんですけども、映像記録を撮ることに、県のほうとしては力点を置きました。特にこの新聞に写っている「丹生の太鼓踊り」ですが、メンバーが7人になっていて、休止がもう十数年間続いています。唯一の指導者の方も、もうかなり高齢でしたので、急を要しました。

いろいろ働きかけ等ははしていたんですけども、なかなかうまくいかないということがあり、取りあえず、撮れる時に記録を撮っておこうということを考えました。記録と、それから報告書です。長らく休止していましたので練習を半年ぐらいしていただきまして、それを撮影をして、いわゆる模範演技という形で残しました。

それから、もう1つは報告書で歌詞の分析とか、あるいは音楽的な分析をしています。

これは賛否両論あると思うんですけども、一応五線譜に起こして、それを映像に付けて、教則ビデオをこの時は作りました。これは教則のものも入ってるんですけども、地元配って利用して

もらうように、学校とかに配って利用してもらうようにしました。撮った映像は、データベースとして、保存会と町役場の方にお渡しして、利用できるように考えました。

ただ、指導者だった方が、これができた年に亡くなってしましまして、正直なところ、復活が難しくなっています。こういう言い方もどうかとは思いますが、記録として残しておけば、復活がそのうちできるかもしれないと思っています。記録自体はもう撮れなかったらそれで終わりです。ので、できるだけ詳細な記録を撮る。この時には、カメラを何台か、正面とか横とか、それから後ろからとか、様々なアングルで撮って、残したという形です。それをデータベースとして、過去の映像とか、あるいは音源なんかも全部アーカイブとして入れて残しています。

それから、「オコナイ行事」という正月のいわゆる修正会です。野迫川村という和歌山県境の高野山麓で、ここは5年間休止をしています。集落が今ほとんど、十数人しかいなくて、一番若い方で50代後半という村なんですけど、こちらは、実は地元のほうから要望がありました。最後にやるので、記録を撮ってほしいと村を通して相談がありまして、それでは記録を撮りましょうということで、平成27年に記録を撮りました。先週も別件で行ってきたんですが、やはり復活は難しいだろうと。ただ、こういうふうに記録を残しておいたら、そのうち復活できるかもしれないということはあると思います。

それから、オコナイというのは堂の中の飾り付けが非常に細かくありますので、その製作マニュアルも一緒に、報告書として作成しました。主にイラストを使って作ったものです。これもデータはすべて地元へ渡しています。

それと、これはまた別の例ですけども、これは「吐山の太鼓踊り」といまして、こちらは地元



図2 丹生の太鼓踊り DVD



図3 丹生の太鼓踊り HDD

の小学校で、伝承活動が結構軌道に乗ってるところなんです。こちらに関しては、先ほどの2つの例と違いまして、緊急を要するというよりは、学校で今、学校の先生が中心になって伝承をやっているので、その手助けになるようにと、これもやはり報告書と、教則ビデオをセットで制作しました。

これは、地元で、音頭取りの後継者が今後必要になってくるということを聞いていましたので、その辺りを念頭に、音楽的な分析とか、先ほどの太鼓踊り以下、全部いえることなんですけど、やっぱり歌詞が何が書いてあるとか。基本的に、太鼓踊りというのは風流踊りですので、小歌、つまり今の言葉じゃない言葉ですので、その部分は国文学の先生にお願いして、歌詞の解説を書いていただきました。

このように奈良県の映像成果物の考え方っていうのを、ちょっとまとめました（図5）。1つは普及用、それから一般用、伝承用というふうになっています。今年、三重県さんが民俗映像の撮り方のマニュアルの冊子を作っておられますが、他の所でもどういう映像を撮っていくべきなのかっていうことを、それぞれ考えてるんだろうなと思います。

奈良県の場合は、これも別に奈良県が、というよりは、今まで他の、特に近畿圏で映像を撮ってらっしゃる所のものを参考にしながら考えたものなんですけど、まず普及用として大体30分ぐらいのものが一般用。次に伝承用。先ほどから言ってます、模範演技とか教則ビデオというのは、この伝承用になります。一般用というのは、主にホームページとかで流すような5分バージョンです。

あとは、アーカイブがあって、いつでも地元の人が確認できるように撮ったものを全部入れておく。これは古文書も含めてです。これはアーカイブの例ですが、こういう形でデータベースを作っています。

これは「いのこ祭り」ですが、これはPDFなんです。PowerPointをPDFに変換して、ここを押すと30分ほどの映像が流れるようになっています。撮りました素材もこういう形で全部収めておく。要するに、今後、伝承していくときに、飾り付けだったり、道具の作り方とかそういうものも参考にさせていただきますので、こういう形にして、県と、それから地元の保存会に渡しています。

写真も一緒に撮りましたので、こういう写真を入れたり、非常に簡単に作ってます。あまり複雑にはしていません。あるいは、資料をこういうふうに、いろんな古文書ですとか、あるいは論文やPDFをここに全部入れているという形にして、後からも追加できるようにしています。

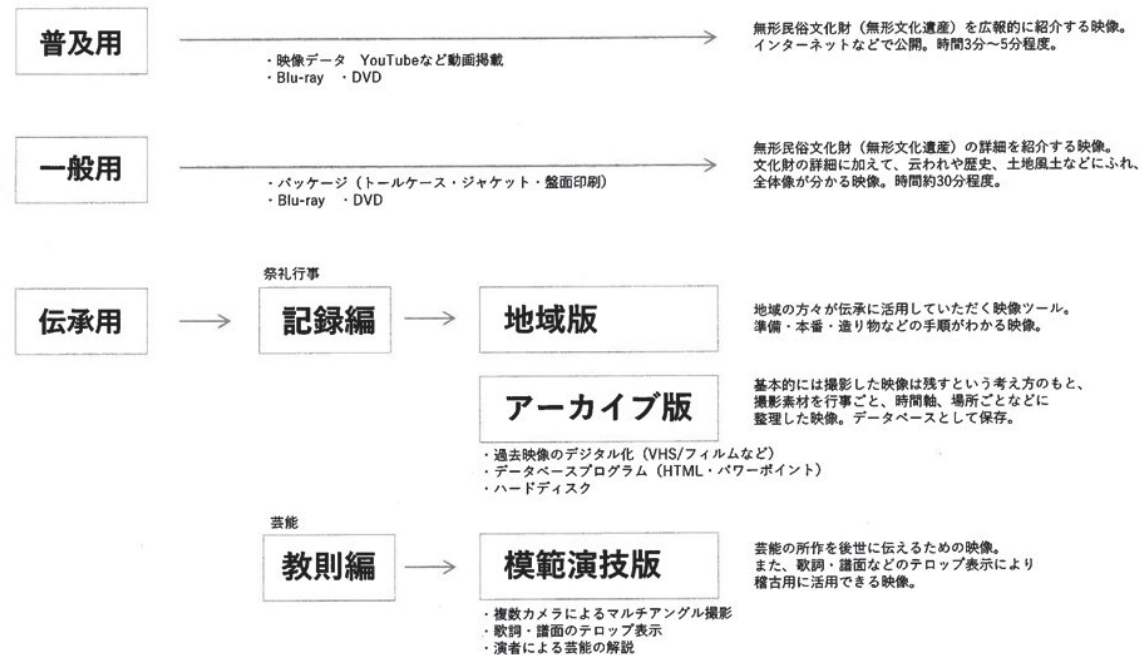
次に教則映像についてですが、映像の下に踊りの歌詞と、それから楽譜までは付いてなくて、むしろ太鼓譜、リズム譜を付ける形で、教則ビデオを作ってます。これを学校、それから地元のほうにお配りしています。

もちろん実際の譜面と打ち方がやはりちょっと違ったりということは当然あります。個人によっても違ったりもします。これは何カメラで撮ってるんですが、DVDに入ってるのはこちらから写してるところです。上から撮ったり、横から撮ったりはしているので、ハードディスクのほうには入っていますが、これは、これが一番いいだろうと。これは地元の保存会と話をして、こちらが一番わかりやすいかなという画面を選んでます。



図4 吐山の太鼓踊り DVD

## 映像成果物の考え方



## 映像成果（記録保存）の考え方 Link

図5 映像成果（記録保存）の考え方

これは、2人で打ってるところです。こういうふうにカラオケみたいな形で、色が変わっていきま  
す。歌詞の部分と、それから、これもリズム譜です。あんまりメロディーを入れても意味がないかな  
と。メロディー（五線譜）に関しては、報告書のほうで載せてますので、もし使えるなら報告書のほ  
うで見ていただけたらいいと考えています。教則ビデオに関しましては、歌とリズム、左右をこうい  
う形で作っています。

あと、地元では「テンツク、テンツク」というふうなリズムの覚え方（口唱歌）をしてますので、  
それはできるだけ下にそういう形で載せています。

〈映像〉

これは、本踊りの間奏部分です。

こういう形で、文化財のほうで記録を撮って、できるなら踊りなどの場合は教則ビデオを作る。そ  
れから、踊りじゃなくて、先ほどちょっと秋田県の例でもありましたが、御所市で作ったトンドの場  
合などは、じつは地元の要望もあり、映像とイラストによる製作マニュアルを作って、地元にお渡し  
しています（図6～8）。今のところは見なくてもできるんですが、そのうち農業をやってる人もい  
なくなっ、わらとか竹とか使える人がいなくなるから、そういうのが必要だという地元の要望があ  
り、映像と製作マニュアルを作って、お渡ししました。藁の結び方とかもだんだん分からなくなっ  
てきてるんです、若い人は。

こういうものもやはり緊急時用というふうに考えてます。今のところは、こういうものを使わない  
でも伝承していけてますが、これから10年、20年後にわからなくなってきたとき、こういうものを

参考にしていただけたらと思っています。

それから、もう一つ。今までの記録の例ではなく、具体的な、実際に伝承が困難になったところの復活ということでいいますと、五條市の「篠原踊り」の例があります。ここは集落に3名しか踊り手がいなくなって、音頭取りはいなくなって、4～5年テープですずっとやってるような状態でした。

ですので、平成23年から始まった緊急調査の時に、私が地元のほうでいろいろ話をしている中で、集落外だけど1人教えられる方がいらっちゃって、今は踊りに参加していない方がいるということがわかりました。それがここに写ってらっしゃるこの方で、保存会会長のお兄さんだったんですけれども。

それで、平成26年に五條市のほうと、それから大塔支所と、保存会と、県のほうで話し合いをしまして、公募をするということで。この時は、今日も来られてますけど、全日本郷土芸能協会の方にも参加、宣伝もしていただいたり、新聞にも載せてもらいました。今までは、いわゆる村から出さない、村外不出といわれていたものなんですけど、集落に10名ほどしか住んでいなくて、そして公募をしたところ、大体集まったのが40人ぐらいで、実際、今定着してるのは二十数名です。

伝承者がもう3名ほどしかい wasn't でしたので、実際、昔は二十数曲踊ってたのが、もうこの時には3曲しか踊ってなかったんです。ですので、公募をしまして、新たに保存会をつくって、規約も新たに、地元と関係ない人、どなたでも入れるというような、いわゆるサークル活動的なものにし、月に2回練習をするということを決めました。

これは平成28年に、民俗芸能大会のブロック大会に出た時のものです。3曲しか踊ってなかったものを、毎年3曲ずつぐらい新しい曲を練習して、増やしていつているところです。

これが伝承用映像を撮った時の風景です。この立ってる方は今の指導者ですが、この人も引退していました。

実は、一番中心になった先ほどの方は、保存会が復活した翌年、踊りの本番が1月にあるんですが、その一週間ぐらい前に亡くなってしまいました。で、急遽引退していた80代の方をお願いして、もうこの方しか17曲踊れる方がいらっしゃらなかったもので、この方に踊ってもらい、これも教則ビデオと報告書を作りました。何台かカメラを設置して、ビデオを作りました。

### 3. 今後の展開

以上のように、県として復活の手助けをする。それから伝承の危ないものの記録を撮っていくという形で事業を進めてきました。

それが、配布資料の一覧表に載っているものです（資料4）。これは、県だけではできませんので、市町村に事務局になっていただいて、やっていただいているものもあります。最初は県がやっていましたが、それをモデルにして、市町村のほうにこういうふうにしてくださいとお願いしています。それで、大体今までのところ、7件ほどの報告書を、今年も報告書がまだ2つほど残ってますけれども、報告書と映像を作っている形になります。

それと、平成27年に県立図書館でワークショップを開きまして、一般の人にも知っていただくということで、体験なんかもしています。講演会とそれから体験です。

そして、実は奈良県の場合は、連合会というものがなかったものですから、平成29年に県内の50団体を集めて連絡協議会をつくりました。それが奈良県無形民俗文化財保護連絡協議会です。今日お配りしてますパンフレットやガイドブックは、そのために併せて作ったものです。今日お配りしたの



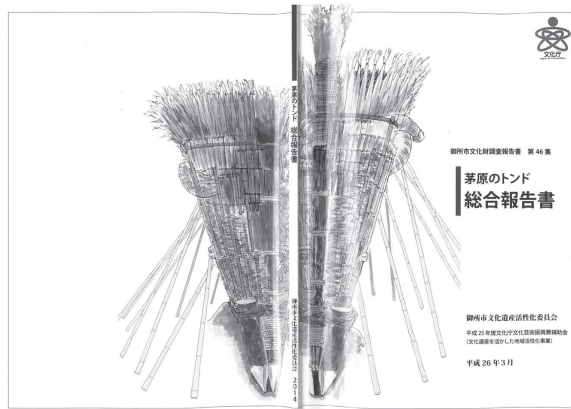


图 6

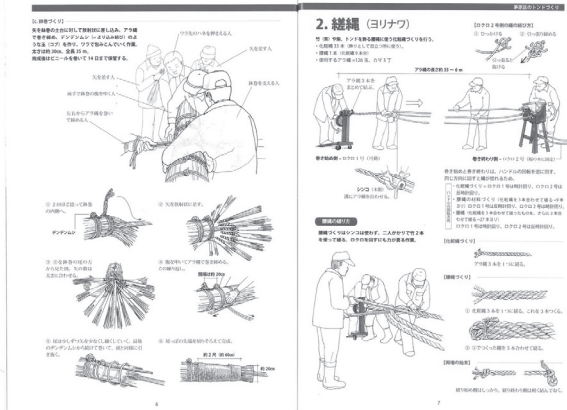


图 7

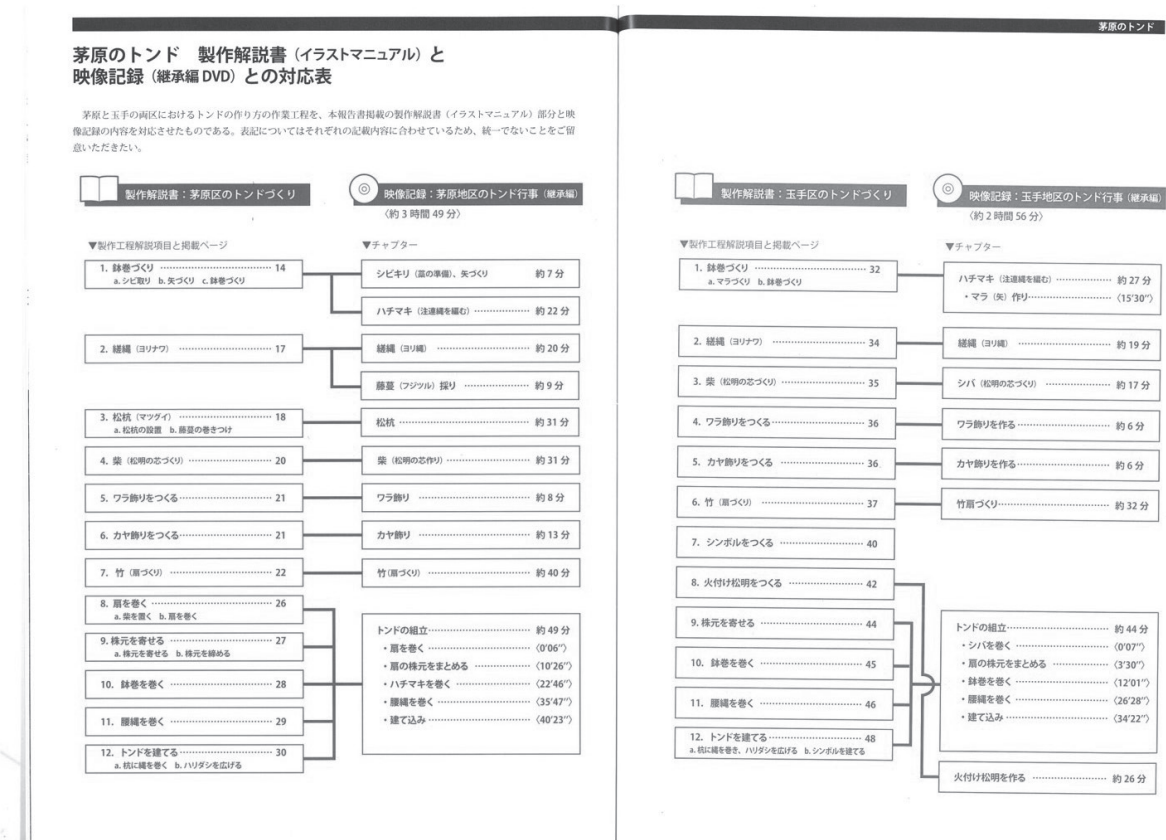


図8 茅原のトンド総合報告書



図9 平成28年度民俗芸能大会ブロック大会への出演（篠原踊り）



図10 伝承用映像の撮影風景（篠原踊り）

は、2018年のものですので、改訂版になるんですけども、去年の3月に文化庁の小林主任調査官にもお越しいただき、そこで植木行宣先生の講演会をしました。基本的にはそれぞれの情報交換の場として、立ち上げました。

それと、今行っているのは、過去の映像のデジタル化です。お配りした紙の2枚目（資料4）に、報告書と映像の一覧があるんですけど、実は奈良県では昭和50年代から映像を撮っています。ですけども、ほとんど公開されてませんでした。ですので、これも去年からデジタル化を進めています。デジタル化をすると同時に、5分版の、いわゆるダイジェスト版を作って、これもホームページに今年から載せていくように考えております。

ただ実は、これ、全部、文化財のお金でやっていないんです。ほとんど観光振興とか、あるいは、奈良県の場合は、文化資源活用課というところがあったので、そちらのお金で何とかデジタル化やホームページでの公開みたいなものを進めているところです。

DVDに関しては、もちろんできたものは、博物館やあるいは図書館に配るとともに、過去のいわゆる400本、大体、Uマチックというちょっと特殊なビデオなんですけども、そういうものもアーカイブとして、素材も全部デジタル化して、これも将来的にはすべて見れるようにしたいなというふうに考えております。

ですので、大体、この一覧表にあるように、最近のものが少し歯抜けになってるんですけども、過去のものも広く公開していく。撮ったものを公開していくということと、それと、新たに撮影して、これを映像のアーカイブとして残していくというふうな仕事をしております。

最後は尻切れになりましたが、今日の発表は以上です。ありがとうございました。

文化庁 平成 27 年度文化遺産を活かした地域活性化事業

# 大柳生・吐山・篠原

## 大和の太鼓踊り

### 講演と体験ワークショップ

県内では 45 もの祭りや行事が、国や県の無形民俗文化財として指定されています。今回は「太鼓踊り」をテーマに 3 地域を取り上げました。「頭」と「体」を使って地域と文化財を知る、感じる、つなぐ、きっかけになればと思います。

**【1 部】太鼓踊りを「知ってみよう」**

① 広く知る・・・基調講演「大和の太鼓踊り～風流踊りという芸能～」  
青盛透氏（元京都学園大学准教授）

② それぞれを知る・・・「大柳生・吐山・篠原」各地域の太鼓踊りを映像で知る・地域の方からお話を聞く

**【2 部】太鼓踊りを「踊ってみよう」**

それぞれの踊りを地域の方に教えてもらおう  
一緒に踊ってみよう

2016 年

**3/26 (土)**

13:00~16:30

(開場 12:45~)

篠原おどり  
五條市大塔町篠原



吐山の太鼓踊り  
奈良市都祁吐山町



大柳生の太鼓踊り  
奈良市大柳生町



定員 60 名

参加費無料

場所：図書  
情報館 1F  
交流ホール

**【参加申込】** 以下の方法でお申し込みいただけます

① 奈良県立図書館ホームページ「申込フォーム」  
<http://www.library.pref.nara.jp/>

② 申込み専用アドレス [wsts@library.pref.nara.jp](mailto:wsts@library.pref.nara.jp)

③ 電話申込 0742-34-2111


④ FAX 申込 0742-34-2777

⑤ 来館による申込（2F 貸出返却カウンターにて）

主催：奈良の文化遺産を活かした総合地域活性化事業実行委員会（事務局）奈良県教育委員会事務局文化財保存課 担当 森本 TEL：0742-27-9864  
共催：奈良県立図書館 協力：大柳生町自治会、吐山太鼓踊り保存会、篠原おどり保存会

3月1日(火)から3月5日(日)までの期間中、図書情報館玄関ロビーにて、「奈良の太鼓踊り」写真展示をします。

## ワークショップ 大和の太鼓踊り



**「太鼓踊り」ってどんな踊り？**

私たちが住む奈良県には、知れば知るほど「魅力的な」祭りや芸能がたくさんあります。広く民俗学の視点から理解することで、体系的にいろんな事例が結びつき、新しい発見があるはずです。今回は「大和の太鼓踊り」を知る、プログラムです。頭と心をやわらかくしてみませんか。

**◎ 当日の流れ**  
(受付 12:45~)

13:00 **【1 部】太鼓踊りを「知ってみよう」**

広く知る・・・青盛透先生に「大和の太鼓踊り」の地域性や特徴等を教わる  
それぞれを知る・・・「大柳生・吐山・篠原」各地域の太鼓踊りの映像を見る  
各地域の太鼓踊りの代表の方から、祭りや現状のお話を聞く  
各地域の若い方（移住者等）から、地域のお話を聞く

14:50 **【2 部】太鼓踊りを「踊ってみよう」**

踊りを教わる・・・3つのグループに分かれ、代表の方より太鼓踊りを教わり踊る  
発表する・・・習った踊りをグループごとに発表する

16:00 **【交流会】代表の方々と交流してみよう** \*希望者のみ

地域間の交流会・・・これからの祭りの継承について、地域の方々がお互いの意見や情報を交換、交流する（希望者はその交流会に参加可能）。

**◎ 講演「大和の太鼓踊り～風流踊りという芸能～」**

青盛透氏 元京都学園大学准教授

民俗芸能を専門に調査・研究をする。京都府・滋賀県の文化財保護審議会委員（民俗文化財）を歴任。論文に「風流踊りの構造、観客の位置をめぐって」、「民俗芸能研究」1（1985 年）、「南山城における二つの結核菌」『芸能』27（1985 年）、「中世芸能と興行権をめぐって」『人間文化研究』14（2005 年）、「奈良県の風流・鼓踊り・その歴史と芸術」『奈良県の民俗芸能』（2014 年）他多数。

**◎ 参加地域の紹介**

大柳生の太鼓踊り 奈良市大柳生町

花飾りを添えた大きなシナイを背中に負い、首から吊り下げたカンコと呼ばれる腰太鼓を両側から打ちながら上下に飛び跳ね、左右に体を揺さぶる激しい踊り。鼓の時期に長老の言葉を授けられるに奉納されていた。

吐山の太鼓踊り 奈良市都祁吐山町

最大で 7 台の太鼓が出て、神社に練り込み一列に並ぶ。1 台の太鼓を踊り子 3 人が交代しながら叩く。シナイもシナイを振りながらに踊る。今は秋祭りに踊られるが、もとは雨乞いの踊りとして踊られた。

篠原おどり 五條市大塔町篠原

カンコよりも薄い細太鼓を手に持って打ちながら踊る男性と、その後ろで扇を手に優雅に踊る女性。20 曲近くの踊りが伝わるが、「三番」は 1 月に氏神の前でのみ奉納される門外不出の演目となっている。

\*上記 3 つの踊りは全て、奈良県指定の無形民俗文化財です

## ワークショップ 大和の太鼓踊り

**【交通アクセス】**

●奈良県立図書館  
奈良交通バス（奈良駅）から「奈良県立図書館」行き（22系統）に乗り、終点、所要時間約25分。

●奈良市立図書館  
奈良交通バス（奈良駅）から「奈良市立図書館」行き（22系統）に乗り、終点、所要時間約25分。

●近鉄奈良駅より  
奈良口バス停から西条大橋南行き（3系統）に乗り、奈良県立図書館前バス停下車、徒歩約5分、所要時間約15分。

●奈良市立図書館  
国道24号の奈良市立図書館を乗り換え、1つ目の信号を左折、約700メートル先の右手側、駐車場（バス専用車311台、1時間まで無料、それ以降は1時間毎に100円）

奈良県立図書館 1F 交流ホール  
〒630-8135  
奈良市大寺西 1 丁目 1000 番地  
TEL: 0742-34-2111 (代表)  
FAX: 0742-34-2777  
E-mail: [info@library.pref.nara.jp](mailto:info@library.pref.nara.jp)




図 11 ワークショップ 大和の太鼓踊り

# 無形民俗文化財の継承と記録の役割について

森本 仙介（奈良県教育委員会文化財保存課）

## 1. 無形民俗文化財の調査

### ①データベース構築（文献・写真・調査票）

◆平成16年度

『祭礼・年中行事 DB』

◆平成21年度

『民俗芸能 DB』

◆平成23年度

『民俗文化財写真 DB』（デジタル化）

### ②民俗文化財緊急調査（分布調査・悉皆調査・詳細調査）

◆平成18～20年度

『祭り・行事調査』

・全389頁／300部

・悉皆調査約250件…39市町村に基礎調査員各1名

・詳細調査103件…研究者27名

◆平成23～25年度

『民俗芸能調査』

・全860頁／300部

・悉皆調査約200件…39市町村に基礎調査員各1名

・詳細調査79件…研究者71名

〈基本方針〉

- ・『民俗芸能 DB』より事務局が選定したものを悉皆調査
- ・詳細調査は1件1名
- ・「芸能」に限定せず、祭り全体を記述
- ・写真、映像は全て事務局にデジタルデータで提出し、アーカイブとして保存
- ・文書は可能な限り翻刻

## 2. 調査報告書（単独の文化財対象）と映像記録の作成

### ①県が事務局

◆平成26～27年度

a「吐山の太鼓踊り」b「丹生の太鼓踊り」c「弓手原のオコナイ」d「北今西のオコナイ」

○bcは再現を撮影

○映像記録／報告書（bは28年度，cdは30年度予定）

### ②市町村が事務局（県は指導・監修）

◆平成23～25年度（御所市）

「茅原のトンド」

○分布調査

○映像記録・シンポジウム／報告書（製作マニュアル）・パンフレット

○HP作成



資料 3-2

- ◆平成26～30年度（御所市）  
「御所の献灯行事」
  - 約30大字全域調査
  - 映像記録／報告書
- ◆平成25・27年度（黒滝村）  
「吉野の樽丸製作技術」
  - 最後の職人の再現作業を撮影（27年没）
  - 映像記録・シンポジウム／パンフレット
- ◆平成27～29年度（五條市）  
「篠原おどり」
  - 26年度に伝承者募集
  - 教則映像／教則本・パンフレット
- ◆平成28～30年度（五條市）  
「五條市内の御仮屋行事」未指定
  - 7大字の調査
  - 映像記録／報告書（製作マニュアル）
- ◆平成27～30年度（天理市）  
「大和神社のちゃんちゃん祭り」未指定
  - 9町（大字）の調査
  - 映像記録／報告書

### 3. 今後の展開

- ①平成27年度
  - 「吐山の太鼓踊り」「篠原おどり」「大柳生の太鼓踊り」によるワークショップ開催
  - 『奈良県無形民俗文化財ガイドブック』作成（平成29年度に改訂版）
- ②平成28年度
  - 過去の映像作品のデジタル化（DVDパッケージング）と映像素材（約470本）のデジタル・アーカイブ化（～31年度）
  - 選定保存技術・無形文化財の映像撮影（～32年度）
  - 無形民俗文化財デジタル・アーカイブの公開
- ③平成29年度
  - 「奈良県無形民俗文化財保護連絡協議会」の発足
  - 『奈良県の無形民俗文化財』（リーフレット）の作成
- ④平成30年度
  - 『奈良県無形民俗文化財ガイドブック 2018』作成（27度版の改訂版）
  - 映像の県HPでの公開（短縮版）
- ⑤平成31年度
  - 地域伝統芸能奈良大会
- ⑥平成32年度
  - 第1回奈良民俗芸能大会
- ⑦平成33年度
  - 国際芸術家村開館
- ⑧平成34年度
  - 近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能奈良大会

## 奈良県無形民俗文化財映像記録・報告書一覧

	文化財指定名称 (*休止)	映像	DVD化	報告書	文化財種別		指定年	備考
1	題目立	H17(県)	H31	H17(県)	国指定	国選択	S51.5.4	
2	春日若宮おん祭の神事芸能	S53(県)	H31		国指定	国選択	S54.2.3	
3	十津川の大踊り	S54(県)	H31		国指定	国選択	H1.3.20	
4	陀々堂の鬼はしり	S58(県)	H31	H17(県)	国指定		H7.12.26	
		H19(県)	H31					
5	奈良豆比古神社の翁舞	S53(県)	H31		国指定	国選択	H12.12.27	
		H17(県)	H31					
6	吉野の樽丸製作技術	H27(村)	(H27)		国指定		H20.3.30	
7	江包・大西の御綱	S54(県)	H30		国指定		H24.3.8	
		H18(県)	H30					
8	当麻寺二十五菩薩来迎会	S49(国)	H31	H31(市)		国選択	S51.12.25	
9	吉野大塔の坪杓子製作技術					国選択	S58.12.16	
10	大和の野神行事	S60(国)				国選択	H24.3.8	
11	篠原おどり	S53(県)	H31	H29(市)		国選択	S52.5.20	○教則映像
		H29(市)	(H29)					
12	惣谷狂言	S53(県)	H31			県指定	S52. 5.20	
13	北今西のオコナイ	S53(県)	H29	H29(県)			S52. 5.20	○製作マニュアル
		H27(県)	(H27)					
14	弓手原のオコナイ*	S54(県)	H29	H29(県)			S52.5.20	○製作マニュアル
		H27(県)	(H27)					
15	国栖奏	S53(県)	H30			県指定	S53.3.28	
16	大柳生の太鼓踊り*	S53(県)	H30			県指定	S53.3.28	
17	東佐味の六斎念仏*	S53(県)	H30			県指定	S53.3.28	
18	曾爾の獅子舞	S57(県)	H30			県指定	S54.3.23	
19	木津川の祈祷念仏(踊念仏)	S57(県)	H30			県指定	S56.3.17	
20	東坊城のホーランヤ	S59(県)	H30			県指定	S57.3.12	
21	茅原のトンド	S60(県)	H31	H25(市)	国選択	県指定	S58.3.15	○製作マニュアル
		H25(市)	(H25)					
22	吐山の太鼓踊り	S62(県)	H31	H27(県)		県指定	S60.3.15	○教則映像
		H27(県)	(H27)					
23	柳生の宮座行事	S61(県)	H29			県指定	S61.3.18	
24	国栖の太鼓踊り*	H02(県)	H29			県指定	S63.3.22	
25	阪本踊り	H01(県)	H31		国選択	県指定	H1.3.10	
26	邑地の神事芸能	H03(県)	H31			県指定	H2.3.9	
27	東安堵の六斎念仏	H04(県)	H29			県指定	H3.3.8	
28	平尾のオンダ	H05(県)	H30			県指定	H4.3.6	
29	菅生のおかげ踊り	H08(県)	H30			県指定	H4.3.6	
30	狭川の神事芸能	H06(県)	H31			県指定	H5.3.5	
31	地黄のスツケ行事*	H09(県)	H30			県指定	H5.3.5	
32	八島の六斎念仏	H07(県)	H29			県指定	H6.3.25	
33	野依のオンダ					県指定	H8.3.22	
34	東山の神事芸能	H20(未)	H31			県指定	H10.3.20	
35	田原の祭文・祭文音頭・おかげ踊り					県指定	H11.3.19	
36	御所の献灯行事	H29(市)	(H29)	H30(市)		県指定	H12.3.31	
37	丹生の太鼓踊り*	H27(県)	(H27)	H28(町)		県指定	H13.3.30	○教則映像
38	河合の弓引き行事					県指定	H14.3.29	
39	金峯山寺の蓮華会	H19(県)	H31			県指定	H16.3.31	
40	高田のいのこの暴れまつり	H29(県)	(H29)			県指定	H17.3.29	
41	六県神社の御田植祭					県指定	H18.3.31	
42	白石の双盤念仏					県指定	H20.3.28	
43	機原のおハキツキ	H29(県)	(H29)			県指定	H21.3.31	
44	駱山神社嘉吉祭の神饌	H18(県)	H31			県指定	H22.3.30	
45	生駒の火祭り					県指定	H23.3.30	
46	下市町新住のオカリヤ					県指定	H24.3.30	
47	室生の獅子神楽					県指定	H28.2.5	
48	龍口の獅子舞					県指定	H28.2.5	
49	大柳生の宮座行事					県指定	H29.2.14	
50	大和神社ちゃんちゃん祭り	H28(市)		H30(市)		県指定	H30.2.2	○製作マニュアル

## 事例報告 3

# 無形民俗文化財の危機から学ぶべきこと

## —杉野原の御田舞を中心に—

蘇理 剛志（和歌山県教育委員会）

久保田：それでは、午後の部を再開させていただきたいと思います。

昼休みの間に、ちょっと映像を流させていただきました。それにも関わってくるお話になります。午後はまず和歌山県教育委員会の蘇理剛志さんからお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

\* \* \*

蘇理：皆さん、こんにちは。和歌山県教育委員会文化遺産課の蘇理と申します。

今日は和歌山県からの話題として、今年2月の奉納を一応の最後ということで奉納、実施された、有田川町の「杉野原の御田舞」をめぐる状況について、ご報告させていただきたいと思います。

### はじめに

まず、和歌山県にどんな民俗芸能があるんだろうか、ということですが、近畿にお住まいの方は少し思い付くものがあるかもしれませんが、他の地域の方々だと、ぱっと何か思い付くものはあまり無いんじゃないかなと思います。しかし、和歌山県には、世界遺産の高野山や熊野三山がありますので、熊野の信仰とか、高野山なら真言密教や弘法大師信仰、そういったものの発祥の地というか発信地になっていますので、九州でも東北でも、何かしら紀州・和歌山につながっていく文化がわりとあるのではないかなと思っています。そういう目で和歌山県の民俗文化財を見ていくと、お祭りとか伝統行事だとか、そういったものも非常に面白く見えてきます。

午前にもお話がありましたが、和歌山県の人口も、年々目に見えて少なくなっています。私が和

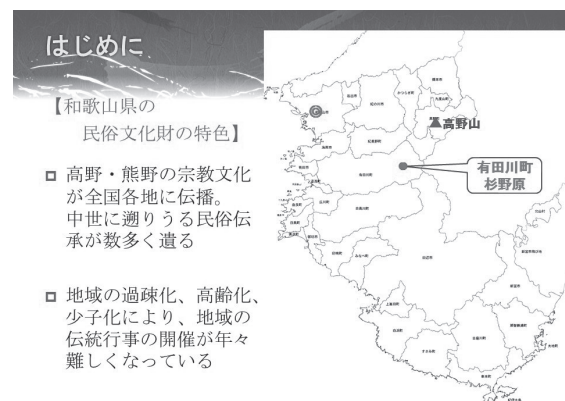


図 1

歌山県教育委員会に入りましたのが平成 19 年ですが、その当初、和歌山県の人口はおよそ 101 万人でした。今、12 年経ちまして、人口は 93 万人ぐらまで減少しております。だいたい年に 5,000 人から 6,000 人ぐらずつ減ってきていて、考えると、1 年間に小さな町 1 つ分位の人口が減っている状況が続いていることになります。無論、こうしたことは民俗文化財の保存・伝承にとってとても深刻な状況です。特に、山間部、あるいは海岸部などの地域の過疎化、高齢化、それから少子化が急速に進んでいるのが和歌山県の実状であります。

和歌山県には「紀伊山地の霊場と参詣道」という世界遺産がいろいろありますので、それを売りにした観光振興に力を入れ、文化財保護もそれを中核にして施策に取り組んでいます。ただ、今回お話しする有田川町杉野原は、ちょうど高野山の南麓でして、この山間部の一帯、先ほど奈良県の森本さんがお話ししてくださった、奈良県の吉野地方とか十津川村辺りにも隣接した一帯の地域は過疎化、高齢化が本当に厳しい状況にあります。高野山は世界遺産ですけども、その周辺地域の伝統行事が近年になり行いにくい状況になっていまして、今回は、行事の中止というか、一応最後ということをいった杉野原の状況を、ご報告したいと思います。

## 1. 杉野原の御田舞について

「杉野原の御田舞」は文化財の名称で、地元では「御田の舞」と呼ばれています。今は国指定重要無形民俗文化財となっていますが、これは先ほど紹介された「男鹿のナマハゲ」とは違って、この杉野原地区の 1 つの行事で 1 つの国指定文化財、そして 1 つの保存会で運営されてきました。

昭和 41 年には和歌山県指定無形文化財、昭和 56 年に国の記録選択無形民俗文化財になり、その後、昭和 62 年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。こういう文化財指定の進め方は、地域にとって大事な伝統文化を文化財として価値付けて、そのことを通じて後世に長く伝承していこうという、地域の取り組みの結果でもあったし、それを見守る周りの人たちの並々なぬ応援があったと思われます。

もう一つ重要なのは、御田の舞が行われる場所、建物が、室町時代に建てられた「雨錫寺阿弥陀堂」という国指定重要文化財の仏堂であることです。五間四方のかやぶき屋根のお堂ですが、中世には、杉野原だけではなくて、高野山周辺の村々にはこういう仏堂があったようで、そこでいろんな行事、この辺は宮座ではなく「堂座」というのですが、堂を中心にした「堂座講」が組織されていました。杉野原も、江戸時代以前、中世までは高野山の所領でしたので、お堂を中心にした堂座によって村の政治だとか仏事だとか、いろんな行事が行われました。その代表的な例として、阿弥陀堂が重要文化財になっています。

そうした重要文化財のお堂において、重要無形民俗文化財の御田の舞が行われてきたという事実や、それらが一体となって受け継がれてきたことにも大きな意味があります。お堂には、阿弥陀如来坐像がお祀りしてあります。これも平安末期の仏様ということで、お堂よりも古いものなんです。



図 2 雨錫寺阿弥陀堂



御田の行われる日には、阿弥陀様が祀られる須弥壇に、いろいろ飾り付けやお供え物がしてあったり、「額」や「盛り物」というんですが、干支の絵を飾ります。写真では酉と戌。これは毎回、五穀（コメ・アワ・キビ・ソバ・マメ）を使って作る習わしになっています。色付けはしてありますが、お米とかアワとかアズキとかそういったものを使って表現していて、作るのに一月ほどかかります。阿弥陀様の厨子の両側には左右対称にツバキの木に造花を飾って、春の荘厳とします。

御田の舞は、年の初めに阿弥陀堂で営まれた「オコナイ（修正会）」行事の一部として奉納されたものでした。そのため、行事の初めには、「裸苗押し」といって、裸踊りを奉納します。これもオコナイの一連の行事で、昔は若衆なんですけれど、地域の人々が裸一貫になりまして、2月11日という雪の降る寒い時期に、「<sup>さいと</sup>柴灯」という焚き火の炉を囲んで円陣を組み、歌を歌いながら火の周りをぐるぐる回ります。

「裸苗押し」は、和歌山の祭りイメージになりやすく、カメラマンの格好の被写体になっています。とくに、歌の円陣を上からのぞき込んだ構図が人気で、この場面に何十人ってというカメラ愛好家や記者が取り囲んで、バシバシバシ撮っていく感じになります。杉野原の御田舞は、近年は地域の人々以外に、観光客など外からの見学の方も多し、そういう行事になっていました。



図3 杉野原の御田舞（裸苗押し）

先ほど映像を見ていただきましたが、中核になる御田の役者は3人です。一番中心になるのが、「<sup>しゅうと</sup>舅」という役。御田の様々な農作業の過程を演じる中で、中心的な役割をします。その補佐的な役を務めるのが「<sup>むこ</sup>賀」。舅と賀は、田植え作業で対する関係です。それから、「田刈り」は三番手の役として、舅と賀を補佐し、春鋤や田刈（稲刈り）、田の神への祭文を唱える役などを担当します。

3人の役者は、演技しながら、せりふを言ったり歌ったりするんですが、せりふの量は舅が一番が多くて、その次が賀、次が田刈りという順で、習熟度に合わせて役割を担います。役者は最初、田刈りから習い、次に賀をやって、次に舅ということで、かつて杉野原の若者は、役者を務めることで一人前の村の人間になっていくような、そういうしきたりだったようです。



図4 杉野原の御田舞（かいなんだし）

ところが、現在では、実際に杉野原で御田をやる役者の人たちは、地元で暮らしてる30代の男性2人だけという状況になっていて、田刈りの役は、近隣地区に頼んで参加してもらう状況になりました。しかも、杉野原の2人も38歳となり、そろそろもう体力的に役者を演じるのが無理な年齢になりました。

映像を見ていただいたらわかると思いますが、御田の演技は非常に屈伸運動が多くあります。神楽の曲であれば数分から数十分で1曲が終わり、舞人を交代するなどして、延々やれるのかもしれませんが、

御田の舞はある意味しごきのようなもので、1時間半の間、1人の役者がずっと通してやります。そのため、役者の体力とか、あるいは膨大なせりふを覚える記憶力とか、そういう能力が御田の場で試されることになり、それを村のみんなに披露し、一人前に認められるような状況がありました。

実際に保存会の方々は、御田の舞に誇りを感じ、伝承の過程をととても楽しみながらやっているんですが、伝承する芸能の内容やレベルは高く、身体で覚えることも多くあり、体力面もなかなか厳しく、いろんな条件がついてきます。ただ、それが中世の村の祭りに由来する芸能の、一つの伝承の在り方だったと思えますし、貴重な芸能文化であることは間違いありません。

次に、杉野原の御田舞の文化財指定後の伝承の経過を辿っておきます。昭和41年に県指定文化財になって、昭和52年以降は、それまで毎年やっていた御田の行事が、2年に1度の開催に変わりました。これもやっぱり地域の過疎化による変化です。それ以後、西暦偶数年の2月11日の公開になりました。その後、昭和62年に国の重要無形民俗文化財に指定されたんですが、地域の過疎化などは進んでいき、杉野原地区だけでは維持が難しい状況になっていきます。

杉野原地区の戸数は、現在およそ40戸になりました。昔はもっと家も、若い人もいたのですが、今は、高齢のご夫婦とか、あるいは、1人暮らしとか、そういう形で家や田畑、山林を守ってらっしゃる方が多い状況です。普段、その息子さんたちは地区を離れて街に、特に市町村合併してからは、有田川という川の下流部が街の中心部になったので、そちらに移住するようになって、普段は、年配の方だけが暮らす状況になっています。

そういう中で、平成18年度からは、杉野原の子どもたちだけでなく、地元の<sup>あで</sup>安諦小学校で、地域学習の一環として、御田の「田植子」という花笠をかぶって苗取りや田植えを演じる子どもの役を、他地区の子どもたちにも習ってもらい取り組みをしてきました。また、平成26年度からは、秋祭りの協力関係で付き合いのあった隣の押手地区の若者にも手伝ってもらいながら、御田の舞に参加するという体制になりました。

ただ状況としては、御田を開催するための地域の体力というか、厳しさが増していく状況に変わりはなく、そのため、杉野原の御田の舞保存会が、平成25年に今後の伝承をどのようにしていくかを話し合い、「これをぜひ、ちゃんとした形で記録で残しておきたい」という総意に至りました。そうした保存会の希望を、地元の有田川町教育委員会、それから県教育委員会が相談を受け、また文化庁に指導を仰ぎながら、御田を正しく継承するための映像記録を作る事業を始めることになりました。

## 2. 杉野原の御田舞の映像記録作成とその後の経過

ちょうど同じ頃、和歌山県教育委員会では「高野山周辺地域民俗文化財調査事業」を、国庫補助を受けて実施中でした。そこでも杉野原の調査をしていましたが、その過程で、やっぱりこういう記録を残しておきたいという相談を受けた形になりました。そこで、この事業を引き継ぐ形で、平成27～28年度で、御田の舞の映像記録を作る事業を、国庫補助を受けて、有田川町教育委員会の事業ですることになりました。この事業で、先ほど見ていただいた映像記録と、ちょっとぶ厚めですが映像解説書というものを作成して、芸能の保存につなげる取り組みとしました。

## （1）御田舞の映像記録作成事業

この事業の実行委員会は、各専門の先生、民俗学、国文学、歴史学の先生などで構成し、あと、地元の郷土史の先生や、保存会の方にも入っていただき協議を重ねました。

具体的には、和歌山県の文化財保護審議委員の吉川壽洋先生を委員長に、有田川町文化財保護審議委員の二澤久雄先生を副委員長にして、県の審議委員である須藤護先生（龍谷大学名誉教授）、国文学で中世歌謡が専門の永池健二先生（元奈良教育大学教授）、民俗音楽が専門の梁島章子先生（京都教育大学名誉教授）、それから、県立風土記の丘博物館学芸員の藤森寛志さん、御田の舞保存会の松本博光さんを中心に委員会を結成し、映像のほうは、地元業者のワム 21 が委託を受け、記録事業を実施しました。

この事業は、当初から、保存会からの希望で実施したので、作業の方も非常に協力的に、熱心に取り組んでいただけました。御田の舞をどう後世につないでいくかということを念頭に、事前の打ち合わせや現地調査にも熱心に参加していただきました。調査委員を選んだ際も、歴史うんぬんの研究より、聞き書きを重視して下さる先生にお願いしたので、今、地域の人たちがどういうことを感じているのか、そういう心境も含めて記録に残すことに重点を置く調査をお願いしました。委員の先生方も聞き取りの作業を大切に考えて下さっていたので、すごく内容の良い調査が出来たのではないかと思います。また、安諦小学校での田植子の練習の様子もしっかり記録して、現在、どういうふうに子どもたちに教えるのかを撮りました。



図5 調査委員による聞き書き



図6 小学校での御田囃子の練習

## （2）記録作成のポイント

次に、記録作成のポイントについて。これは、作業をしながら委員会で考えていったんですけども、行事当日の様子はハレの舞台なので、当然記録するけれども、それよりも練習や準備の様子も重視して、できるだけ詳しく記録するようお願いしました。練習の場での会話、普段のやりとりとか、そういうものがどうであるのか、あるいは、稽古の付け方、衣装の着付け、化粧の方法、祭壇の飾り付け、賄い料理の作り方やその会場の設営など。それから、小学校での郷土学習の授業の様子も記録して、現在やっている状況を記録しました。そのことにこだわったお蔭で、結果的にとても面白い映像記録になったと思います。

それから、御田に特徴的なせりふや歌には、「何々し候え…」の語調が続く、能や狂言と変わらない時代の、しかも方言を含んだ難解な言葉が多く使われています。よくここまで口承で伝えてこられたなと感心するのですが、やっぱり難解なまま次世代まで伝えるのは難しいので、参考になる注釈を



解説書に入れようということで、永池健二先生にお願いして、御田に出てくる言葉遣いから、どういう意味や由来がたどれるのかを分析しました。また音楽的な特徴については梁島章子先生にご指導いただいて、分析を行いました。

また大事なポイントとして、行事に携わる人々からの聞き取りを重ねて、御田の伝承に対する思いとか、そういったことも言葉にしてもらい、後世へのメッセージとしながら、どのように終わろうとしているのか、という話をお聞きして書き留めました。

従来の、民俗文化財の調査報告書というものは、言わば文化財指定のために報告書が作られるので、内容的にはその民俗事象の歴史や行事次第、伝承の型などが記録される一方で、あまり伝承者の思いとか、個々人の悩みや憂いなどは記録されていないと思います。けれども、今回はなぜ終わりそうなのかみたいなことを語ってもらって、どう次世代に残せたらいいか、といったことも丁寧に聞くような姿勢に重きを置きました。これはやっぱり、聞き書きをベースにした民俗学者の技法として、その地域の伝承の文脈を探って、地域の今の状況に寄り添いながら見守りつつ、共に考えていく立場を、先生方もそのことは十分重視して下さったと思います。そういうことも含めて、各先生方の思いとか提言なども忍ばせながら、報告書をまとめていただくようお願いしました。

### (3) 難解な御田の詞章解説

その結果、特に御田の詞章に関しては、非常に面白いことがいろいろ分かってきました。これは一例なのですが、舅と聳がやりとりをする前に「福女踊<sup>ふくめおどり</sup>」という踊りと歌の場面があります。その時には、太鼓方と座謡（側）とが歌のやりとりをするんですが、

(太鼓) イヨー山寺の小坊様	(側) イヨー好み物は何々
(太鼓) イヨー一に味噌 二に納豆	(側) イヨー三平餅に 四に豆腐
(太鼓) イヨー五煎豆に 六じん豆	(側) イヨー七蕨に 八茄子
(太鼓) イヨー九茎たちに 十牛蒡や 嚙や覚えたりや	
(側) 実に三番叟僧都僧や 嚙や覚えたりや	

「山寺の小坊様、好む物は何々」という好む食べ物の数え歌、これは中世の歌謡のパターンで、今様などにも出てくる、相当に古い歌詞なんです。その中に、とくに難解な、「<sup>げ</sup>実に三番叟僧都僧や、<sup>さんばそうそうずそう</sup>嚙や覚えたりや」という言葉があります。これは何なんだろう？って、もう地元の人も全然もう意味が分からなくなっていて、何か「さんばそう」って出てくるよね？ぐらいのイメージしかない。御田の古い歌本にもいろんな漢字の当て字で書いてあって、正体が分からなかったんです。

でも、永池先生の分析によると、それはどうも「<sup>げ</sup>にや さば とんどに さぞや おぼへたるな（現ル也娑婆 東土に三尊哉 覚足那）」という詩句がもとで、それが「<sup>げ</sup>実に三番叟、僧都僧や……」に転訛したということなんだそうです。これは何かと言いますと、鎌倉時代から室町期にかけて、武家が宴席を催した時に歌われた式楽に、「<sup>そうが</sup>早歌」という宴会の歌があるのですが、その中で歌われた秘曲「<sup>げにやさば</sup>現ル也娑婆」だったということなんです。

歌詞にある「<sup>げ</sup>にや」「さば」「とんどに」というのは、これ全部、古い相づちの言葉なんです。「<sup>げ</sup>にや さば とんどに さぞや おぼへたるな」。今風に言うと、どうでしょう？「だよね だよね そうだよね」みたいな感じなのかな、とも思うんですが、何かそういう面白いフレーズが残ってい

ます。

これが、どういう伝承の過程を経て杉野原に残っているかはわからないんですが、高野山周辺には、こういう系統の御田の芸能がいくつか分布していて、またちょっと違う転訛した歌詞に残っています。そういうものは、やはり高野山の荘園経営とも絡みながら、鎌倉、室町期の古い時代に伝来した歌謡が残っていて、やっぱりかなり古い時代の芸能文化が残っているんだな、ということを改めて実感しました。

また、御田の歌詞の中に、「六 じん<sup>どう</sup>豆」っていうのが出てきます。この「じん豆」については、江戸末期の古文書に「じょうじ豆のこと」と書いてありました。それは今、御田の時に食べられる「じゃ<sup>まめ</sup>じ豆」という、ダイズを空炒りしたものを、一晩しょうゆと砂糖、それから今はみりんも入れたものに漬け込んで、炊いて一晩置いた、素朴な豆の料理です。こういうものも、御田の歌詞に出てくるので、やはりかなり古い時代から食べられていた食べ物の文化にもつながっているようです。

あと、スライドに出ているのは、塩サバを炊き込んだ魚飯や、けんちん汁です。当時はたぶん、このお汁1杯で、もうすごくご馳走だったと思います。野菜とか豆腐とか、色々なものが入ったけんちん汁と、あと、紅白なます。こういったものを食べる習慣なんかも残っていたので記録しました。



図7 御田の料理

#### （４）映像と聞き書きによる現状の記録

そういう感じで、映像記録を作っていったわけですが、ここでその一部を見てもらおうと思います。行事を通して撮ったものもあるんですけど、今回は別に、御田の演技のポイントをどう記録するかという、伝承用映像も作りました。基本的には、普段の練習どおりに素踊りで務めていただいています。いつも通りの稽古の雰囲気撮影しましたが、こういう保存会の人たちの相談とか、話しぶり自体も、重要な記録となります。踊りの振りのポイントは、保存会の人にテロップをこういうふうに入れてほしい、と言われたものを挿入しています。この場面では、鉤を持つ角度はこの角度だっていうことを、分かりやすいように示しています。

今、映っているのは、「岸刈<sup>きしかり</sup>」という演目です。この「岸刈」というのは何かというと、棚田の段になつてる畦畔<sup>けいはん</sup>の「畔」に、夏になると雑草がいっぱい生えていて、その草を刈って田んぼの肥料に敷き込もうという、岸の草を刈る動作が「岸刈」として伝わっています。これ自体、よその御田植の芸能にはあんまりないと思うんですが、御田の舞台として確実に「棚田」が想定されています。他は、おそらく平べったい田んぼのイメージしかないと思うんですが、杉野原はたしかに「棚田の御田」なんだったということが分かる場面なんです。

非常に洗練された動きで、細かい所作への師匠の指導なんかもあって、そのやりとりも面白いと思います。それから、やっぱり映像記録を撮っておくと、こういう中世の芸能もあるんだな、能とか狂言とかいろいろあるけれど、またそれとも違う、こういう身体動作はここだけのものです。身のこなし、動き方じたい貴重な伝承で、記録を撮っとかないともう分からなくなるし、いったん途絶えてそのままにすれば、本当に消えてしまうというなかで、地元の保存会の方たちも次世代に残そうという

思いで、一生懸命に記録作業に協力して下さったと思っています。

記録化の過程で聞き取りをしていく中で、調査に携わった先生方は、保存会の方々のちょっとした御田の伝承に関するつぶやきとかを書き留めて下さいました。その中で印象的だったものを、少しレジュメで取り上げています。たとえば、

「今の若い人たちはすごい。この御田の良さを十分理解しており、伝統芸能を途絶えさせたらいかんという意識も持っている。でも、そのために、逆に追い詰められた状態にもなってるかもしれない……」

というお話し。要は、自分たち長老がやってた時は、村にもっと人がいて、誰かが御田をやってくるとか、今度は誰がするとか、もう決まって当然のようにやっていたけれど、今はやる人がいなくなって、跡取りがいない。次回やってくれる後輩がいないっていうときには、自分たちがやらなきゃならないということで、今の子たちは30代後半までやってくれた。それをまた今後も伝えていかなきゃいけないという思いは、すごく理解できる。けれども、自分たちがやってたような楽しさだとか、回りで見ている人たちの雰囲気も変わってきた。何ていうかな…。やっぱり、これはよその祭りでも共通している現象だと思うんですが、「見せる芸能」という、そういうプレッシャーに耐えていくことに、追い詰められてるかもしれないという、そういうお話だったと思います。

そういう負担をこれまでも受け止めて、御田を行ってきたわけなんですけど、私どもも専門家の立場として、御田の伝承については、担い手の確保を広域に広げるだとか、持続可能な体制をもう一回つくり直すだとか、あるいは女性が参加、舞手に女性が参加できるようなことをやっている例もあることなど、会長さんを中心にご紹介しました。もちろん、地元で独自に小学校の郷土教育を続けてきた実績はあります。しかし、そういう御田に触れる機会をもうちょっと広げるとか、若年世代のワークショップをするとか。御田には観光客も来ていて、その対応も杉野原地区の方々がなされているのですが、そういうことは自治体のスタッフや、ボランティアグループに任せるとか、そうして負担を軽くしてはどうか、というお話もしました。

この記録作業を行ったのは、平成28年の御田の時です。しかし、その後の地区での話し合いで、今年（平成30年）2月11日の御田でもって、奉納を最後にすることが、杉野原区の総意として決定されました。

その間、何度も話し合いがあったそうです。実は最初、ちょうど前年の11月ぐらいですけど、一度、有田川町を通じて電話があった時には、今年の御田は中止するということで意見がまとまって、「残念ながら、やれませんが」という連絡が入ってきたんです。そういう方向になりそうだということで、その時は「分かりました」といったん了解して、文化庁さんにも少しそのことを情報共有をしたんです。しかし、今年の1月になってから、地元の若い人、演じてる若い人たちはやりたいと言っているところから、もう一回、地元で話し合いの場が持たれたようで、そこで逆転といったらいいのか、「若い人がやりたいって言ってるんだから、やろうじゃないか」みたいな形で、今年の御田は最後の一回としてやろうってことで、折衝の末に開催することになったということです。



### （5）公開が困難になった要因

ただ現体制では、村の過疎化、高齢化の進んだ状況には抗しきれずに、もうこれ以上、御田の準備とかい로운なことを賄って、区の行事としてやるのは難しいということで、これを最後に休止しようということを区の人たちが決めました。そのため、御田をやる前から、これで最後だということを我々やマスコミ方面、あるいはお世話になった国会議員の先生方にも、保存会の方から連絡をちゃんとして、今年で最後ということで開催することになりました。

ここで、御田の継続が困難な要因を挙げておきます。先ほどから紹介しているとおり、地区の20代から30代の若者が激減していること。この時すでに、御田をやる役者が2名しかいない状況でした。役者は4名必要なんですけども、その人たちは100分近く屈伸運動のような体力の必要な演技をやることが求められる。若者は30代半ばの2人が最年少。今後、地区のみで、杉野原区の行事として継続してやっていくのには困難である。それから、やっぱり文化財としての意識から「公開」という意識を地元は持ってらっしゃるんですけど、公開するには観客等を受け入れる労力が必要で、その地区住民の負担が大きいということ。これなんかも大変に厳しい状況だったと思います。

周辺の地域の協力とか、行政の応援とか、そういうのに頼る方法もありそうですが、それを依頼するのもやっぱり限度がある。区として外部にお願いして手伝ってもらうことを、年々やっていくということにも、やっぱり限界があるという認識がありました。「御田の舞を保存することを理由に地域が割れたり、それで地域社会がごたごたするようなことは避けたい」という思いもあったそうです。御田を続けたいということは、みんな気持ちは変わらないんですけども、ほんとに2年後、次をやるかやらないかという時点においては、もう止めてほしいという意見が多数になって。それで「今年で最後」ということにしようと。今後は、若い人に委ねていくような形で継続を考えていけたらということで、一応、休止することになったそうです。



図8 御田舞奉納（2018年2月11日）



図9 御田舞奉納（2018年2月11日）



図10 御田舞奉納（2018年2月11日）



図11 御田舞奉納（2018年2月11日）

そして迎えた、今年2月の御田の様子です。たくさんの方が阿弥陀堂に押し寄せて、最後の奉納ということもあったかもしれませんが、見に来られました。これは、舅役の様子ですけれども、とっても本当にうっとりするようなきれいな舞姿でした。記録化できたので、本当に何か活用できたらいいなと思うんですが。田植子役の子どもたちも、最近女の子も参加してたんですが、今年はちょうど、何か運良く5人、地域外の子どもたちもいますが、男の子ばかりでやれたっていうのが、地元としても嬉しかったようです。



図12 御田舞の役者たち（2018年2月11日）

御田の主役をやったのがお父さんで、そのお子さんも田植子で出ていたりするんですが、その年齢の間の人がいないんです。10代、20代っていう人たちが地元にはいない中で、一通りの行事を無事にやりきったっていうことで。最後の御田の雰囲気は、暗くありませんでした。むしろ明るい。何かすごく、今年もちゃんとできたっていう、その達成感のほうにむしろ広がっているような印象でした。私も大学院生の頃から20年近く御田を見ていますが、晴れ晴れと明るくなって、みんな笑顔でした。ただ古老の方々に聞いてみると、やっぱり、これが2年後になくて「もうこれで最後だと思うと寂しい」という話も聞きました。そういう状況の中で、今年で最後という御田は終了しました。

### 3. 和歌山県内における民俗芸能の中断／再興の歴史

こういう状況になってくると、民俗文化財のあり方について思い直すことが色々あります。各地で続いている民俗芸能っていうのは、歴史的に見ると、やはりずっと連続してあるわけじゃなくて、不連続と叫ぶといいのか、中断とか再興とか復活とか、そういったことを繰り返してきた歴史ではなかったのかな、と思います。

そのことについてよく参考になる事例が、実は和歌山県の国指定の文化財にあるので、ちょっとご紹介したいと思います。

#### (1) 那智の田楽

1つ目は、ユネスコ無形文化遺産になっています「那智の田楽」です。

これは、熊野那智大社の例大祭である「那智の扇祭り」という、毎年7月に行われている祭りで奉納される神事芸能ですが、明治以前、神仏習合の時代は、那智山の社僧と呼ばれるお坊さんたちの中で行われていた仏教芸能でした。プロの芸能者ではないけれど、いわゆる「寺田楽」というもので、セミプロのような形で、お坊さんが修行の一環として質の高い芸を保ちつつ、何百年も続けられてきたものが、明治の初めの神仏分離でもって、社僧が還俗をすることになって、田楽の伝承者が山から下りて離散をしたので、約50年間途絶えていました。

それを大正時代になってから、当時の皇室博物館の関保之助という有職故実の専門家が調査に入った折に、那智大社に残っていた田楽の衣装や楽器を調査して、そういったものの価値を、那智大社の神職の人々と議論するうち、今でもまだ山を下りた社僧の人で、元々20代で田楽を踊った人が70



代ぐらいで生きてますよ、という感じの話になったようです。

当時、那智大社の神職の1人で、元社僧の家筋から神主になった潮崎八百主という人がいました。この人はとっても芸能に精通した人だったようなんですが、かつて田楽を踊った経験者に来てもらって、いろいろ話を聞き、動作などを聞き書きして、記録した『田楽要録』という書物を作りました。

そこで、今まで社僧の生き残りの古老が記憶していた田楽を、那智山の青年会が新たに取り組むっていうことになって、大正10年に復活したという経緯があります。それが今、国指定の文化財になって、さらにユネスコ無形文化遺産になっています。

そういう事実を考えると、やっぱり記録をとったことの意味や価値がよくわかります。文化財調査もそうですけれど、こういう取り組みが、数十年たっても、また何かできるような可能性を残す術にもなっている。私は、この那智の田楽の復興プロセスを、和歌山県における民俗文化財保護の始まりだと思っています。

記録にとる重要性というのは、今に限らず、昔の人たちにもあって、熱い思いがあったんだなということを考えさせられます。それから、江戸時代までの社僧が伝えた田楽と、この那智山の青年会が中心になった田楽は、演技手が大きく変わってるけれど、それでも国指定の価値があると理解されていることも、今日の文化財保護の考え方として、とても重要だと思います。何か文化財的な価値判断には、時代状況や研究の動向に沿って、新たに作り上げられた性質の部分もあると思うんですが、ある伝統や文化を伝えるために払われた努力や工夫に対する評価、そういう部分にも焦点を当てて文化財のあり方を考えなきゃいけないと思うわけです。

## （2）花園の御田舞

それから、杉野原と同じ、有田川の上流部になるんですけども、かつらぎ町の旧花園村にも御田の伝承があって、ここに杉野原に近い系統である「花園の御田舞」が、国指定として伝わっています。

この御田も、太平洋戦争ですとか、昭和28年におこった有田川の大洪水に遭って、その後も中断したりと、何度もそういうことを繰り返してきました。けれど、そうした中で、やっぱりこの御田を何とか伝えたいという地元の人々の強い思いがあって、昭和50年に、それまでは花園村の梁瀬地区という一

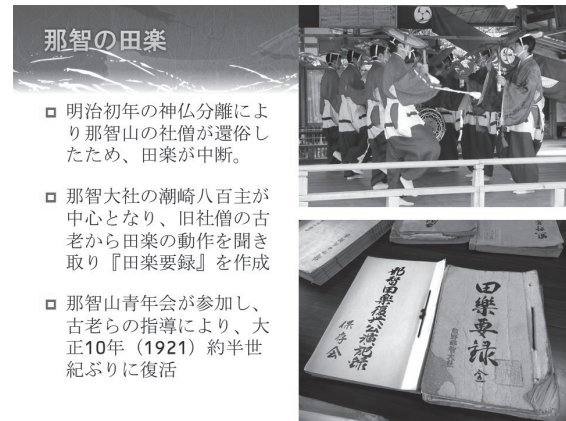


図13 那智の田楽



図14 復興直後の那智の田楽

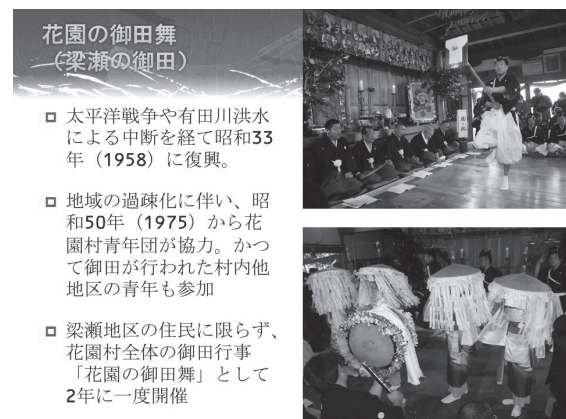


図15 花園の御田舞（梁瀬の御田舞）

つの大字でやっていた御田の行事を、花園村青年団に協力してもらうことを通じて、花園村全体でこの御田を守っていこうという伝承地盤の改革が行われました。

これは、今考えても、かなりの大英断だったと思います。ですから、この御田は、本当は「梁瀬の御田舞」なんですけれど、国指定になる前に花園村全体の御田としたので、「花園の御田舞」という名称になっているんです。

元々あった伝承母体を、現実には即して改編して伝承を持続させる、こういう形で継承を可能にした例も国指定の文化財にはある訳で、この花園の御田舞も、民俗芸能を広域化をして支える1つの例としては、全国的に見ても、非常に早い事例になるのではないかと思います。

#### 4. 無形民俗文化財の危機から学ぶべきこと

今まで、申し上げてきたような事例も含めて無形民俗文化財の伝承のあり方を考えていくと、どういふふうに持続していくかという方法にも、何かいろんな可能性とか、持っていき方とか、かなり多様さを含んでいるのではないかと思います。

杉野原の保存会としても、これまで続けてきた経験から、やっぱり何らかの形で、公開はできなくなっただけでも、保存・伝承は努めていきたいという意識はお持ちなんです。例えるなら、花は咲かないけれども、幹や根っこは生きている状況だと思います。そういう中で、保存会の方々の責任でもって、これをやる、やらないっていうことも尊重したいし、継承していくことに寄り添って、いろいろなことを考えていきたいと思います。今回の状況は長い時間でみれば過去何度目かの中断だと思うんですけれども、そういった目線で、今後、保存会とか関係者ができることは何だろうかということを、考えるべきだと思うわけです。

一つ思うのは、文化財で、最近「活用」のことがいわれていますが、活用っていうと、今は何かちょっと観光振興とイコールみたいな印象で、お客さんに来てもらって、お金を落としてもらうことを文化財の活用ということが多いですけれども、どちらかといえば学術的な活用の分野を、もう少し押し出せないかと思っています。

杉野原の御田舞は、今度いつできるか分かりませんが、その間に、保存会の活動として、何らかの協力、それはワークショップなのか、展覧会なのか、講演会か分かりませんが、何かの形で保存会に刺激を与えて、外部との接触や交流を保ちながら、何らかの活用に協力してもらって、それを保存会

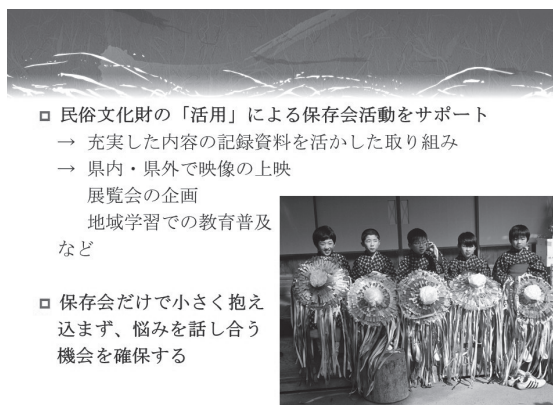


図 16



図 17 和歌山県民俗芸能保存協会



の活動とすることができないかなと思っています。

今日は、全国の皆さんがいらっしゃいますので、何かこういう事例や素材を使って、資料を貸し出してほしいとか、何かそういう希望があれば、ぜひ杉野原の御田舞をお引き立てください、みたいな気持ちでおります。

あと、保存会だけで小さく抱え込まずに、悩みを話し合う機会を確保していくことも大事だと思っています。その関連として、最後に「和歌山県民俗芸能保存協会」のことを紹介させて下さい。

この協会は、昭和50年に発足してすでに40年以上やっている協議団体です。この会の発端をつくってくださったのは、かつて東文研にも在籍しておられた三隅治雄先生です。その三隅先生が音頭を取ってくださって、和歌山県内で指定文化財の保存会による協会を作り、県の文化遺産課が事務局を持ち、会費を集めて、保存会の交流や民俗文化財の保存・振興など、いろいろな活動を年ごとにやっています。

そういう中で、毎年専門家の先生をお招きして講演会を催したり、保存会の方をパネリストにして、それぞれの団体での伝承の工夫や悩みなどを話していただく機会にもしています。一昨年は、今日のコメンテーターの星野紘先生にご講演いただきました。講師にお招きする先生方も、必ずしも和歌山県の事例をご存じとは言えない方もおられるので、他府県の事例などをお話ししていただいて、保存会の人たちにはそこから何かヒントを掴んでもらえればという形でやっております。

今年度も平成31年3月予定なんですけど、どなたか引き受けていただけないかなっていう……、今日はちょっと宣伝も。下を向かないでください（笑）。講演を聞いてくださるのは、みんな、地域の保存会の会長さんとかとても熱心な方々で、そういった方に、ぜひ提案とか提言とか、こういう事例もあるよみたいなお話をしていただいて、交流をしていただきたいなと思っております。

最終的なまとめは、また後半の議論にもなるかもしれませんが、私の報告としましては、以上で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

## 無形民俗文化財の危機から学ぶべきこと ―杉野原の御田舞を中心に―

蘇理 剛志（和歌山県教育庁 文化遺産課）

## はじめに

- ・高野・熊野の宗教文化が全国各地に伝播。中世に遡りうる民俗伝承が数多く遺る
- ・地域の過疎化、高齢化、少子化により、地域の伝統行事の開催が年々難しくなっている

## 1. 杉野原の御田舞について

- ・所在地： 和歌山県有田郡有田川町杉野原
- ・保護団体： 杉野原の御田の舞保存会
- ・文化財指定の経過： 昭和 41 年（1966）4 月 12 日 和歌山県指定無形文化財  
昭和 56 年（1981）12 月 24 日 国記録選択無形民俗文化財  
昭和 62 年（1987）12 月 28 日 国指定重要無形民俗文化財

※「雨錫寺阿弥陀堂」室町後期の仏堂 平成 3 年（1991）国指定重要文化財

中世高野山領の山村の仏堂の代表例。杉野原の精神的な拠り所

## ○指定後の伝承の経過

- ・昭和 52 年（1977）以後、2 年に一度の開催（※ 西暦偶数年 2 月 11 日公開）
- ・昭和 62 年（1987）国重要無形民俗文化財に指定 その後も地域の過疎化が進む
- ・平成 18 年（2006）度より安諦小学校の地域学習として地域外の子どもが田植子役に参加
- ・平成 25 年（2013）保存会が今後の伝承と記録化につき有田川町・県教委と相談  
→ 御田を正しく継承するための映像記録による保存事業を計画、文化庁に指導を仰ぐ
- ・平成 26 年（2014）から、隣接する押手地区の若者が御田役者として参加

## 2. 杉野原の御田舞の映像記録作成とその後の経過

- ・平成 24～26 年度 高野山周辺地域民俗文化財調査事業（和歌山県教育委員会）

杉野原の御田舞を含む高野山周辺地域に伝わる無形民俗文化財（オコナイ、御田、仏の舞、風流囃子物・風流踊り、念仏芸能等）に関する総合調査を行い、民俗文化の特色と分布、歴史と現状を明らかにし、『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』を作成

- ・平成 27～28 年度 杉野原の御田舞民俗文化財伝承・活用等事業（有田川町教育委員会）

国庫補助を得て「杉野原の御田舞映像記録等作成実行委員会」を組織。専門家による現地調査、御田舞の伝承にかかる詳細な撮影を実施して、映像記録 DVD（普及編・伝承編）及び映像記録解説書を作成

## 資料 5-2

## ○記録作成のポイント

- ・行事当日の様子よりも、練習や準備の様子をできるだけ詳しく記録  
（稽古の付け方、衣装の着付・化粧、飾り付け、賄いの料理、清掃作業、その他の伝統行事など）
- ・御田に用いられる歌謡・台詞（難解な中世の言葉）、音楽的特徴の詳細な分析
- ・行事に携わる人々からの聞き取りにより、御田の伝承に関する現在の心境等も記録  
→ 地域の伝承の文脈を知り、地域に寄り添い、見守り、模索する

「御田舞に参加することは考えも及ばなかったが、役者の経験をする機会があって気持ちが変わり伝承を続けたいと思っている。今の若者にも、保存会に参加することで伝承を継続する意味を分かって欲しいが、無理をいって、人間関係の問題が生じないように心配りが大切である」（指導者 A 氏）

「演じる上で難しかったことは、歌本をみて意味の分からないままに演じなければならなかったことであつた。その頃のことを考えると、現在の若者たちは、意味が分からなくても積極的に演じており、指導者としては感謝もし尊敬の念もある。今後も、御田舞の伝承には自分のできることで携わっていきたい」

（指導者 B 氏）

「今の若い人たちはすごい。御田の良さを十分理解しており、この伝統芸能を途絶えさせたらいかん、という意識をもっている。そのために、逆に追い詰められた状態になっている。私たちが若かった時代は、誰かがやってくれるという意識があり、少なからず甘えがあった。支える人も多かった」（保存会の長老）

- ・演者の担い手確保を広域に募る / 持続可能な体制の構築 / 女性の参画
- ・学校教育との関わりを増化 / 若年世代対象のワークショップ
- ・行事の諸準備、観客の案内・もてなしなど地域住民による運営負担の軽減 なども議論

## ◎杉野原区・杉野原の御田の舞保存会では、平成 30 年度をもって伝統ある御田の舞の

「公開」をひとまず最後とすることを地区内で決定 → 区の行事として今後行えない

## 【公開が困難となった要因】

- ・杉野原区で御田役者ができる地元の 20 代～30 代の若者が激減（現在 2 名）
- ・役者（4 名）は、屈伸運動等の体力が必要な演技を約 100 分にわたり行う必要
- ・杉野原在住の若者は 30 代半ばが最年少。今後地区のみでの継続は困難
- ・文化財として「公開」するには、観客等を受け容れる労力が地区住民の負担が大きい
- ・周辺地域、行政等の応援・協力を依頼するのも限界があるという地区住民の認識が強い

「御田舞を保存していくことで、地域がごたごたすることは避けたい」

「区全体としても、続けたいという意思は皆がもっている。しかし内情は非常に苦しい。きちんと伝統を守ることができる形で続けていきたいと思うが、継続、中断、廃止に対する判断は、若い人たちがするのがいいのではないか」（保存会の長老）

◎杉野原の御田の舞保存会では今後も保存会の活動を継続し、何らかの形で御田の舞の

「保存」・「伝承」に努めたいとしている

## 3. 和歌山県内における民俗芸能の中断／再興の歴史

☆歴史的に見れば、今日伝わる無形民俗文化財も中断と再興を繰り返してきた例が多い

## ○那智の田楽（国指定重要無形民俗文化財／ユネスコ無形文化遺産：東牟婁郡那智勝浦町）

明治維新後の神仏分離により那智山の社僧が還俗。仏教芸能である田楽は中絶  
大正中期に帝室博物館学芸委員・関保之助（1868～1945）が那智大社の什物調査  
那智大社の潮崎八百主が中心となり、旧社僧の古老から田楽の動作を聞き取りをもとに  
『田楽要録』を作成。那智山青年会が参加し、古老らの指導により、大正 10 年（1921）  
約半世紀ぶりに復活 → 和歌山県下での民俗芸能の文化財保護的記録作成のはじまり

## ○花園の御田舞（国指定重要無形民俗文化財：伊都郡かつらぎ町）

有田川の上流、杉野原の川上に位置するかつらぎ町花園梁瀬に伝わる御田の芸能  
梁瀬の大御堂（大日堂）で演じられ、もとは梁瀬村（4ヶ字）で行う。（梁瀬の御田）  
戦時中や昭和 28 年（1953）有田川水害による中断を経て、昭和 33 年（1958）に復活、  
翌 34 年に「花園村郷土古典芸能保存会」を組織。  
地域の過疎化に伴い、昭和 50 年（1975）から花園村青年団の協力を得る形で、かつて  
御田が行われた村内他地区の青年も参加し、梁瀬地区に限らない花園村全体の御田行事  
「花園の御田舞」として開催 → 和歌山県下での民俗芸能の担い手広域化のはじまり

## 4. 無形民俗文化財の危機から学ぶべきこと

- ・自らの責任で、できる範囲で「御田」を守り継承していくことの意味
- ・過去何度目かの中断の時期を向かえた現在、保存会や関係者ができることは何か
- ・民俗文化財の「活用」による保存会活動をサポート
  - 映像記録を作成したことで、御田の舞の芸態はひとまず保存できた
  - 充実した内容の記録資料を活かした取り組み
  - 県内・県外で映像の上映、展示の企画、地域学習での教育普及 など
- ・保存会だけで小さく抱え込まず、悩みを話し合う機会を確保する
  - ☆ 和歌山県民俗芸能保存協会「民俗文化財講演会」の開催（次回は平成 31 年 3 月頃）

## 【参考文献・記録等】

- 和歌山県教育委員会編『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 平成 27 年 3 月  
有田川町教育委員会編『杉野原の御田舞映像記録解説書』 平成 29 年 3 月  
有田川町教育委員会編『杉野原の御田舞奉納記録』DVD（伝承用・普及用） 平成 29 年 3 月

## 事例報告 4

# 麒麟獅子舞の保存伝承に向けた新たな取り組みについて

原島 知子（鳥取県教育委員会）

久保田：続いて、個人のご発表では最後の発表になります。鳥取県教育委員会の原島知子さん、どうぞよろしくお願いいたします。

\*\*\*

原島：ご紹介にあずかりました、鳥取県教育委員会文化財課で文化財主事をしております原島知子と申します。今日はよろしくお願いいたします。今日は、すごくたくさん有益な発表がいっぱい、頭がだいぶいっぱいになっております。

鳥取県には獅子舞があるんですけれども、その獅子舞をやっている人々が主体的に集って、今後、どのように自分たちの獅子舞をやっていけば、保存伝承していけるのかということを考える「<sup>いなば</sup>因幡<sup>きりんじしまい</sup>麒麟獅子舞の会」という会を、昨年に発足いたしました。こういった取り組みというのは、鳥取県にとっては非常に新しい取り組みになりますので、そのことについて、今日はお話をしていきたいと思っております。

今日お話しする内容ですけれども、最初に「麒麟獅子舞」というものについて、どういうものであるか。そして、麒麟獅子舞が持っていた保存伝承の課題。そして、それに対する課題の取り組みにつきまして、どうやってその取り組みが始まって、どのように設立され、どんな活動をしているのかということ、少し詳しくお話しさせていただいた後、最後に今後の期待と課題ということで、まとめさせていただきたいと思っております。

## 1. 麒麟獅子舞について

まず、麒麟獅子舞についてです。鳥取県の場所は大体イメージしていただけるかと思うんですけれども、中国地方の日本海側、山陰と呼ばれる所にあります。鳥取と島根とどっちがどっかなって、きつと悩まれる方も多いと思うんですけれども、鳥取砂丘のある右側が鳥取県、出雲大社のある左側が島根県になります。鳥取県の東部、東側には、今画面で映し出しております麒麟獅子舞と呼ばれる獅子舞が、非常にたくさん分布をしております。

姿としましては、この獅子頭が非常に印象的だと思うんですが、麒麟です（図1）。動物園のキリ



ンではなくて、キリンビールとかに出てくる、中国の想像上の霊獣の麒麟を思わせる姿をした獅子頭を付けた2人の人が、獅子舞を行います。そして、あやし役として、右側にいます「<sup>しょうじょう</sup>猩々」というのが、普通でしたら、天狗がよく付くと思いますが、でも、猩々と呼ばれる真っ赤な面を付けた者があやし役となります。

そして、舞が非常にゆったりとした舞で、厳粛であり荘重であり、能のような舞だというように表現をされます。太鼓と鉦と笛のみの囃子で行われます。ちょっとなかなかイメージがしにくいと思いますので、ちょっと映像を見ていただこうと思います。

鳥取県には、鳥取伝統芸能アーカイブスというホームページがありまして。県ではなくて、NPO法人さんと一緒に作って公開しているものなんですけど、鳥取県内の伝統芸能が非常にたくさん載っております。伝統芸能検索というところをクリックすると、いろんな時期やジャンルによって見ることができるということで、現在、213件ものデータが載っております。ちょっと獅子舞の映像を見てみたいと思います。

#### 〈映像開始〉

これは鳥取県鳥取市の、ほんとに山間部にあります集落の中で行われている様子です。このように、先頭に猩々が立って獅子をいざないまして、そして、2人立ちの獅子が舞うという形をとっております。

今鳴ってるのが、鉦です。ちょっと姿が写ってませんが、打ち鉦と呼ばれる、吊るして叩くタイプの鉦です。そして、獅子舞だけの動きになると、笛が入ります。

見ていただくと、非常にゆったりと舞っているのが、お分かりになるかと思います。ちょっとよそ見をして、また視線を戻しても、同じ格好をしてたりとかするんですけども、舞手にとっては非常

## 1 麒麟獅子舞について

### 姿

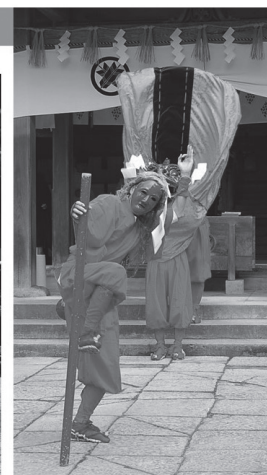
- 麒麟を思わせる獅子頭（面長・頭部に角・直立した耳・金色）を用いる2人立ちの獅子舞
- あやし役に猩々がつく

### 舞い方

- 厳粛・荘重・能舞的と表現
- 太鼓・鉦・笛（ない場合もあり）の囃子



日吉神社（鳥取市市勢）



倉田八幡宮（鳥取市馬場）

図1 麒麟獅子舞について

### 麒麟獅子頭の特徴



- ② 頭部に角
- ③ 直立した耳
- ④ 金色

- ① 面長

### 唐獅子系獅子頭との比較



顔・長さ	48.5cm	32.5cm
顔・幅	30.0cm	30.0cm
顔・高さ	22.0cm	39.5cm
重さ	5.5kg	1.5kg

図2 麒麟獅子頭の特徴

に、かえって体力を使う、姿勢の維持をするのが非常に大変な獅子舞になります。この地区は、非常にしっかりと舞を伝えていまして、これを全部舞うと、大体 40 分間ぐらいかかると聞いています。

〈映像終了〉

ちょっと雰囲気を知っていただけたと思いますので、元に戻ります。

獅子頭の特徴として見られるのが、図 2 の写真でも分かるように、一般の唐獅子系の獅子頭に比べて、格段に顔が長いということです。このように、面長であること、そして、頭部に角があること。そして、耳は動かない直立した耳の形をとります。そして、金色であること。必ずしも金色なだけではないのですが、この形が最も定型化した形になります。

こういった形の獅子頭を持って舞うんですけれども、重さが 5.5 キロあるんですけれども、右側の唐獅子が 1.5 キロなのに対して、非常に重たいということがいえるかと思います。獅子頭の調査をしていく中で、4～5 キロのものが最も多かったですが、重いものの中には 7 キロとか、10 キロ近いものというのもありました。

### 麒麟獅子舞のはじまり

こういう獅子頭を持って舞うわけなんですけれども、どのように始まったかということについても、簡単にお話をしておきたいと思います。

慶安 3（1650）年に、池田家の初代藩主池田光仲が、日光東照宮のご神霊を鳥取に勧請しまして、鳥取東照宮というのを建立します。池田光仲は、徳川家康のひ孫に当たる人で、幼少で鳥取を治めることになったことから、自らの権威付けのために東照宮を勧請してきたというふうに考えられています。そして、その東照宮のお祭りに「権現祭」といいますが、この権現祭の祭礼行列に獅子舞と狸々をセットで登場させた、それが始まりだというふうに、現在、考えております。

その東照宮の祭礼を描いた絵巻を見ていただくと、獅子と、それから後ろ姿の狸々が出ているんですけれども、獅子頭は、今、さっき見ていただいたような面長ではなく、もうちょっと顔が短いような形になっています。それに対して、1766 年の絵巻におきましては、先ほど見ていただいたように、面長の麒麟を思わせるような形になっています。ですので、当初から麒麟を思わせる姿ではなかったけれども、江戸時代の中頃には現在と同じものが現れてきているということが分かります。

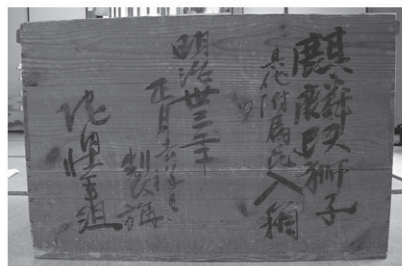
### 麒麟獅子舞の展開

図 3 に出ている獅子頭は、修理した時に、中から銘が出てきまして、その中に、「天明八年（1788 年）申ノ歳之作」というふうに書かれておりますので、先ほどの絵巻から 20 年後です。その頃にはこの獅子頭のような形になっていたのは間違いないというふうに考えられます。

ですので、江戸時代初めに東照宮の祭礼に出てきた獅子舞と狸々、それが、江戸時代の中ごろには、麒麟を思わせるような姿になって各地に広がっていきます。そして、明治時代になって、麒麟獅子と呼ばれるようになりまして、さらに広がっていきます。江戸時代の書類では、いずれも「獅子舞」としか書いてなくて、「麒麟」とは一言も書かれていません。ただ、明治になると、この箱です。これは獅子舞の用具箱に「麒麟頭獅子」というふうに書かれておりますけれども、明治 33 年には、そのように呼ばれていたということが分かっています。

## 麒麟獅子舞の展開

- ① 江戸時代初め、池田光仲が鳥取東照宮の祭礼に獅子舞と猩々をセットで登場させる。
- ② 江戸時代中頃、獅子頭が麒麟を思わせる姿になり、各地に広がり始める。
- ③ 明治時代、麒麟獅子と呼ばれるようになり、さらに広がっていく。



熊野神社獅子舞用具箱（岩美町院内）



湯所神社獅子頭（鳥取市湯所）

舌裏から出た木札裏

「天明八（1788）申ノ歳之作。」

図3 麒麟獅子舞の展開

## 麒麟獅子舞の分布

先ほど、東部にたくさんあると言いましたが、一体どれだけあるのかというのを地図で示しておきました。地図上の点が麒麟獅子舞が行われている、行われていた場所を全て示しています。ざっと198カ所に点を打っております。これが最大の数になります。そして、130の団体が今日現在、まだ舞っている、活動されている団体になります。見ていただくと、鳥取砂丘がこの辺になるんですが、この鳥取市の中心部を中心とした辺りに、非常に濃密に分布していることがよく分かるかと思いますが。中部、西部には、ほとんど分布はしていません。

麒麟獅子舞の分布

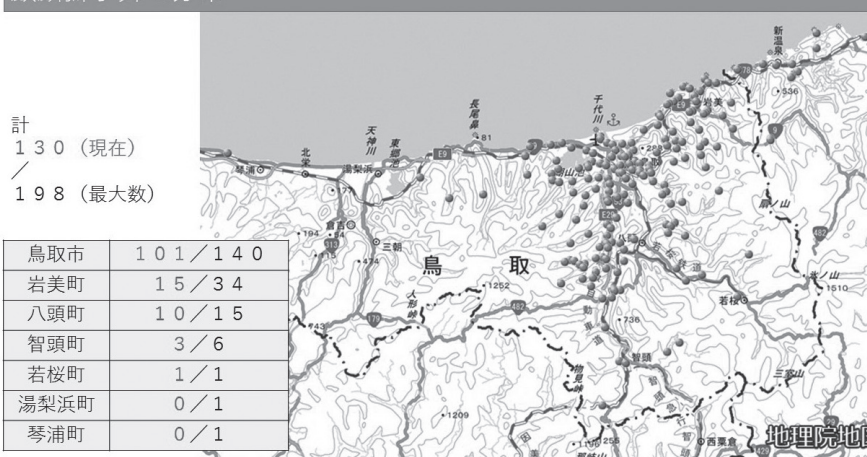


図4 麒麟獅子舞の分布



## 麒麟獅子舞の舞われる時期

その舞う時期は一体いつかというのを、大まかに5つ挙げております。お正月と3月の初午の祭礼、そして春、3月から5月までの氏神祭礼、夏、7月の氏神祭礼、秋、9月、10月の氏神祭礼の際に、獅子舞が舞われています。中でも数が多いのが春でして、特に3月、4月は、毎週土日にならずどこかで獅子舞が見られるというような状態になっています。この赤い衣装、すごく目立つので、通りを歩いていると、この獅子舞に会うことが3月、4月は度々あります。

### 麒麟獅子舞の舞われる時期

- 正月
- 初午祭礼
- 春の氏神祭礼
- 夏の氏神祭礼
- 秋の氏神祭礼



図5 麒麟獅子舞の舞われる時期

## 麒麟獅子舞の調査

というような細かい情報は、実は平成26年度から29年度の4年間にわたりまして、文化庁の協力を得て、因幡の麒麟獅子舞調査を行った、その成果になります。タイトルにも付いておりますように、平成21年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されまして、その調査として行ったものになります。

行政関係の皆さんには、今年の3月か4月の頭に、非常に分厚い重たい報告書がお手元に届いたのではないかと思います。そちらに目次も載せておりますが、麒麟獅子舞について、一体どれだけ分布しているのか、そして、専門家の皆さま方のご協力を得まして、さまざまな観点から獅子舞についての考察を深めたところになります。ちなみにこの報告書は有償販売もしておりますので、お手元に1冊欲しい方は、後ほど、私の所までお伝えください。

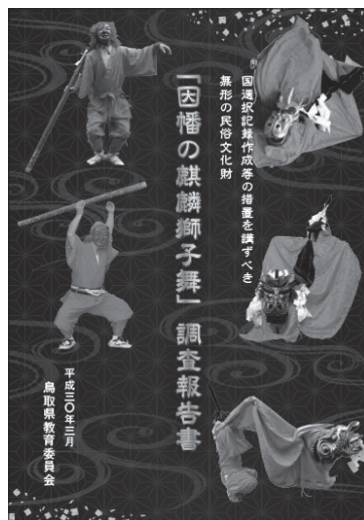


図6 『「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』

## 2. 保存伝承の課題

というのが、麒麟獅子舞の全体像になるわけなんですけれども、では、この保存伝承の課題、これまでお三方の発表の中でも度々あったことですので、目新しいことではありませんが、鳥取県でも同ような状況が見て取れます。

何と云っても、過疎化、少子高齢化による担い手人口そのものの減少で、集落そのものの人数が減っていることがまず1つ。そして、もう1つ大きいのが、無関心・無理解層の増加。地域に人はいるけれども、麒麟獅子舞をやることを選択されない方々、応援しようとしらない方、関心を持たない方というのが、やはり増えています。若い人はいるんだけどね、っていう話は、度々聞くところです。

そしてまた、生活の環境が変わって、同じ勤めでも誰もが土日が休みなわけではありませんし、サービス業とかで夜遅くまで、また、介護とか病院の方とかも結構多いので、どうしても夜勤があったりとか、予定がみんな合っていないことがあります。そうした状況から、後継者が減少して、確保が困難になっています。そして、人がいないから、財政基盤も縮小化するし、そして、伝承に必要な技術、伝承材料の確保なんかも困難になる。麒麟獅子舞でいうと、わらじが必ず要るんですけども、その確保がなかなか難しいってということもいわれています。

それから、これは行政側との話なんですけれども、各保存団体と、その支援者等のつながりが少なく、行政側は何か援助したいと思っているし、保存会側も何か援助があったら欲しいと思っているけれども、そこがうまくつながらなくて、後から聞いて、それだったら補助できたのについてというような話も度々あります。

こういった課題に対して、これまで鳥取県として講じてきた対策を下に挙げております。団体と行政が、一緒に保存伝承について検討する場を提供したり、これは先ほど、和歌山県さんや奈良県さんでも出てきたお話ですけれども、鳥取県では「民俗芸能フォーラム」という形で、平成21年度から連続して行っております。

また、そういった中で、補助・助成制度の活用や周知ですとか、伝承の意欲が向上するような支援、そして、後継者育成活動を支援するような補助金・助成金を出したり、定期的に状況把握調査をして、保存団体と支援者のつながりをつくっていかうといったことを行ってきました。

ここでいえることは、これらの活動は、いずれも行政と個々の団体、つまり1対1、団体1つに対しての活動だったように思います。そうではなくて、団体を1ではなくて、面として捉えてやっていこうというのが、これからのお話です。

### 3. 課題に対する新たな取り組み

#### (1) 新たな取り組みのきっかけ

先ほどからお話ししてきましたように、語り合う場というのを、鳥取県では平成21年度から、さまざまなテーマを設けて、民俗芸能フォーラムという形で行ってきました。そして平成28年度に初めて、1つの芸能に特化した内容でフォーラムを行いました。「語り合おう！それぞれの麒麟獅子舞への思い」というものです。平成28年の6月19日に行いまして、この時はまだ198団体も把握していなかったのが、158団体に案内を出しまして、26保存会60名が集まってくださいました。

その中で、当時進行中でした、先ほどの調査報告書の中間報告をした後に、グループディスカッションとして、それぞれの麒麟獅子舞への思いというのを語っていただきました。60名の方がいらっしゃいましたので、非常にたくさん来ていただきました。ですので、12組のグループにわかれ、テーブルごとに、麒麟獅子舞が抱えている現状と課題をまず出してもらいまして、それに対する対策について話し合ってくださいました。

ここで出てきた意見、いろんなものがあつたんですけれども、これだけたくさんの団体、人数があつても、困っていること、また、いいと思っていること、楽しいと思っていることというのは、非常に共通していました。例えば、楽しいこととして、地域の人たち、一軒一軒家を回っていくんですけれども、地域の人たちとのつながりができる、誇りになる。そして、一番多かったのが、お酒が飲める。お酒を飲んで楽しい、楽しい獅子舞の1日を過ごしているってということが、非常に共通していました。





たんですけども、その会の目的について、十分な意見交換ができたとは言い難かったです。また、この会議の位置付けも、誰が、どういう人に声を掛けて、どういう人が集まっているのかよく分からないという非難もありましたので、改めて会の発起人会をつくって話し合っていこうと進んでいったのが、次の動きになります。

続いて11月には、これぞという方にお声掛けをして、第1回の発起人会を行いまして、そして、12月にもさらに2回目を行って、どういう会にしていくかという内容固めをいたしました。そして発起人会の名前で、新しい会を設立しますという案内を配布しました。

ちょっと細かい動きはおきまして、新しくつくる会をどのように皆さん方に周知していくかというところで、合同の説明会を合計5回行っております。説明会では、会を設立しようとしているのは、団体の皆さん方なんですけれども、この動きは行政にとってもいい動きだということで、県だけでなく、関係の市、町の教育委員会さんにもご協力いただいて、一緒に合同の説明会を行いました。

### (3) 因幡麒麟獅子舞の会の発足

そして、いよいよ会の発足に至りましたのが、昨年29年の2月25日ということになります。当日は、約50団体の方が集まってくださったんですけども、最終的に39団体の加盟というふうになっております。この時に、会の設立趣旨や会則などについて、話し合いを行いました。

こうして出来た因幡麒麟獅子舞の会ですけれども、麒麟獅子舞の保存会の活動を援助する、お互いに援助することによって、鳥取県の伝統文化の継承・育成に寄与することというのを目的としております。そして、具体的な事業内容が3つありまして、保存会を支援する事業、後継者を育成する事業、広報事業という3本の柱を立てています。年会費1,000円ということで運営をしております。

これが、発足当時の取り組みの考え方になります。組織図を見ていただきますと、役員として会長、副会長、会計、そして理事がいる。そして、幹事がいる。会員として、ここの保存会と個人がある。顧問、参与という書き方をしていますが、実際にはこちらは委嘱を受けていないんですけども、県や市・町

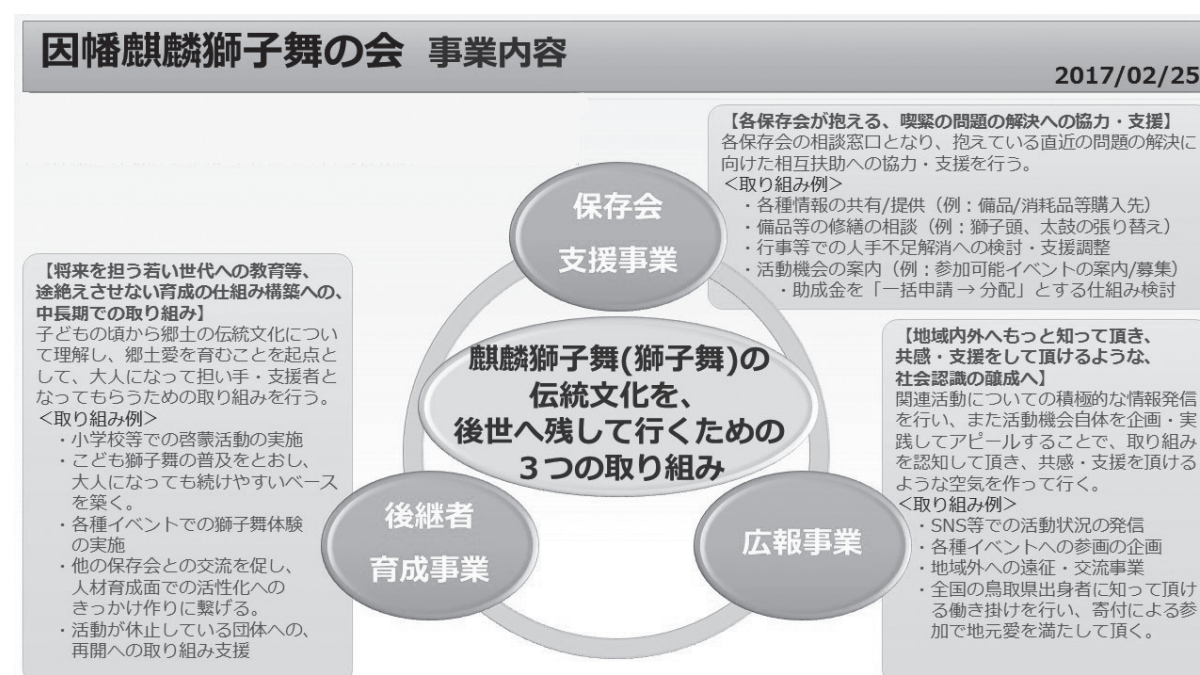


図8 事業内容

の文化財行政が見守り体制をとっているという形になります。

この会の取り組みの考え方をちょっと見ていただきたいと思いますけれども。この会、どういう会にしていきたいかですが、まず各保存会の既存の取り組みを尊重していることが、第1に挙げられます。130の団体があると申し上げました。それぞれの団体はいろんな考え方があります。

麒麟獅子舞をいろんな人に知ってもらいたいから、どんどん外に出て、観光やイベントにも出て、知ってもらいたいんだってという団体さんもあれば、自分の所の神事なので一切外には出たくない、そういう動きすらも言ってほしくないってという考え方の方もおられます。それは、こうして欲しいとお願いするのではなくて、それぞれの考え方を尊重して、お互いをちゃんと知っていくことをまず第1としたい。なので、2番目にありますように、各保存会に施策の強要は行わない。会としていろんなことをやっても、必ずそれをしてくださいというような強要は絶対行わない、ということを大きく挙げております。

そして3番目に、具体的な事業内容をお示しするんですが、最初から全部やるのではなくて、できることから徐々にやっていきましょうという立場を取っておられます。

具体的な事業内容です。こちらは、会のホームページにも出ているので、皆さんも普通にホームページで見ることができるんですが、先ほど言った、麒麟獅子舞を後世に残していくための大きな3つの柱を挙げておられます。1つ目が保存会の支援事業、2つ目が広報事業、そして3つ目が後継者の育成事業ということになります。

保存会の支援事業なんですけれども、これが一番短期的な目線に立ったものになります。現在、保存会が抱えている、すぐに何とかしないといけない問題の解決への協力・支援を行おうというものになります。具体的には、各保存会の相談窓口となって、どうやって解決したらいいかっていう情報共有をしていましょうというものです。取り組み例として書いていますけれども、どこで、例えば備品がなくなっていた、修理したいんだけどどこで直せるだろうか、修理するに当たってお金がたくさん要るんだけど、補助金はどうやったらもらいやすいだろうか。人手が足りないけれども、誰か助けてくれる人はいないだろうか。そういった取り組みをしようというものです。

2つ目。こちらの広報事業は、地域の中、そして外に対して、もっと麒麟獅子舞を知ってもらって、共感、支援をしてもらえるような社会認識をつくっていかうとするものです。この広報活動を単に依頼があったからそれを消化するのではなく、戦略的に獅子舞を外に出すことによって、多くの人に理解してもらえるよう取り組んでいます。麒麟獅子舞がどうして続けにくいのかっていうところの1つに、例えば練習期間を1カ月ぐらい取らないといけないのですが、それがなかなか出れないといった悩みがあります。1カ月間出るためには、職場の理解が要るし、家族の理解も要ります。また、せっかく舞って、当日舞った時に、麒麟獅子舞を待っていてくれる人がいなかったら、舞った感じがしません。そういった社会全体が獅子舞を歓迎してくれる、やってほしい、そういった雰囲気をつくっていくために、広報活動に力を入れるんだということをしっかり認識をしておられるところです。これは、なので、中長期的な取り組みです。

3つ目の後継者育成事業、これはもはや長期的な取り組みになるといえると思います。将来を担う若い世代にどう伝えていくのか、それを考えていましょうという取り組みになります。小学校で総合学習なんかで取り上げてもらったり、いろんなイベントで獅子舞の体験を子どもたちにしてもらおう。そういったことを考えているものになります。

この会議が発足した時には、やはり非常に注目をされて、地元紙の『日本海新聞』さん、『山陰中



央新報』さんに、しっかりと発足のことについて、記事が載ったところです。

具体的な、大きな理想を掲げてスタートしたこの会、じゃあ、どのように活動を現在続けているかというところをお話したいと思います。

#### (4) 因幡麒麟獅子舞の会の活動状況

図9は平成29年度の活動状況です。

この活動の1つ目は、保存会の支援事業です。保存会が、それぞれがどんな問題を抱えているのかという聞き取り調査を行っておられます。2つ目は、県や市、町、そして各財団とかにどんな補助金があるのか、どんな助成金があるのかといった情報共有を団体さんへ発信しました。

そして3つ目、私はすごく注目しているんですけども、「わらじ」のあっせんというのをしています。たぶん、全国的に、わらじがなかなか手に入りにくい状態になって、ネットで注文しても高いという話をよく聞きます。麒麟獅子舞の場合、家々をわらじを履いて回っていくので、必要なところでは、1人1日3足ぐらい履きつぶす所もあります。そうすると、非常にたくさんのわらじが要るんですけども、それを確保できなくて何日も苦しむという状況がありました。それをこの会で、生産者と直接つないで、わらじをこの時期にこれだけ要るから確保してほしい。また、それがうまくいかなかったら、多く持っている団体さんから少ない団体さんに融通し合ったりとか、そういった活動をされています。これはすごく評価できる取り組みだなと思っています。

そして、一方で、広報活動のほうも非常に盛んに行われていまして、いろんな依頼に応じてらっしゃるんですけども、特に注目するのが2つ目の「瑞風」です。JRの瑞風とは、山陰のほうを走っている豪華列車なんですけど、その鳥取での立ち寄りの時に、おもてなしとして麒麟獅子舞を披露するってことを行っておられます。また、会報を作成したり、右側に画面で付けております、ホームページを作って情報発信をするということもされております。

後継者育成については、まだまだこの時は計画段階とお聞きしています。

### 3 - (4) 因幡麒麟獅子舞の会の活動状況

#### 2017年度 事業報告

##### 1. 保存会支援事業

- 各保存会の支援検討に向けた、状況把握のためのヒアリング活動
- 助成金／補助金等に関する情報共有活動
- わらじの斡旋

##### 2. 広報活動

- 因幡万葉歴史館「春爛漫フェスタ」獅子舞披露をとおしてのPR活動（2017.03.25）
- 「瑞風」仁風閣立ち寄り時のおもてなし獅子舞披露をとおしてのPR活動（2017.06～）
- 会報の作成／発行による認知向上・不参加の保存会への入会働きかけ活動
- ホームページの設置による情報発信をとおしての共感・支援を広げる情報発信活動
- 出演依頼に対する調査活動

##### 3・後継者育成事業

- 後継者の育成に関する活動方針検討／計画立案

因幡麒麟獅子舞の会HP

平成29年10月吉日

会員の方へ

「草鞋」あっせん販売のお知らせ

当会では支援事業の一環として会員の皆様に向けて「わらじ」を販売します。

販売価格

- 5足単位での販売になります。
- お釣りのいかない額に現金支払いをお願いします。消費税は頂きません。
- 引き渡しについては、指定場所にて受け取りに来てください。
- 時期により在庫が不足する場合があります。目配りをお願いします。必要な時期に応じて早めに注文をお願いします。（納期：約1週間～最長2ヶ月程度）
- 今後の幹事補充事業継続にあたり、生産者を募集しています。草鞋を自分で作成して受けてみませんか。奮ってご参加ください。
- お問い合わせ、ご注文は支援担当理事へ。

因幡麒麟獅子舞の会 2018年度定期総会議案書より

図9 活動状況



事業報告の具体的な流れは、こちらのほうにも、大体どの時期にどうしたかっていうのも書いております。

では、2年目の平成30年度、今年の活動もご紹介をしたいと思います。

保存会の支援事業では、先ほど言いましたヒアリング活動に加えて、わらじのあっせんも、あと、足袋のあっせんも新たに始められました。共同購入すると2割引ぐらいになるという制度を活用して、通常よりも安く、みんなで手に入れようというようなことを、細かいことですが、やっておられます。

活動休止団体の再立ち上げの支援というのも行っておられまして、今年、3年間休止されていた獅子舞の復活につながりました。そこは、笛がちょっと絶えていて、なかなかうまくいかなかったところを、笛を指導できる人がその集落に入って一緒に練習をして、ついに復活をして、当日はその方も一緒に回っておられました。

そして、2番目の広報事業につきましても、瑞風をはじめとしまして、たくさんのPR活動を続け

## 広報活動



20181208 鳥取市・イオン（株）連携協定締結記念イベント 於イオン鳥取北店



図10 広報活動

ておられます。ざっと数えましたら、今年の4月から現在12月まで、30件近くの依頼をこなしていらっしゃいます。自分の所のお祭り以外の活動をそれだけするのは非常に大変なことだと思うんですけども、先ほど言った、みんなに理解してもらうために何とか続けていこうとして頑張っていらっしゃるようです。

そして、3つ目としまして、後継者の育成事業の中で、今年は県の教育委員会のほうで、子ども麒麟獅子舞さんに集まってもらって、体験事業をするというワークショップを行いました（図11）。そちらの活動に全面協力をしていただいたというところがあります。

図10は広報活動の写真ですが、これは先日12月8日に、イオンの鳥取北店で、鳥取市とイオンが連携協定を結んだ記念イベントに、麒麟獅子舞さんが出演し、演目を披露されました。というように、立ち上げに向かって、無事に組織が出来上がり、この2年間、しっかりと活動をされてきました。



図11 後継者育成活動

こちらに書いておりますように、この新しくできた因幡麒麟獅子舞の会というのは、個々の地域で困っていることを、みんなで集うことでお互いが必要とする情報を交換し、解決策につなげる。または、お互いが悩んでいることを共有してもらって、それがすぐに解決するわけではないんだけど、悩みつつも前に進んでいこうという力になる、それを目的として、発足した団体になります。

## おわりに

期待を込めて、課題を挙げております。現在、最初 39 団体から出発した団体、実は加盟数が 40 数団体しかありません。全体の 130 から比べると、ざっと 3 分の 1 に留まっています。せっかくの共有したいという思いも、十分に伝わっていません。そして、入っている団体さんの中でも、意識や温度差が非常に大きく、そして、それが十分に共有されてるとは言い難い状態になります。

そして、団体の中で中心となって活躍されている役員さん、理事さんというのが 12 名います。全体の 3 分の 1 です。その方々は積極的に広報活動などをこなして、自分たちは頑張ってるぞっていうように思っておられます。そのこと自体はとてもいいことなんですけれども、その活動が他の加盟団体さんに伝わっていかない。一体、せっかく入っているのに、何をやってる団体なんだろうかって思ってる方も多くいらっしゃると思います。せっかく 3 本の柱を立てているのに、広報活動があまりにも大きすぎて、他の活動にまだまだ十分力を注げていないという問題点もあります。

行政は、この団体の事務局には一切入っていません。お金も出していません。それは、あえてそのようにしたのですけれども、とはいえ、もう好きにやってくださいではなく、適切な距離を保ちながら、どういう方向に進んでいったらいいか、ちゃんと見守って手助けしていく必要があるというふうに考えております。

その 1 つの動きとして、ちょっとここには書かなかったんですけども、全体、活動してる 130 団体中の 40 数団体がこの会に入っています。以外の他の団体さんはどうするんだという問題につきましては、県が市・町と協力して、全部の麒麟獅子舞を包括する新たな別の団体の立ち上げを、今、行っております。その団体は、麒麟獅子舞をやっていれば、誰でも入る団体、お金も要らない。その代わり、個々の活動だけして、連合会として何かするってことはしない。あくまで、麒麟獅子舞全体をただ網にかけ、連絡を取り得る、そういった団体を考えています。

ですので、麒麟獅子舞をやってる団体を把握するのは、その連合会。そして、その中で、いろんなことをやっていきたい、頑張っていきたいっていう人は、この因幡麒麟獅子舞の会に入って、2 つのネットワークを持って、これから麒麟獅子舞がしっかり伝承していけるように応援していきたいと考えております。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 総 合 討 議

【コメンテータ】 武田 俊輔（滋賀県立大学）

星野 紘（東京文化財研究所名誉研究員）

【パネリスト】 丸谷 仁美・森本 仙介・蘇理 剛志・原島 知子

【コーディネータ】 久保田 裕道

それでは、本日の最後のプログラムになります。総合討議を始めさせていただきたいと存じます。それに先立ちまして、まずコメンテーターの先生をお2人、呼びしております。まず、滋賀県立大学の武田先生、よろしくお願いいたします。

\*\*\*

**武田：**それではコメントさせていただきます。滋賀県立大学の武田と申します。社会学が専門です。ちょっと今回、何を配ったらいいのか分からなかったの、取りあえず、どういう人物かということが分かる資料だけ配りました。

私自身は、ここに書いてありますけれども、「長浜曳山祭」という祭礼の調査を行ってきまして、2019年4月に『コモンズとしての都市祭礼—長浜曳山祭の都市社会学—』という本を新曜社から刊行予定です。また長浜以外にも、民謡に関する歴史社会的な研究や、山口県上関町の祝島という、原発の建設問題をめぐって地域社会の人間関係に問題が生じて、祭りを中断した地域において祭りがいかに復活していったのかについて調査をしています。他にも幾つか滋賀県内で祭礼や民俗芸能の調査をしています。

今日、それぞれ4人の方のご報告はいずれもたいへん貴重な内容だったと思います。その一方でそれぞれの方の観点の違い、状況の違いなどもありまして、なかなか総括的にコメントするのが難しいなと思ってお聞きしていました。私自身は社会学者であって、祭礼や民俗芸能を研究するというよりは、民俗芸能を通じて地域社会を研究するというスタンスにあります。そういう意味でいうと、ちょっと外在的に聞こえるかもしれませんが、2つの観点、1つは空間的な射程を広げた観点から、もう1つは時間軸を広げた観点からコメントをしてみたいと思います。

1つには、農村社会学や地域社会学における限界集落論の観点からということです。それは、主に空間的な観点からお話をしたいと思うんですが、こういう限界集落化する、少子高齢化が進む中で、民俗芸能の継承なんかも含めて難しくなっていくような地域というものを、農村社会学・地域社会学においてはどのようなアプローチではどのように研究するかと申しますと、限界集落をその集落の範囲内という領域だけで見るべきではないという考え方です。

例えば、限界集落に関して、その集落の領域の中だけを見て、その地図を描きます。それぞれに、

ここに何軒の世帯があるのか、A家・B家・C家と地図上に書き込んでいって、それぞれの世帯に住んでいる人口を書き込んでいくわけです。A家には1人、B家には2人とそういうふうに数えていくと、非常に少ないわけです。もうこの集落は駄目なんじゃないかという感じがします。しかもみんな高齢者という状態です。

しかし、農村社会学や地域社会学の限界集落論というのは、そこにいる人間だけを集落の構成員というふうには捉えませんし、そういった限界集落というのはそう簡単になくならないという研究の蓄積はかなり多くあります。すなわち限界集落から大体車で2時間圏内の地方都市にその家の子ども世代が住んでいて、頻繁に帰ってくるという状況がしばしばあるわけです。こうした子ども世代は「他出子」と呼ばれます。この人たちが帰ってくるのは、買い物の手伝いであるとか、農作業の手伝いであるとか、あるいは福祉的なサポートであるとか、雪下ろしであるとか、そういう家の仕事のサポートのためです。さらにその息子世代のさらに後の孫世代というのも、ある程度は頻繁に帰ることができる距離の範囲内に住んでいるという状態で、領域的には集落の外にいても、実は潜在的にその集落の構成員であるというような人たちの存在というものを、見るのが重要であるとされています。そういう人たちが、実家にどの程度の頻度で帰ってくるのか、そしてどのような役割をしているのかを分析することを通じて、実はそんな簡単に限界集落はなくなるんだということが見えてくるという議論がされています。

この限界集落に関する基本的な議論は家のサポートの話であって、必ずしも集落全体の行事に関するサポートになるかどうかというのは、一応は別問題ではあるのですが、少なくとも家の行事にさえ戻ってこない人間が集落の行事に関わるわけがありませんから、少なくとも必要条件ではあるといえるでしょう。そういう他出子たちも含めて、集落というもののあり方を見ていく必要があるだろうと思います。

そういう意味で言うと、民俗芸能においても、単にその集落において人がいないであるとか、集落の中の人口だけにおいて論じるべきではない。むしろ場合によっては、県という行政単位とか、市・町・村といった行政単位を越えた形でのネットワークとして見るべきだと思います。だから、集落というのを単に領域、地理的な領域というだけではなくて、より面的に広がったネットワークの中で論じていく必要があるのではないかと思います。

それは、他出子といわれる出身者の面だけではなくて、Iターン的な人たちですとか、そのとき、祭礼にやって来るような人たちも含めて、ネットワークだと思います。私自身が調査している山口県の祝島ですと、ここはもう平均年齢70歳を超えている島です。ただ、この島は36年間にわたって対岸の原発建設計画に反対し続け、現在に至るまで建設させていないということで、3.11以降は原発のある種シンボルになっている島でして、そういった島の人々の生き方に共感した人々がIターン・Jターンとして移住して、人口360人の住民のうち30人ぐらいを占めています。また住民票の上では島の住民ではなくても、たとえば祭りや島の行事の際には必ずいるというような他出者の方たちもいます。

そういう意味でいうと、地域社会の成員っていうのは誰なのかといったときに、単にそこに今住んでいる人たちというだけではなく、もう少し広がったネットワークの中で捉えていくことができるのかなというふうに思っています。

2番目の観点からのお話として、ステークホルダーは誰なのかということについて、時間軸を長くにとって考えるべきだろうということです。



特に蘇理さんのご報告のなかで、民俗芸能はしばしば何年ぶりとか、一回中断して再び復活するというような、そういったことなんかがあるということもお話しになりましたけれども、それはもう昔から当然そうだろうと思うんです。それこそ、小寺融吉が『郷土舞踊と盆踊』（桃蹊書房、1941年）で、大正末から昭和初期にかけて郷土舞踊と民謡の会が行われた時に全国的にそうした地方の民俗芸能の価値が認められたということで、各地で50年ぶりとか30年ぶりとかで、いくつも民俗芸能が復興したというエピソードを書いていますけど、そうした復活というものは昔から繰り返されてきたと思います。

今回、映像記録なんかも含めて、民俗芸能を残していく、記録していくってことについて考える上では、それは誰のためにやるかっていうことを、必ずしも今ここにいる人、現在住民として生きている人のためだけとは限らない。民俗芸能は、過去の人たちに対する思い入れ、いわば過去に生きていた人々からの贈与されたものですし、未来にそれが誰かによって受け継がれるものでもあるだろうと思います。その意味で、それらは単に「いま・ここ」に生きている担い手の問題だけではなくて、より広い時間の射程の中で民俗芸能を捉えたほうがいいのではないかなというふうに思っています。

そのための記憶のあり方として、もちろん現在生きている担い手たち自身の記憶が重要なのは当然として、それ以外にもある種の外部記憶装置というものが必要なのではないかと、もしその担い手が一時的にいなくなったり、中断していたものを復活させようとしたときに、そのための手がかりになる何かが残されていることが重要なのではないかと思います。それは例えば映像記録であり、また報告書でもあります。

私自身も中断したとか、あるいは間に間隔のある祭礼の調査というものを時々することがあります。先ほど、33年ぶりの民俗芸能の復活っていうお話を久保田先生が仰っておられましたが、私自身もまた2014年に滋賀県の竜王町で33年に1回しか行われぬ苗村神社三十三年式年大祭というお祭りを調査したことがありました。33年前、子どもの頃に大祭で踊りを奉納し、33年後に自分がその指導者になっているのだけれど、断片的にしか記録が残っておらず、前回一緒に踊った人たち同士で記憶を付き合わせ、おそらくこうだったのではないかと、歴史の再構築、伝統の再構築を通じて祭りを行っていたわけです。

その調査の際には調査報告書や映像記録を作成しましたが、それはいわば住民の方々にとっては外付けハードディスクのようなものだろうと思います。そこに継承できるようなものを作るというもので、そういうふうなハードディスクになるものは、報告書でもあり得るでしょうし、映像でもあり得るでしょう。住民の方々も非常にしっかりと映像記録を残されていました。そしてこの式年大祭に関して面白いなと思ったのは衣装等の業者さんが果たしていた役割です。こういう儀礼の際にはどういうふうな衣装を着ればいいのか、どのように行事を進めればいいのかっていうことに関して、その衣装のレンタル業者さんがさまざまな事例をご存じで、こうすればいいんじゃないかっていうのを地元の方に教えていく。そういったのも含めて外付けハードディスクなのであり、そうしたものがあってこそ、後世において継承されうるのだろうと思っています。

今回の4人の方々のご報告をお聞きしまして、「いま・ここ」にいる担い手だけでなく、地域的な広がりやネットワークという観点、また将来に担い手になり得るかもしれない人々も視野に入れた形で、伝承の可能性を残していくことの重要性について、お話をお聞きして考えていた次第です。

**飯島**：続きまして、東京文化財研究所名誉研究員の星野先生、お願いいたします。星野先生は、無形文化遺産部が芸能部だった頃の部長で、その頃は、民俗芸能研究室だったですかね。その室長を兼任されておられた方です。よろしくをお願いいたします。

\* \* \*

**星野**：はい。ただ今の武田先生のお話、地域っていうものを、単に狭いエリアじゃなくてネットワーク的な広がりの中で捉えるべきだということ、それから、今の伝承を考えるだけじゃなくて、昔これを伝えてきた人の過去とか、あるいは未来のことまで、そういう時間的な広がりの中で考えていかななくちゃいけないということ、目を開かれるようなご発言でした。

私の話ですが、久保田さんからコメントせよというお話をいただいたときに、非常に厄介な時代になったなという印象を受けました。話しづらいテーマだなとも思いましたが、私の知っているかぎりをお話し、皆様方のご検討の材料に供したいと思います。

これは、あるいは先刻主催者から提出を求められました危機的状況にある無形民俗文化財のわたくしの知っている事例といえるかと思いますが、困難に陥入り、そしてそれへの対応策を講じている各地で今起こっている状況に、4つのパターンがあるように思われます。その4事例の紹介に先立って一言おことわりしますが、配布資料に記しておりますCは、本日会場にお見えになっておられるかと思えます山梨県立博物館の学芸員の丸尾さんのご報告や考えを要約したものでございます。

最初の事例Aは、皆さんよくご存じの「北設楽の花祭」の場合です。昭和6年に早川孝太郎の『花祭』が刊行されて評判となり、今日いうところの民俗芸能研究はこの花祭への調査研究あたりから始まったともいえ、その意味で当該伝承は記念碑的な存在であり、昭和51年には真っ先に重要無形民俗文化財に指定されている貴重な伝承で、識者をはじめとして広く知られています、そういう周知の伝承に関するものです。

これについては、昭和30年代、当時は高度経済成長期真っ盛りの時代でしたから、ダム建設が各地の河川で行われ、そのため水没した村々が各地で話題となっていました。北設楽郡豊根村の曾川という地の花祭も村とともに水没する危機に立たされ、集落住民の豊橋市への移住とともに花祭も豊橋市へ移転しました。

北設楽の花祭はその当時まで東栄町、豊根村、設楽町にて23カ所ほどで伝承されていたのでした。ところが時代が移りまして、2007年ですけれども、豊根村の山内集落と間黒集落の2カ所の花祭が廃絶となりました。その情報をキャッチして現地を訪れ、間黒集落の花祭保存会長さんから事情をうかがいました。先般村決めの集会で花祭存続の採決をとったところ、一票差で中止と決定されたということでした。以前から花祭の存続が集落内で議論となっていたのだそうですが、今回そのような結論が出たので花祭廃絶と決めたという説明でした。村決めの一票差の大きいことを通感しました。そういったことで、その当時まで17カ所存在していた花祭が15カ所にと減ったのでした。

近年まで盛んであった天下の花祭にも陰りが見え始めたということです。このように伝承危機の様相を呈し始めた花祭伝承状況に対しまして、下粟代集落の花祭の元花太夫の一野瀬三紀男さんが次のような対応をして来たのだと一文を記しておられました。「私達が体験してきた五十年間でも宿花から村花への移行」、つまり民家を祭場としての花祭から公民館等の集落公共の場所への祭場の変更ですね。それから「舞い子への女性参加、集落外への舞人解放など時代のニーズに合わせてしなやかな

対応をしてきた」と記しておられましたが、伝承環境が徐々に悪化しているのにあわせて柔軟に対応して来たということ、特に気負うようなこともなく時々の事情にあわせた自然体の対応をしてこられたということです。

この文章を書かれた後で一ノ瀬氏からお聞きしました。現在はお年寄りが増えちゃって、皆体力が無くなっているので、食事作りとか花祭は湯立て神楽ですから湯釜を設置する作業とか、会計係をするとかといった様々の祭の裏方の仕事を担当者たちは、肉体的に段々と対応できなくなって来ていて、伝統のやり方を徐々に省略せざるを得ないようになっている。これもまた危機的状況の進行へのやむおえぬ対応の姿だという。

それからBの事例の説明をいたします。「黒澤の田楽」ですが、これは善意のサポーターの応援を受けながらも残念なことに、今まさにピンチな状況に陥入っている悲しい事例です。これも花祭と同様、天竜川流域山間の三信遠地域の重要な伝承で、田楽とかオコナイなどと呼ばれる春神事で愛知県、静岡県の近隣領域で数カ所伝承されて来たものの一つですが、2017年、18年と祭が中止されています。36と多数の演目を持ち、畑作の予祝表現に特徴を有する貴重な伝承ですが、高齢化した伝承者が次々に逝去される一方、後継者が現れず徐々に活動が細って来ていたのです。

振り返りますと、1975年にこれは全国民俗芸能大会に出演し、その後重要無形民俗文化財「三河の田楽」の一つに指定されました。その後に気づいたのですが、2008年の阿弥陀堂での祭の時に出演者が6人となっており、2011年には4人に減っておりました。その後には演者が2人で祭りを乗り切ったこともあったのですが、2017年の祭の時にはついにそれがかなわず、外部からの見学者のために特に記録映画を上映したそうです。

このように当該伝承が先細って行くことを周囲の人たちは心配し、早くからサポート体制を講じて来ておりました。特に林正雄さんという元愛知県教育委員会で文化財係長をなさった地元の鳳来町ご出身の方で、小学校長も務められた方が中心となって、親身になって保存会の方々に寄り添いその持続のために献身的に努めて来られました。伝承地近隣の一色小学校生徒に黒澤田楽を体験してもらうとともに、阿弥陀堂の祭の時には生徒たちに現地へ馳せ参じて笛や太鼓を叩いたり等、高齢者保存会会員の演技を支えてもらっていたのです。後に一色小学校が東陽小学校に統廃合された後も、同様の活動は継続されたのですが、そういう生徒たちからは残念ながら高齢化した保存会会員の後継者になる者は生まれなかったのです。またサポーター役の林さん自身も超高齢化しているという現況にあります。

次に、事例Cの「一ノ瀬高橋の春駒」の場合です。一端伝承が途絶えた伝承が後に近年復活を見た事例です。この伝承の所在地が甲州市塩山高橋という住居表示となっていて、その本来の場所のことが解りにくくなっていますが、実はJRの「塩山」駅のある市街地からは30キロ北方の海拔千メートルほどの山間部にあります。冬場がとても厳しい所で、ことに高齢化した集落の人たちには住み難くなり、市街地の方へ下りて来て移住するケースが増えました。そんなわけで国の記録選択無形民俗文化財であります「一ノ瀬高橋の春駒」は、昭和50年代後半から現地高橋での道祖神祭では執り行えなくなりました。

ところが、2005年に山梨県立博物館で「やまなしの道祖神祭り」という特別展が開催された折に、この春駒が、道祖神祭りの一行事であることから選ばれまして、博物館の特設コーナーで復活上演されたのです。これを契機としまして2009年に、なんとかこの春駒を以降も持続的に演じていけるように再興しようとの機運が現地高橋集落の出身者を中心として盛り上がり、ついにそれが実現したわ

けです。

しかしそこに至るまでには様々な議論が交わされ、丸尾さんはじめ皆さんご苦労なさったそうです。ともあれ山の上の高橋でやっていたのと全く同じようには、平地の塩山市街地では再現できないわけですし、丸尾さんの文章によりますとある意味でオーセンティシティーが変容せざるを得なかった点があったということです。つまり、道祖神祭りが現地で行われていた冬場の厳しい時期に催すという点は守られてはいるが、毎年交代で実施していた当番宿が重要文化財の甘草屋敷に固定され、春駒一行の村回りが無くなったなどが生じているとか、高橋出身者以外の愛好者の参加もある点等々が異なっています。一端絶えかけた復活伝承が投げかける問題点を丸尾さんは整理しておられます。

次に事例 D ですが、これは危機的状況の伝承を地縁血縁の無い第三者外部者が継承持続を図っているものです。「大出早池峰神楽」という岩手県遠野市附馬牛大出という所の伝承です。現地では神楽の演じ手が極めて少なくなりました。例えば 1970 年代に 27 戸あった集落の世帯数が 13 戸に減り、そして神楽保存会の会員数も減って行き、1992 年には 4 人となりました。そんな時 I ターン者が一人大出に定住することになり、その後も県外からの I ターン者、遠野市外の岩手県民の移住者があったりして、それらの人たちが早池峰神楽の演じ手、サポート役として活動して来ました。外部者による無形民俗文化財の復元的継承活動が成功している事例です。

今のところ珍しいケースですが、こういう結果に至った成り行きにはそれなりの理由があったのだと澁谷美紀さんが著書『民俗芸能の伝承活動と地域生活』の中で、添付資料で引用したような文章を書いております。一つには遠野市が単に大出集落だけじゃなく、市内の各地で諸種の地域活性化事業を展開していて、I ターン者などを積極的に受け入れることにつながっているということ。例えば小生が鱒澤集落で実際に見学したことがあります、農林行政サイドが実施しているグリーンツーリズム事業を通じて、都会の若者などが現地で仕事を見つけたりして当地に定住し神楽の継承者となっていた。また澁谷女史は次のようにも記しています。大出集落の住民たちも、神楽伝承の方は I ターン者とか外部者にまかせておいて、神社の祭の執行運営の方は自分たちで仕切るといように棲み分けをしているのだという。

ここで番外ですが、先刻休憩時間にお目にかかった知人から「東京花祭」の活動も紹介してみたらとのサジェッションがありましたので、若干それに言及しておきたいと思います。最初の事例 A で言及した「北設楽の花祭」が、実は毎年 12 月初めに東京の東久留米市の団地でも行われており、本年度で 26 回目が執り行われました。小平市、隣接の東久留米市の団地の住民の方々が現地、御園集落の花祭の芸能を体得して実施しているのですが、年を重ねるごとに現地の祭に近かづきつつあるように思います。折口信夫がかつて形容していた都会地の「花狂い」の人たちによる活動ですが、今日では彼らが現地御園集落のサポート役も担うようになっています。例えば、毎年 11 月の御園での花祭時には現地を訪問し、人手不足で御園では舞えない演目を替わりに演じてあげたりとか種々手伝っているとのこと。このように現地の人たちの身に沿ったかたちの外部者のサポートがこれからは益々必要となって来るのではないのでしょうか。

以上で小生の話は閉じたいと思いますが、終わりに本日のようなテーマでの研究会を今後とも継続され、明日に向けての具体的な対応策を模索するものとして開催されとか、あるいは関連の調査事業などが進められますことを期待いたしております。ご清聴誠に有難うございました。





二〇一八・二・一四 東京文化財研究所 第二三回無形民俗文化財研究協議会「今危機にある無形文化遺産」  
 コメンテーター 星野 紘 資料

『 危機的状況とそれへの対応策の事例（民俗芸能） 』

A、北設楽の花祭（愛知県北設楽郡東栄町、豊根村、設楽町 ※重要無形民俗文化財）の場合

○、危機的状況―徐々に悪化

昭和六年 早川孝太郎『花祭』刊行

昭和三〇年代 ダム建設により豊根村曾川集落が水没し同集落の花祭が豊橋市内へ移転  
 （その頃まで二三か所ほどの地に花祭が伝承されていた）

二〇〇七年 豊根村の山内集落と間黒集落の二つの花祭が中絶（それまで一七カ所に伝  
 承されていた花祭が一五カ所に減少）

○、対応策―時代のニーズに合わせてのしなやかな対応

下栗代の一野瀬元花太夫

「私達が体験してきた五十年間でも宿花から村花への移行、舞い子への女性参加、集落外へ  
 の舞人解放など時代のニーズに合わせてしなやかな対応をしてきた」（『伝統文化』34

二〇一〇 掲載文章より）

B、黒澤の田楽（愛知県新城市黒澤 ※重要無形民俗文化財）の場合

○、危機的状況―伝承者が一人、二人のみとなってしまった

一九七五年 全国民俗芸能大会に出演

二〇〇八年 峯福寺阿弥陀堂の例年の祭の出演者六人

二〇一一年 右の祭の出演者四人（ただし大学生一人も参加）

二〇一七年 右の祭演者不足につき上演を中止して見学者のために記録映画上映

二〇一八年 右の祭休止（伝承者一人、二人のみと減る）

○、対応策―篤志家と学校生徒によるサポート

一九九一年 一色小学校生徒による「黒澤の田楽体験学習」始まる（二〇〇二年に同小  
 学校が東陽小学校に吸収されたため当該学習は移転継続）

この間元愛知県教育委員会文化財係長の林正雄氏（後に小学校校長や鳳来町の文化財保  
 護審議委員）が、近隣の学校の生徒のサポート（祭の際に笛、太鼓の伴奏を担当）体制  
 を整えたり、伝承者へ、祭（田楽）の維持継続うながしたりと尽力してきたが、伝承者が  
 年を追うごとに亡くなったり減少してしまい、持続しがたい状況に至ってしまっている。

C、一之瀬高橋の春駒（山梨県甲州市塩山一之瀬高橋 ※文化庁記録選択無形民  
 俗文化財）の場合

## ○、危機的状況と対応策―中絶と復活再生

昭和五〇年代後半 旧一之瀬高橋の集落（JR塩山駅の市街地から北方三〇キロメートル離れた海拔千メートルの高地に所在）の住民が高齢化するとともに、冬季の寒さに耐えられぬなどの理由から塩山の市街地に移住したことにより、道祖神祭の当該春駒が徐々にできなくなりだした。

二〇〇五年 山梨県立博物館の特別展「道祖神祭り展示」に特別出演

二〇〇九年 再生復活。ただし上演形態の様相は次のように変わった。①祭場が以前は集落の当番の家（別当屋敷）持ち回りであったのが、重要文化財の民家に固定された。②したがって毎年の祭り主催者も固定。③春駒の集落の家回りの習俗がなくなった。④旧の集落の住民以外の人も参加するようになった。楽器衣裳道具の保管は甲州市教育委員会の所管となった。

課題 丸尾依子『田中宣一先生記念論文集 神・人・自然』慶友社二〇一〇 二八六頁

「例えば、今後の入会が予想される、一之瀬高橋とは無関係の人々とのや関係や、彼らへの伝承活動である。現在の「春駒」を担っているのは、旧一之瀬の旧住民たちほとんどである。旧住民にとつての保存会活動や「春駒」の開催は、往時を思い出し、一時的に一之瀬高橋地区を再現することでもあり、かつての人間関係の中に身を置くひと時でもあるだろう。こうした中に、いずれ一之瀬高橋とは無関係の会が入会した際、彼らをどのように入れていくのか。

## D、大出早池峰神楽（岩手県遠野市附馬牛町大出）の場合

### ○、危機的状況と対応策―イターン者など外部の者によるサポート

一九七三年 神楽保存会結成

一九九〇年 一九七〇年代に二七戸あった集落の世帯数が一三戸に減る

一九九二年 神楽保存会会員が四人であったが、はじめてイターン者T氏が加わる

以後 大出集落旧住民の三人のほか、イターン者五人、遠野市以外の三人が演者として活躍

考察 澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農山漁村文化協会二〇〇六 一五九頁

「イターン者や他市町の人々の参入によって伝承活動が活発化していたが、彼らの参入には地元集落を含む旧村域さらには遠野市域での地域活性化の取り組みが大きく貢献している。伝承活動の外部者の取り込みといっても、通常は伝承団体のみの尽力で可能になるのではなく、底辺にはこのような様々な組織の活動が不可欠であろう。外部者を交えた舞の継承は、地元後継者の育成途上にあつてこのような地域活性化の動きを巧みに取り入れたところに成り立っているのである。

## ディスカッション

**久保田裕道**：まずはたくさんのご質問を頂きまして、ありがとうございます。たくさん頂きすぎて、全部を紹介しきれないのですが、最初に発表者個人に対する質問がありますので、ご発表順に伺っていきたいと思います。

最初に丸谷さんへの質問です。まず、ナマハゲについて、なまはげミュージアムや、なまはげ柴灯まつりが、プラスやマイナスに影響したことがありましたら教えてください。男鹿市に行くといつでもナマハゲが見られる伝承館がありますが、ミュージアムや観光用に2月に行っている——観光用と言っていいのかわかりませんが——お祭りですね。あのお祭りについて、影響したことがあるかどうか。

それから、北秋田市の火祭りがまぐらの話について、中止になった理由が、人材不足、わら不足ということでしたが、例えば、まぐらを小規模にして、行事を維持するという選択肢にならなかったのか。語られる理由が本当の理由とは違っているということはないのでしょうか。また、火祭りがまぐら行事は、行政の側から、行事の実施方法などについて助言等をされたのでしょうか。

この辺について、まとめてお話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

**丸谷仁美**：ご質問いただきましてありがとうございます。

まず、ナマハゲについて、ナマハゲに類似する行事は全国的にありまして、秋田県内の他の地域でも行われています。それが、男鹿のナマハゲが特に有名になったのですが、平成に入って中断した集落が多くなっていったところ、これだけ有名になったのだから続けようというような、維持するための活力剤になったのが、プラスの理由です。

マイナスの理由は、観光化したナマハゲと、集落で行われるナマハゲ行事が乖離しており、本来のナマハゲ行事が伝わらなくなるという危惧があります。この問題は今後問題になっていくと思います。

葛黒の火祭りがまぐらについて、行事を小規模にしてやらなかったのかという質問ですが、葛黒の方々はこの祭りに非常に誇りを持っていらっしゃいます。文献資料はないですが、伝承で200年以上続いている祭りなので、小規模にしたり、自分たちで守れなくなるくらいだったら止めるという選択でした。これも長い間、5～6年話し合ったと聞いたのですが、集落内でいろいろな意見が出た結果、自分たちの祭りを現状のままで続けたいとなり、小規模の選択にはなりませんでした。

それから、行政から助言等をしていたかについては合併前の町の話なので、申し訳ないのですが、今のところ手元にデータがないので分かりません。

**久保田**：ありがとうございます。

それでは続いて、森本さんにお聞きします。映像について、映像記録を作成することはとても素晴らしいことだと思うのですが、逆に、しっかりと記録することによって、伝承者が安心してしまって、休止しても大丈夫だということはないのでしょうか。また、伝承者がどれくらいそれを活用しているのでしょうか。同じようなご質問で、配布した記録類を活用している例があれば、教えてください。もう1人からも、伝承団体でどの程度、利用されていますかということです。

それから、伝承者に関して、例えば公募という話がありましたが、公募してどうやって定着させたのかということ。あるいはワークショップでは、どんな方法で、どんな効果があったのかといったようなこと。その辺りを具体的に教えていただければということですが、いかがでしょうか。

**森本仙介**：ご質問ありがとうございます。大体大きく分けると4点かなと思います。



まず、記録することによって安心し、伝承をやめてしまうというか、そういうことはないかということですが、実はそういう話はよく聞きます。自分がやってる所ではないですが、もう記録したから、これでもう続けなくてもいいよねという話は、他のところであることは聞いてますし、冗談めかしてそういうことを言われることは実際あるんですけども、今のところ、そういう例はないです。

むしろ、次の活用の話にも繋がっていくんですけど、伝承版に関しては、実際に今、活用してもらっています。伝承版は3つ作りしました。踊りに関しては、1つはちょっと休止状態ですが、篠原踊りなんかは、新しく、今まで踊ったことない人がほとんどですから、家で見たりということをしてもらってるようです。

もう一つは、吐山の太鼓踊り。実はこれもところどころ使ったり、また実際に今ちゃんと伝承できるものですから、今のところはあまり頼ってないんですけど、たまに見てるというお話です。

それ以外の、データベースについては、今のところは、特に活用している感じではないのですが、逆にいうと、あまり見てもらってないほうがいいのかと、ちょっと責任逃れかもしれませんが思っています。ですので、活用してる所もありますし、今のところは、活用というか、特に見て確認してるわけではないというところですよ。むしろしっかり伝承されているのかなとは思っています。

公募をどのように行ったのかという話ですが、一つは新聞や、あるいは市のホームページ、あるいは、保存会が村から出ている方々にはがきを書いて知らせたということも大きかったと思います。実際のところ、集まってきた新しい伝承者の8割ぐらいは、お子さんや、あるいはお孫さんも多少含まれていますが、やはり出身者の関係の方で、もちろん全然関係ない方も2割ぐらいはいらっしゃいますが、そういう方々が集まったというのがあります。村があまりにも僻地にあるので、大体皆さん、大阪とか堺あたりから、練習場所の五條まで大体1時間か2時間ぐらいかけて通って来ていらっしゃいます。

これを公募でやっていくのは結構大変でした。というのは、中心になる方がいらっしゃらなかったんです。ですので、保存会長には地元の自治会長さんに、この方は踊りをされないんですが、それから、もう一つ外部から事務とかができる人にもサポートとして入っていました。ですので、必ずしも踊れる人ばかりではなくて、事務局に関しては、外の力というか、ボランティア的な方に入ってもらって、何とかやっていってるというところがあるかと思います。公募は、おかげさまで、かなりの人数、40人以上集まりました。

最後に、ワークショップをやって、どうだったかということですが、これはなかなか難しい質問ですね。まず1カ月ほど、県立の図書館で写真展示をやりました。その後、ワークショップを行ったんですが、これも結構応募が多くて80人ぐらい来まして、3班に分けて、3つの踊りを実際に踊ってもらいました。

その中から、伝承する人が出てきたかっていわれると、ちょっとまだ出てこないんですけど、むしろ教える側、保存会の側のほうが、やっぱり何とかこれを続けていきたいという気持ちになってもらえたようで、終わってから、「篠原踊り」、「吐山の太鼓踊り」、「大柳生の太鼓踊り」、実は「大柳生の太鼓踊り」は、今休止しているんですけども、三者で情報交換というか、今後の伝承の仕方について話し合いました。そのうちの「大柳生の太鼓踊り」が、この間、今年の民俗芸能大会に出たんですけども、平成24年からだったかな休止しているんですけども、何とか復活できないかと、小学校で保存会長さんが教えて、小学生や中学生が踊れるようになっていきます。まだ定期的なお祭りであるということまではいってないです。できるだけ広域に、やはり1つの集落だけではちょっと無理ということで広域的に、これは氏子圏とも重なってくるので難しい問題なんですけれども、広域に、も

もちろん女性も踊ってもらうということで、今、頑張って、何とか復活させようとしているところです。

**久保田：**ありがとうございました。

続いて、蘇理さんに質問です。今回の危機の話と違う話で、以前こちらでもテーマにしました災害についての話ですが、例えば、和歌山県というと、南海トラフが話題にもなっていますが、例えばそういった災害によって、担い手の流出や道具類の流出、あるいは練習場所、会場の確保が困難となるといったような想定が考えられますが、そういったリスクへの対策を実施されているような事例があれば、教えてください。

**蘇理剛志：**想定してなかった質問が来たのでびっくりしたんですが（笑）、今おっしゃっていたとおり、和歌山県でも大災害に対応するための文化財防災の取り組みを、少しずつですがやっています。祭りや芸能の練習場所の確保、担い手の流出については、災害の結果が出てみないと分からないところもあるんで、たぶん事後になってからいろいろ模索していくんだらうなという予想はしているんですけど。

どんな想定があるか、ということについては、先ほど紹介した和歌山県民俗芸能保存協会の講演会で一度テーマにしたことがあります。東北歴史博物館の小谷竜介さんに講師で来ていただいて、東北の被災事例を直に、和歌山の保存会の方にお話しいただきました。このテーマは、引き続き、何回かやったほうがいいなとは思っているんで、そういう機会を得ながら、想定される事例を重ねていって、保存会それぞれのイメージづくりとか、行政は行政として何か体制づくりみたいなことを、少しずつでもやっていけたらいいなと思っています。

あと、これも少しずつですが、民俗文化財の映像記録を撮っています。条件が整ってやれるチャンスがあれば、どんどんやっていきたいなと思っています。津波災害が想定されるのであれば、海岸部の祭りを優先的にというか、たとえば先日も、串本町のほうで、そこには獅子舞がたくさんあるんですが、映像記録とか何か芸能大会みたいなことをやりたいという相談を受けたりしています。地元の企画もこれからなんですけれど、これも文化財防災の取組として、平時からやれる所から少しずつ進めていく感じで、対策していきたいと思います。

もう一つ大事なのは、これは久保田さんにお話ししてもらってもいいんですが、情報ネットワークとホームページとか、和歌山県としては、災害時に無形文化遺産の救援をしてくださる人を増やしたいということがあります。実は、先ほどの講演会の先生を外から呼んでくるというのも、和歌山県には大学が少なく、民俗文化財の専門家が大変少ないので、いろんな方に和歌山県に来てもらって、祭りの状況とか見てもらったり、何か関係を持ってもらって、いざという時には、助けてもらえるような体制にはしておきたいなと思っています。ぜひ和歌山県のお祭りなどを、何かの機会に普段の様子を見に来てほしいなという気持ちでいます。文化財防災に関する作業は、当然、1人ではできないことですので、そういうことを考えながら、日々仕事をしているという感じです。

**久保田：**ありがとうございます。これは、私からですけれども、そういった備えのようなことが、やっぱり日々の伝承の強化やリスク対策にも繋がっているように思えるのですが、そこはいかがでしょうか。防災や災害に対する備えって、和歌山県はすごく進んでるような気がしていて、今言われたようなことをやるのが、逆に日々の伝承も強化していこうというか、しっかりやっていこうっていうように、繋がっているんじゃないかなと思います。

**蘇理：**やっぱり、お祭りに限らず、日々の生活の中で地域の人たちとの絆を育んでいくっていうことが、人口の流出を止める効果もあると思います。それが民俗調査をきっかけにして出来上がってい

く場合もあると思うし、いろんなネットワーク化に取り組んでいく中で、地域の応援とか、そういうことも考えられるんじゃないかと思います。

最近の事例としては、他の団体の指定何周年の記念に、近くの保存団体を呼んで交流するようなことがありました。これらは自前の自主イベントなんですが、最近ちょっと大きかったのは、熊野那智大社が創建 1,900 年の大祭やった時に、那智の田楽の舞台で、周辺の獅子舞とか鯨踊、御船歌とか、田楽の舞台でやれるものを集めて奉納してもらったイベントがありました。奉納後には、那智大社の宮司さんから感謝状を頂いて、何かお礼のものを頂くといった感じでやれば、保存会にとっても記念にもなるし、宮司さんに激励をいただくというのは、やっぱり私たちが何度言っても得られないような、ありがたさがあると思います。そういうこともやりながら、広域な地域全体で、面的につながりを紡いでいくっていうようなことが、実際、災害の時にも何かに役立つのかなと思います。

あと、行政として大事なものは、よく文化庁の研修会に出ると話になるのですが、近畿は比較的安定してますけど、全国の都道府県レベルの民俗文化財担当者が、年ごとにコロコロ変わることが問題視されてますよね。災害の時には、民俗文化財の防災への意識付けが、ちゃんと後任に引き継がれるかどうかっていうことや、ちゃんと把握できるかどうかっていうことに、結構かかっているところがあると思います。また、行政と保存会との人間関係やパイプ、そういったものをちゃんと育てていくということも、すごく大事なことはないかなと思います。

**久保田：**ありがとうございました。

それでは、最後の個人への質問として原島さんにお聞きします。麒麟獅子舞のネットワークの話がありましたが、それ以外に、特定の芸能に特化したネットワークはあるかどうかということ。あるいは、奈良県や和歌山県のように、民俗芸能全体の保存協議会のようなものはあるんでしょうかということ。それから、ちょっと難しい質問ですが、活動していく有志の会と、全ての団体を包括するグループと、二重構造になっていますが、包括する大きいほうのグループは年会費なしということでしょうか。例えば、国指定の団体だと、国の補助による修理事業などがあると、規約や総会の議事録、会計資料といったものが必要になるので、いわばその事業を推進・実施する能力がある団体ということが問われますが、そういったことも含めて、国指定の団体が入っているような大きなほうの団体をどういうふうに対応させているのかということ、想定されているのかということをお教えくださいということとです。

それから、平成 21 年から民俗芸能フォーラムを開催しているということがお話の中に出てきましたが、これは、主催、参加者、あるいは、指定文化財の団体だけなのかとか、シンポジウム形式なのか、ワールドカフェ形式なのか、参加率はどれくらいなのかといったようなことを、教えていただきたいということです。盛りだくさんですけども、いかがでしょうか。

**原島知子：**ご質問ありがとうございます。

まず、ネットワークについてなんですが、麒麟獅子舞以外に、芸能ではありませんが、鳥取県西部のほうに、トンドさんの時にお神輿が集落を回るといふ行事が 80 団体くらいありまして。これは島根県とも共通しているんですが、そちらを県指定にして、市町村ごとに団体をつくって、ネットワーク化しています。

また、県全体のものはないんですけども、町レベルで 2 つ、民俗文化財の団体が立ち上がっています。実は、県全体でもできないか、私が入って 2 年目ぐらいの、10 年前に働き掛けをやったんですけども、鳥取県でも、東部、中部、西部の中で、非常に意識の差が、温度差がありまして。例え

ば、西部はやりたいけど、東部はあまり乗り気でないといったような状態が見られて、地域ごとですか、芸能ごと、ジャンルごとにやるほうがいいんじゃないかという意見が出て、その結果が今のようになっているかなと思っています。

2つ目のご質問の、有志の会と全てを包括した二重構造で、その包括した団体のほうの在り方についてのご質問ですけれども、こちらのほうは、将来的に国指定の保護団体を目指しているところです。おっしゃるとおりで、将来的には補助金の申請書類、それから総会の資料作成等の事務が生じてきますけれども、そちらについては、県、市、町の教育委員会文化財保護部局が、全面的に支援をするという形を、今、考えています。ただし、会計事務は持つことができないので、通帳・印鑑の管理等の会計事務は、担い手側の方に出てきてもらって、そこはしていただく。だけど、書類作成とかは、全面的に手伝っていくというふうなことを考えております。

3つ目の、フォーラムについてですが、こちらは平成21年から呼び掛けをしました。当時180団体を把握しておりましたので、そちらの団体全てに案内を出して、一緒に話し合う形をとってしました。教育委員会の主催でやっていますが、ただ、参加率はあんまり良くなくて、大体、20人から30人、団体も20団体とか、そんなぐらいで推移しています。

最初は事例報告とパネルディスカッション、まさしく今日のような会の形式をとっていたんですが、みんながあまりにしゃべり足りない感じだったので、ここ数年は、皆さんの意見をグループワーキングでしっかり意見を言って、すっきりして帰ってもらってという形をとっています。

**久保田：**ありがとうございました。

それでは、少し皆さんそれぞれに関わる大きな問題を投げ掛けていきたいと思います。最初に技術的な、比較的しゃべりやすい問題として、記録方法に関して話していただきたいと思います。これはお答えしたいという方だけ、お答えいただければと思います。その後、3つほど、非常に大きなテーマがありますので、これは皆さんに順番にと思っております。まず、技術的なことを含めての問題。

これは東文研に頂いた問題でもありますけれども、近年、記録のデジタル化が主流になりつつあるが、指針のようなものは検討されているのでしょうかということです。森本さんのお話にも関わってくる映像化の話でありますけれども。

東文研では10年前に『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』として、映像協議会を開きまして、そこでの成果を手引きとしてまとめて、全国の都道府県に配布したことがありました。ただもう10年前ですのでかなり古くなっていて、まだデジタル化が出始めの頃でしたので、非常に機材の環境も大きく変わってきています。それで現在、新しい手引きを作ろうと、検討し始めていて、何度か映像関係の方々をお招きしての研究会も開いています。

そういうように、今の時代に合った形で、デジタル化というものをしたいと思いますし、今の時代、お金をかけて、何年もかけて、非常に大きなものを1本作るということももちろん重要なんですが、すごいものを1本作る間に幾つもの無形民俗文化財がなくなっていくということを考えると、やはり今、誰でも手軽に撮れる時代ですので、たくさんの人が簡単に撮って、スマホでもう4Kが撮れる時代ですので、そういった仕掛けも考えていかなければいけないのではないかなということを、東文研では考えております。

それにも関連して、質問なんですけれども、映像を作ったとき、もし廃絶・中絶してしまっても、それを復元できるようなつもりで映像を作るということですが、100パーセント同じものが再開のできるだけの記録を残すことについては、少し違和感があります。映像記録、詳細な映像記録を残す



ことの重要性について、皆さま、どのようなお考えをお持ちか、お聞きしたいと思います。この質問に関しまして、ご意見のある方、ご自身の関わってこられた映像制作のスタンスみたいなものでもいいと思うんですけれども。

**森本：**皆さんも映像を作ってるので、奈良県だけではないと思うんですけれども。完全に同じものを再現することは不可能だと思います。別にそういうことは意図してません。ただ、先ほど久保田さんからお話がありましたけれども、お金をかけないでという話は、実際そうだと思います。お金をできるだけかけないでやるという方向で、データベースもそうなんですけれども作っています。できるだけ簡易な方法でと考えてます。

極論を言えば、どういう映像でも残っていれば何とか再現できたりするというふうに考えてまして。平成 23 年から民俗芸能緊急調査をやった時に、古い映像を探して、それをデジタル化しました。その中で、十津川の大踊りの「鎌倉踊り」というのが、もう 50 年ぐらい絶えてたんです。戦後全くされてなかったものなんです。それが、大阪大学と大阪教育大学が合同で調査を 80 年代にした時の映像が地元に残ってまして、それを地元で頼まれて DVD 化してお渡ししたところ、ブロック芸能大会で初披露したんですけども、それ以降、毎年やるようになりまして。

それは、決してそんなにきれいな映像ではなかったんですけども、やっぱりやってる人が見ると分かるんです。どの辺りが勘所かというところが。ですので、すごくお金をかけて映像を作るというよりは、やはりできるだけたくさん映像を残しておきたい。もちろん詳細に撮れば撮れたほうがいいと思ってます。ただ、それは、模範ではないわけです。そこら辺は、使う側の、やはり主体性があると思いますので、あまりそこまでは、こちらでこうしろというふうにはしていないつもりです。

先ほど、蘇理さんの話の映像にもありましたけれども、使い方とかを口で説明したり、あるいは練習風景や道具を作っている様子など、そういうところもできるだけ、これもお金の許す限りということになりますが、撮って、映像に残しています。ただ、それはもちろん作品にはなりません。ならない部分がほとんどですので、先ほどご紹介しましたデータベースという形で残して、見てもらえるようにしています。

以前に、埼玉県入間市の鉦はりの教則ビデオというのを坂本要先生から見せていただいたことがあって、それが非常に印象的で、そこから少し教則映像を作ってみたらどうかと思って作りました。ただ、実際できたものは、むしろ、蘇理さんの今日の映像にあったように、教える側と教わる側の会話とか、そういうところを記録的に写しているものです。そういうものが、むしろ残せたらなと思っております。

それからもう一つ、先ほど、「丹生の太鼓踊り」について、撮った次の年に指導者の方が亡くなってしまったんですけども、その方が、実は晩年、体がうまく動かなくて。それと、若い人ができるまでのレベルに、練習を半年以上やったんですけどもできなかったということで、自分で次の年にカセットテープで録音してたりしたんです。それから、今までその方はずっと自分でカセットテープで入れたりとかされていたので、そういうものも記録として、ことが重要だとデジタル化して、全部放り込むという形にしました。

もちろん、勘所とかそういうものも聞いて、映像に収めて、やはりこれも 30 分番組とかにはなりませんので、何ていうか、データベースとして残す。で、見たいときに見れるようにしておくことを考えてます。そして、できるだけお金をかけないでたくさん撮ってということは、考えているつもりです。

あと、映像のマニュアルは、先ほども言いましたが、今年か去年に三重県教育委員会文化財課がちゃんとしたものを出されていますので、それが非常に参考になると思います。

**久保田**：他、どなたかいらっしゃいましたら。

**原島**：鳥取県では、それほど映像を作っていないのですが、先ほど、どういうものであっても、あれば役立つというお話は、すごく示唆的だと思います。ですので、県のものではないのですが、途中で「鳥取伝統芸能アーカイブス」というホームページを、発表時にお見せいたしました。こちら、NPO 法人さんで作っておられるホームページでして、県と一緒に調査をして回って、その時の調査データと、そこに写真と映像をプラスして、県内 200 団体強の団体の映像をほとんど紹介をしています。

詳細な映像が残せるに越したことはないんですが、誰にそれを見てもらうのかということ、費用とともに考えてやっていく必要があるのかなというふうに思います。詳細なデータはすごく参考になりますし、実際に復活しようと思ったら、とてもいいと思うんですが、それをしっかり見るだけの時間がどれだけの人にあるのかというふうに考えると、まずは、簡易なものでもいいから、できるだけ多くのものを撮って、多くの人に見てもらうシステムを整えることのほうが、行政的には優先順位が高くなっていくのかなというふうに考えます。

**久保田**：ありがとうございます。蘇理さんもありますか。

**蘇理**：大体、森本さんや、原島さんと同意見なんですけども、先ほどの災害時のことにも絡んで言いますと、あまり良いものを作ろうと思って記録化の順番待ちをしていると、津波が来てもおかしくないんで、まず手元にある映像などを集めて、できるだけデジタル化しておくこと、まず初期の作業をとにかくやっておくことが重要ではないかと思っています。

和歌山の、ある町の教育長さんなんかは、自分とこの町の祭りが衰退していく様子を慮って、過去のビデオだとか 8 ミリに取った映像を町の教育委員会で集めて、デジタル化をやり始めたそうです。われわれが指導したわけじゃないんですけど、そういう取り組みもあります。やっぱり、記録を残していくということが重要で、すごくお金かけて正確なものを残したとしても、そのとおりに後々やってください、みたいなことでは実際ありません。やっぱり、時間の経過にはいろんな変化があって、やる人も変わるし、そういう時代の推移もあるわけだから、そういうことも含めて、やっぱり参考として、現時点の記録を撮っておくという目的で作業して、完成したものを活用してもらえたらいいのかな、というふうに思います。

決してこれらの記録は「作品」ではないと思っています。あくまで「記録」です。だから、撮影した年の祭りはこういう状況でやりましたっていう事実しか、たぶんならないと思うんです。だから、準備や裏方の作業、こういうふうにご飯作んなきゃいけないんだとか、何かそういうことも含めて記録する、再現はたぶん無理だと思うんですが、あくまでも未来への参考事例として、できるだけものを残しておくという形になるんじゃないかなと思います。

**久保田**：ありがとうございます。

大きな質問としてまとめますと、社会的な話が 2 件来てますので、これはコメンテーターのお 2 人にコメントいただきたいと思いますが、その前にどうしても踏まえておかなければいけないのが来まして、これは 4 人の発表者の方にお答えいただければと思います。

参加者の方も行政の方が多いので、どうしてもつきまとうお金に関する話ですが、例えば、負担軽減のために演目を減らすとか、あるいは開催しやすい日時に変更するとか、伝承団体に関して、そう

いった話は出てこないでしょうかということ。それから、補助金の制度が、どういう補助金だったら、継承に有効だと考えていますか。例えば、活動費を市が補助し続けることが継承につながるとは思えない。けれども、じゃあ、どういった補助だったらいいんだろうかということ。それから、資金の調達をどうしているのか。資金の用途がなかなか立たない。特に記録を作るなどというときに、なかなかその用途が立たないということ。今日の参加者の皆さんは都道府県の方ですが、市町村がどのように関与しているのかどうかということ。

それから、用具の整備とか運営に関する補助というのは、ある程度、財政当局も理解してくれるんだけど、後継者の育成事業になると、なかなか理解してくれない。では、どういう事例があるのか、どういう助成の制度を用いているのか、その辺で参考になるようなお話がお伝えできれば、皆さまにも役に立つのではないかなと思うんですけど、その辺をまとめてお金の問題としていかがでしょうか。

**森本：**日時、演目に関しては、いつどう変わったかっていうことが記録として残しておけば、むしろ続けていくほうが大事ですので、それは変えることはよくあります。

それから、県に関しては活動費を補助してません。例えば、市が10万程度補助する所は確かにあるかと思います。それで役に立ってるのかなと思うんですけど、県は逆にそういうことをしてないので、そういうのはないのかっていうことを逆によく聞かれます。

また、撮影の資金はどうしてるのか。実は気付いてる方はいらっしゃると思いますが、デジタル化にしてもそうですが、実は文化財のお金はほとんど使ってません。知事部局のほうの予算です。それから文化庁の活性化事業です。実際、こういうのを文化財の予算で作ろうと思って、今はまず通りません。

それから、市町村の関与ですけど、奈良県も民俗の担当者がほとんどいないので、市町村が事務局になってもらい、ほぼ考古担当の人にできるだけやってもらっています。それだけに、県のサポート体制がやっぱり大事だと思っています。

**丸谷：**私は今博物館にいて、行政に直接関わっていないのですが、簡単に秋田県の例をご紹介しますと思います。

まず秋田県の場合ですが、上限額・補助率に違いはあるものの、文化財の指定・未指定にかかわらず補助金を出しております。

市町村では、例えば本日お話したナマハゲの場合、毎年男鹿市から町内会交付金事業の一つとして、ナマハゲを実施する集落には交付金が上乗せされます。

それから由利本荘市の例ですが、市全体で民俗芸能団体の連絡協議会を作っていて、文化財の指定・未指定にかかわらず、それから行事を休止もしくは廃止したところにかかわらず、協議会に入ることができます。市から補助金を出しているのですが、上限額があり、全額補助ではないものの、文化財の指定・未指定にかかわらず、行事が消滅した地域にも補助金を交付しています。

ただ、金銭の問題ではなく、補助金を交付することで、市や県が自分たちの活動に関心を持ってくれているんだということが伝わると思いますし、保存会の方々にもそのようにいわれます。

**原島：**鳥取県です。共通する所はちょっと省きまして、どういう補助だったらいいのかっていう点についてですが、奈良県さんとかと同じように、県では、通常の維持管理に関するようなものに対して、補助は出していません。市町村の中には、出しておられる所はあります。

秋田県さんが言われたように、やっぱり県や行政が応援してくれてるってことを示すことが、とても大事だと思っています。鳥取県もいろんな補助金を持って、県で未指定の団体にも補助するよ

うな制度を間接補助で持っているんですけれども、手が拳がってきません。つまり、補助金を申請できるような団体は大丈夫だと思ってます。そこにのせるまでが大変なので、それをどうやってのせていくかは、やはり足しげく通う必要があると思っています。やはり一番身近なのは市町村さんなので、市町村さんにまず動いてもらうような仕組みづくりを、県はすべきだと思います。

最初の10年は、よく分からないまま、自分でもいっぱい動きすぎて、それじゃあ、市町村さんについてこないよって怒られたことも多々ありました。ただ、それがあるからこそ現状が分かって、こういう所があるから、そこを見に行つてあげたほうがいいよってというような言い方が今はできると思っています。長年いるからこそ、市町村さんも民俗について、直接の担当はいらっしゃいませんが、関心を持ってくれますし、ちょっと困ったことがあったら声を掛けてくれるようになってきました。

なので、歩いて声を掛けて、実際に顔を見ていくっていう、ここをやはり一番さぼらずにやらないといけないんだなというふうに思っています。

**蘇理：**和歌山県の場合も、ほぼ同じようなことだと思います。演目を減らすとか日時の変更とか、そういったことはできるだけご相談をいただくようにはしています。日時の変更等ですと、演目もありますし、あるいはたくさんのお供え物、神饌のようなものを減らしたいんだけど、みたいな話もありました。そういう場合も、これをこういうふうにしたいという届け出を一応お願いして、何年にこういうふうに省略をしたとか、一応変化の記録を届け出ってもらうようお願いしています。

あと、県の補助金は、うちも半額補助なんですけど、活動費として年間いくら補助みたいなことは、昭和の頃はやってたようなんですが、平成以降はやってません。あと、これは他の県もそうだと思うんですけど、いろんなメセナの関係の助成金です。民俗文化財の活動に助成して下さる財団法人に依頼をしたり、あるいは文化庁でも後継者育成関係の事業をやっていますので、そういうことを進めてもらったりしてます。これは、市町村の協力も必要で、こちらから指導する場合がありますけれど、そういう制度を利用しながら、その年にできる規模のことをやる感じで行ってもらっています。

**久保田：**ありがとうございました。

それでは、最後、2つの質問。これはコメンテーターのお2人に、まずお伺いしてみたいと思います。

社会的なことについて、いくつかの視点からコメントを頂いております。まず若い人とご年配の方との対立の話で、例えば、無形民俗文化財には神事として行っているという部分もあったりしますが、最近の若い人の中には、イベントという捉え方、なるべく合理化、簡素化したいと考えてる人もいます。そういった若い人との世代間の考え方の違いを嫌い、保存会への参加等を嫌がる人も見受けられます。こういった伝承者内部での対立の問題についてはどうでしょうか。

それに付随しまして、別の方からは、人間関係が良好であること、そして、リーダー的な役割を担う人、その信頼感、調整能力等が伝承を継続することの成否を決めていくのではないかと。ちょっとした誤解から、トラブルで空中分解ということも有り得るわけで、その伝承を続けてく上で、何が大切なんだと思われますか、というお話です。

それから、担い手の拡大ということの問題とは別に、例えば世襲制ですとか、あるいは宗教者のような人、太夫とか沖縄でいうところの神司とか、そういった人の育成ということも重要なのではないかと。逆にそういったものになると、行政としては関わりにくくなるのでしょうか。あるいは、別の方から、行政が担うべき役割というのは、そういった社会的な環境の中で、行政が担うべき役割とは何でしょうかということ。

それから、ちょっと違いますけども、長い間休止するという場合が、廃絶してしまうというわけで



はなくて、長い間ちょっとお休みするといった場合、復帰するためのモチベーションの再起、モチベーションをどう持っていったらいいんだろうか、そうすると成功するんだろうかといったようなご質問も来ております。

いずれも伝承者の集団の中での問題、人間関係のことも含めての問題だと思いますけども、この辺りは、ご経験から考えていかがでしょうか。まず、武田先生から、じゃあ、お願いいたします。

**武田俊輔**：なかなかお答えするのが難しい質問だなと思ってお聞きしてたんですけど。

3番目からいきます。長い間中絶していた状態からのモチベーションの再起ということなんですが、私自身が中絶からの復活として滋賀県内の例で思い付くものとしては、例えば「下余呉の太鼓踊り」なんかがあります。そこは今、中心になっていらっしゃる方は大体30代ぐらいの子育て世代の方なんですが、目的がもうだいぶ変わっているというか、青少年育成事業の一環としてやっているという面があります。それ以前のものとは、だいぶ民俗芸能自体が地域社会において持つ意味が変わっています。

民俗芸能は、当然さまざまな資源を必要とする。人手が必要であり、お金が必要であり、そして物が必要であり、さらには技能やルールといったものがなくなる。そういうような資源の集合体であり、それによって何らかのメリット、何らかの用益を生産できるから、そこには意味があるわけです。そういった「用益」って何なのか。それは時代によって変わってくる可能性って当然あるわけです。その状況において、そのコストを払っても出てくるメリットっていうか、ベネフィットっていうか、そういった用益を新たに明確に見出すことが、やはり大きいのではないのでしょうか。今の事例はかなり長期的な中絶の後の復活という場合でして、中絶して間もない民俗芸能であればこれとはまた話は変わってくるでしょうが。

2番目です。宗教的な部分に関して、行政の方は当然関わりづらいということが、恐らくあるのだと思います。そうした中で行政ができることとしては、やはり祭りや民俗芸能を行う上での資源の獲得とその獲得を可能にするための調整機能という点にあると思います。先ほど申し上げた4種類の資源（お金・モノ・人手・技能）というのが、祭りや民俗芸能を行う上で必要なわけで、そういったものをどういう形で供給可能なのが常に問題になります。それらがないと、そもそも継承することができないわけですから。

そのときに私自身が想起するのは長浜の事例です。長浜曳山祭自体は短期的には継承に問題があるわけではないのですが、戦前から戦後にかけての長浜曳山祭がどのように必要な資源を獲得していたかを分析していて面白いと思うのは、行政と町内の祭りの担い手が連携して、祭りの名目を変えることで必要な資源を継続的に獲得している点です。

長浜という町は戦後になって急激に窮乏化し、祭りの継承が資金的に難しくなります。すると突然、資金を行政から獲得するために「これは宗教的な行事ではなく観光資源です」ということを担い手が言い出して、その名目で助成を獲得する。また昭和40年代ぐらいになると、観光と同時に「これは町内だけのプライベートな祭りではないんだ、長浜市民の皆の祭りなんだから公共的な価値がある」というふうに、コミュニティのお祭りであると言い出して、その名目で市民からの寄付を獲得していく。

さらに昭和53年から54年ぐらいに国の重要無形民俗文化財に指定されるわけですが、今度はそれまで観光のために重要だと主張していたのが、文化財指定によって助成を得られる可能性が高くなったということで、「去年までは観光、観光って言うってたじゃない？」っていうぐらいころっと主

張が変わって、「これは文化財だから」っていうふうに言い出して、観光的な演出をいきなり大幅になくすんです。

それは、行政によって強制的になされているというよりは、町内の祭りの担い手も行政も、双方が状況を分かった上で、資金的な調達の仕組みをうまく連携して整えていっている、その時その時の社会的な文脈に応じた中において、どういう形で資源を調達する仕組みを整えていくかということを常に考えているわけです。担い手以外に用益が何もないのにそういった資源を獲得できるということはあり得ないわけですから、何らかの用益が担い手以外にもあることを示していく必要があるわけです。

例えば、観光という名目なら観光客に対して何らかの用益がある。だからこそ行政や観光客から助成のような形で資源を調達できる余地がある。あるいは文化財という名目であれば、公開し活用することによって国民一般に対して何らかの用益があって、それに対して行政が資金を出す正当性が発生する。

あるいは学校教育であれば、そうした現場に担い手の側が出向くのが時間的にも人的にも負担になる場合はもちろんあると思いますけども、それによって外部から祭りに参加する担い手という人的資源の将来的な獲得につながる。また地域全体の祭りという認知や正当性を将来の納税者である子どもたちから得られることによって、今後も祭りに行政からの助成を行うことに対する納得を調達できる可能性がある。学校教育の現場としても、何を郷土教育として児童・生徒に提供すべきかという課題を解決する格好の教材ができる。

もう長浜の方なんて、私に対して、「これで君も調査ができるよ」とか、「これで大学のフィールドワーク、ゼミ生のフィールドワークできるよ」というのを、ちょっとちらつかせながら、それで私のゼミ生がものすごく、みんな祭りに動員されるんですけども、それは WIN-WIN の関係だとも思うわけです。

そのような形で、祭りを行うことには単に担い手だけでなく地域社会や行政にとって大きな公共的用益があるということをどう示していけるのか。そうした用益があることに対して、地域社会・行政・学校などの側が見返りになる資源を担い手に提供するというような部分はあるだろうと思います。行政だけでなく、学校・大学などの他のさまざまなアクターも含めてあるんだろうと思います。そうしたアクター間の調整は、行政が一番できる部分なのではないでしょうか。

例えばこれも長浜の事例ですけども、長浜で「曳山」と呼ばれる山車は、絶対にこれがなかったら祭りができないっていう資源です。1980年代にその維持管理をするための場所をどう確保していくかというのが問題になりました。1990年代以降、長浜は黒壁というまちづくり会社によって観光化が進んでいくのですが、この時期の長浜中心市街地はロードサイドの大型ショッピングモールの影響で、商店街が非常に厳しい状態にありました。そうした中で中心市街地の活性化の起爆剤として主張されたのが、2000年に長浜市曳山博物館として開館した博物館です。ただ名目は経済的な活性化だったわけですが、祭の担い手の側はそれ以上にむしろ老朽化した曳山の修理設備として博物館をいかに充実させるかを考えていたし、そのもくろみが実現したことによって現在までほとんどの曳山を修理することができています。これもまた地域社会に対して用益を提供することで、担い手が資源を獲得したという例だと思います。

1番目は、どうお答えしたらいいのかなって思うんですけど、得られる用益よりも、担い手同士の考え方の違いとかによるもめ事と向きあわなくてはならない時間的・人的コストが大きいと担い手が考えるようになってしまったら、普通に継承にしないだろうと思います。それに関して行政の方に何

ができるのかについては、難しい問題ではないかという感じがします。

ただ、世代間の考え方の違いによるコンフリクトみたいなものがあるから祭りや民俗芸能の継承組織がばらばらになってしまい継承ができないのかということ、必ずしもそういう場合だけではないだろうと思います。そこでコンフリクトがなぜ発生するのかっていうと、そこにはそれぞれの担い手の祭りや民俗芸能についての何らかのこだわりがあるからだろうと思います。そうしたこだわりが担い手に全くなかったら、わざわざ互いに考え方の違いを調整する時間的なコストが無駄ですから、継承する側も「はいはい。言われたとおりにやりますからね」と、淡々とルーティンをこなすだけになって、コンフリクトは発生しないだろうと思います。むしろ、そういうコンフリクトが発生するところには、継承の可能性もあるのではないか。もめ事の当事者同士の間、自分が祭りや民俗芸能をしっかり継承するぞ、今の時代にあった形で自分なりに向きあうという姿勢がお互いになれば、むしろもめ事がプラスになる場合だってあるだろうと思います。

また以前私がある祭りを調査していたときに、私や他の祭りの担い手たちの目の前で、若い後継者と年配の方が、祭りで使う笛を投げ合って大げんかを始めたことがありました。でも、それは単なるあつてはならない出来事ということにはとどまるものではないと思います。そうしたもめ事自体が他の担い手からは一種のハラハラするドラマとして享受されて祭りに興味をもたらし、また祭りをめぐる忘れられない教訓として共有されていくということもあるからです。

そうしたプラス面を述べることができるのは、ドラマを楽しめるだけの精神的な余裕がある状況にある祭りだからかもしれませんし、本当に継承が厳しい民俗芸能において、そんな余裕はないのだろうと思います。けれども、そういうもめ事のドラマが生み出す面白さみたいなものとか、担い手として自分と上の世代とがもめ事でやり合った記憶みたいなものが伝承をつないでいく力になる可能性というの、自分自身の経験からいくとあると思いますし、そういうことも論文（例えば「若衆-中老間のコンフリクトと祭礼のダイナミズム」市川秀之・武田俊輔編著『長浜曳山祭の過去と現在一祭礼と芸能継承のダイナミズム一』おうみ学術出版会、2017年）や近刊の著書に書いたりもしています。

**久保田：**ありがとうございます。星野先生、いかがでしょうか。

**星野紘：**突然の質問事項なので、ちゃんとした答えはできないかと思いますが、とにかくお答えしてみようと思います。

若い人と年配者との対立の問題ですが、私自身は、年配者ですので、時代は変わって行きますから、私自身の問題としては、できるだけ若い世代の話は聞くようにしたいと思ってます。ただ、やっぱり、宮本常一さんがコンフリクトを随分時間をかけてやっと解決したと書いておられたように、やっぱり徹底的にやり合うしかないんじゃないでしょうか。具体的な事例を思いつかないんですけど、起こったら、やっぱり解決までやり合うしかないんじゃないでしょうか。これは感想でございます。

それから、2番目の、世襲制とか宗教・信仰的な人たちの問題ですが、確かに、私自身も、行政の立場に身を置いていた時には、皆さんとても慎重でした。だから、おみこしを作り替えるとか買うとか、修理するとかっていう事業にお金を、補助金を付けていいかどうかというような議論をしたことがありまして、なるべく避けましょうみたいな話をしていたことはあります。だけど、現実的にはそれは見方の問題でして、おみこしだって、場合によっては、修理事業を認めるケースも近年は出てきているような印象を受けますが、どうでしょうか。

例えば、信仰的な伝承として、青森のイタコさんの行事のように、記録選択ということで、行政サイドは問題を避けてきてるかに見えますが、その大事さ、文化財としての価値というものを把握し、

記録で残すっていうのは、妥当なやり方なのかなと思いますが、ただ、全ての民俗伝承が文化財にはなっていないんです。例えば、お葬式に関わるような、個人的な家に関わるような民俗伝承っていうのは、文化財として取り上げられているのは、極めて少ないと思います。

沖縄の宮古島の、「ウヤガン祭り」という、とても盛大な行事があったんですけども、あれなんかも、全然文化財の対象になっていませんでした。全ての信仰的な伝承が文化財にはなっていないということと、それらを記録するというかたちで残すというのは、妥当な線かなと思います。ちょっと穏当な考え方ですけども。

それから、廃絶した伝承復活へのモチベーションをどういうふうに保つかっていうことは、広島県の比婆荒神神楽のように、式年で33年で1回やるとかっていうケースは結構多い事例ですし、それは、33年、13年という式年でやるというある時間的インターバルを踏まえながら伝えていくという伝承は、ルールがあるからいいわけですけども、そうじゃなくて、伝承自体が絶えた場合の話とは違うんじゃないかと思うんです。伝承が絶えて、それを例えば10年後に復活させるために、どういうふうにモチベーションを持ったらいいかっていうご質問ですが、私自身、経験がないんですけども、恐らく、伝承できなくなってきたという時点で既に、残すというか持続のための対応策というのは、普通は考えると思うんです。

例えば、先刻4つの事例を挙げたのですが、全てにいえることは、ピンチな状況になってきたその時点でも、必ず、ピンチにどう対応するかっていう行動をとっていると思うんです、それぞれの伝承者たちは。ですから、もうピンチになったと自覚した時点で、もう次の復活のことまで、こういう時代ですから視野に入れるべきことなのではないでしょうか。そういうふうに対応していただきたいものだと思います。

**久保田：**ありがとうございます。残念ながら、もうほとんど時間がなくなってしまいました。

最後のご質問、これは4人の発表者の方々に一言ずつ頂きたいと思います。非常に総合的な話ですが、今回の話が、文化財を維持しようにも、保持団体あるいは地域が崩壊しつつあるというふうな現象、これを共通して扱っていたんだと思うんですけども、文化財として指定することで、郷土意識を芽生えさせるといったような現象が、全国各地で発生しているのでしょうか。それぞれの地域での話でいいと思うんですけども、文化財として指定することで、郷土意識を芽生えさせるといようなおつもりというか、そういうことを考えておられるのか。

それから、もう1人の話としまして、理想論かもしれないけれども、地域活性化とのもっと密な連携をして、若者たちが地域に残るような動きになるといいですねと。文化財側から何かそういった提案はできないものか、若者が地域に残れるような提案を、文化財側からできないものか、ということ。

それから、九州での話ですけども、九州ではしばしば「芸能があるから村がある」という言葉を使うそうです。ですから、今回芸能だけじゃないですけども、芸能の休止・廃絶・継承といったような問題は、そのまま、その村社会の休止・廃絶・継承につながっているんじゃないか。ですから、社会全体として考えるべき問題に繋がっているように思いましたという、これは感想でもありますけれども。

そういった社会全体、これからの大きな問題として、ご発表いただいた4人の方々それぞれ、短くお願いしたいと思います。

**森本：**難しい質問ですけども、地域は崩壊して、文化財として指定することで、郷土意識を芽生えさせると考えているかっていうことでしょうか。それは、あまり意識してないといえ、意識してない



です。指定されてるものがある中で、やっぱりそういう郷土意識を持たれるということはあるんですけども、それを意図して何か指定しているということではなくて、あくまで文化財的な価値ということで指定しています。もちろん、それだけではないですけども、郷土意識ということを一に考えて登録や指定をしているわけではないです。

それから、地域活性化に関して、文化財からの提案、文化財を使ってとか。これも難しい。先生方の話にもつながるのかもしれませんが、その時々で、地域活性化とったり、郷土教育とったり、何か文化財とったり、あるいは観光とったり、いろいろあるんでしょうけれども。奈良県の場合は、来年から文化財が知事部局に移ります。そこでは保護活用の両輪でやっています。今やってる映像にしてもそうですけど、ほぼそちらのお金でやって、要するに、観光や地域活性化になるということで進めています。

地域というよりは県の話なんですけれども、それによって、県や地域のメリットがあるというふうに考えています。具体的にいうと、「芸術家村」という所ができるんですけども、そういう所でやっぱりお金を取ってきて、何とか補助をするなりしてます。

もちろん、未指定の文化財に対して補助をするという制度もあるんですが、やはりなかなか、先ほど鳥取の話であったように、手が挙がってこないというのがあります。やっぱりそこは、地域づくりとして補助金を出してるんですけども、実際なかなか挙がってこないところがあるようです。

これも先ほどから何度も出てることですけど、やはり広域的に伝承していくしかないんだろうと。1つの集落で維持していくっていうのは、かなりもう限度がある。先日、九州の太鼓踊りを見に行きましたが、そこでも5つやってた太鼓踊りが、もう2つぐらいしかできなくなってるということは、結構あることでしたし、半分はやっぱり実は外の人がやってるという話も聞きました。

ちょっと全然答えになってないっていうか、非常に難しいので、ちょっとこれぐらいで。

**久保田：**ありがとうございました。

**久保田：**もうまとめて構いませんので、3つそれぞれじゃなくても、短くお願いします。

**丸谷：**最初、文化財として指定されることで郷土意識が固められるかということなんです。これは全国でもたぶん言われると思うんですけども、民俗芸能ですとか、民俗行事を行う団体の人達は、自分たちが好きで勝手にやっているんじゃないか、お酒飲みたいからやっているんだろうと、ちょっと冷たく見られがちなのがあるという話を聞くことがあります。そのときに、文化財指定に関するニュースが出たりすると、秋田にある全ての民俗文化財が特別なものだという意識を高めてもらえる。そういう意味では、郷土意識を高めてもらえると思います。

それから、芸能があるから村があるというようなことは、先ほどのことも関わるんですけども、戸数も少なく、特別な事は何もないと思っている集落の人に、そこで行われている民俗行事が面白いと誰かが言ってくれば、じゃあこのために集落でもう少しやっていこうかというような方向になると思います。

私は今博物館におりますので、地域の方々に、集落の民俗芸能や民俗行事にどのような特徴があるかとお伝えしていき、集落の方々が誇りをもって守っていただけるようなことをやっていきたいと思っています。

**久保田：**ありがとうございました。

**原島：**手短にということなので。奈良県さんと同じく、4月から知事部局に行く鳥取県です。

活性化の話で、活性化の連携っていうのを非常にいわれると思うんですが、民俗文化財の場合は、

やること自体が活用なんじゃないかと思っています。民俗文化財、行事をやることで、人々の絆をつくり、お祭りで人が集まってお金が落ち、物が動く。やること自体が活用だと思うので、大手を振ってしっかりとやっていけたらいいと思いますし、その結果、楽しかった思い出、子どもの頃、お祭りに参加して楽しかった、必要とされた、そういった思い出が、若者が地域に残る原動力になるんだと思います。必ずしもそこに住まなくても、今日、途中で先生からあったように、潜在的な村の人口になっていくであろう。だからこそ、しっかりとお祭りを続けて、子どもたちに伝えて、という動きを、できるだけ丁寧にやっていきたいなというふうに思います。

**蘇理：**常々、文化財保護っていうのは、僕は「未来に向かっての仕事」だと思っています。文化財の指定をするときには、その歴史とか分布や系譜をいろいろ調べて、こういう価値がある、こういう様式が古いとか、何かそういうことを議論して評価したりするけども、実際、その後の保護とか、活用っていう話になれば、その作業の方向性は、もうすでに未来に向かっていて、これをどういうふうに伝えていくかという分野が、仕事の大半になります。そういうふうに割り切った感じで、文化財保護の仕事をしていったほうが、今日的にはいいんじゃないかなっていうことを、個人的には思っています。

文化財側からの提案、という質問については、結構、私はやってる方だと思います。去年も、全国の熊野神社の集まりがありまして、今日の会のような感じで全国の熊野ゆかりの宮司さんを前にお話をしました。熊野三山の祭りについて、文化財的にお話をするっていう機会を頂いたのですが、お蔭でたくさんの熊野神社の宮司さんと仲良くなりました。そういうときに、「祭り」とはこういうものですよっていう話には、もちろん宗教的な感覚や実践があると思うんですが、それとは別に、文化財的な価値を専門家としてお話しすることも、私はあるんじゃないかなと思っています。そこはちゃんと文化財の専門家としての役割、立場としてお話しして、宗教家と交流を深めていくということで、自分の役目は果たしていけるのではないかなと思っています。

あと、活性化の議論については、昔、この祭りにはこういう芸能があったんだけど、今は何かの理由で失われてしまった、ということを調査で知って、こういうふうにしたら復活できるんじゃないの？みたいな提案を、文化財的にすることがいくつかありました。そうして、私が過去にやったことは、話が長くなるので、知ってる方は知ってると思うんですが、そんなお手伝いをしたり、実際に自分がやってみたりしています。

例えば、江戸時代に祭りで歌われた歌詞が、古文書にあるけど、もう曲も節も全然分からない。けど、「この歌詞いいよね」「このままでは勿体ない」と思うので、仲の良い長唄の三味線の先生がいて、「これ、曲付けられませんか？」と相談しました。内容も、ちゃんと和歌山のこと褒め讃えるような文句だから、新曲として何かに使えないかなと……。そういうコーディネートも、われわれは専門家として気付いたり、手が届いたりするわけですから、自分の気付く範囲、出来る範囲でやっていくっていうことも、あっていいのかなと思います。僕、今、ものすごく危険な話をしてるかもしれませんが（笑）。

でも、それはつまり、ある程度ちゃんと専門家としての信念を持って文化財保護の仕事をやっている、その延長線上にあると思うんです。文化財の活用っていうと、何か利用されるみたいな感じに取られがちですが、逆にその状況を利用していくという立場で、自分のやるべき仕事として、伝統文化を未来にどうつなげていけばいいのか、実験的に考えていけたらいいな、というふうには思っています。

**久保田：**ありがとうございます。もっとたくさん聞いていたいんですけども、すいません、時間

が過ぎてしまいました。

うまくまとめられないので、ごく簡単にかいつまんで言いますと、今日はいろんなお話がありましたけども、地域に新しい仕掛けが今できてきているのかなという気がいたします。新しいグループが行事を行ったり、あるいはネットワークができる、あるいは経済的な問題としてクラウドファンディングを行うということ。あるいは、もう続けるんじゃなくて、やめるという選択肢を選ぶという、これもある種の新しい仕掛けかと思います。そういったものが、これからもっとどんどん出てくるのではないかと思います。

特に「活用」ということで、先ほど、知事部局に移るということが出ておりましたけども、活用という問題で、外からの活性化させる動きってというのは、これからもっと、いろんな人がいろんな形で言うのではないかと思います。それはどんどん進んでほしいなと、私などは思うんですけども。

けども、中には無理なものもあるかと思うんです。無理は禁物と言ってあげる人。これはやっぱり行政の人たちがそこを見張っていて、無理は禁物だよと言ってあげる。行政の人、普段から寄り添っている人が、そういうことを言える一番の理解者だと思いますので、そういう理解者が常に伝承者に寄り添って入れるような、行政に限らず、研究者とかでももちろんいいんですけども、そういう存在が必要になってくると思います。

そして、活用しようというときに、やはりベースとなっているものを、しっかり提示できるような材料を作っておかなくてはいけないのではないかな。それが記録、映像記録だったり報告書だったり、いろんな形でそれは示せると思うんですけど、これをできるのも行政仕事ですし、あるいは研究者の仕事であると思います。その辺りをしっかり固めておけば、これから活用、活用といっても、無理な活用はせず、伝承者に負担を強いない、たくさんの人が無形民俗文化財を愛せる社会になる、そうしたきっかけになるのではないかと思います。

これから 2020 年に向けて、いろんな文化事業というものも出てくるかと思いますが、その先を見据えて、何をしていくかということを、私たちは考えていかななくてはいけないのではないかな。それぞれのお立場から考えていただけたらというふうに思います。

それでは、本日は長時間にわたりまして、ありがとうございました。これで、総合討議を終了させていただきます。皆さん、ありがとうございました。

## アンケート集計結果

1. 参加者 総数 183 名（一般 167 名／スタッフ 16 名）

2. アンケート回収率 112 名 ／ 回収率：67.0%

### 3. アンケート集計結果

#### (1) 回答者内訳 ※複数回答あり

所 属	(名)
伝 承 者	5
企 業	1
教 育 機 関	3
行 政 機 関	61
博 物 館	16
研 究 者	9
学 生	1
そ の 他	6

#### (2) 満足度

	(名)	(%)
非 常 に 有 意 義	64	57.1
有 意 義	42	37.5
有意義ではない	0	0

#### (3) 自由回答（まとめ）

##### 【満足度の理由】

- ・私の勤務する町でも危機にある無形文化財があり、その対策の参考になった。
- ・今取り組んでいる事業と照らし合わせて、非常に参考になった。
- ・各県により対応が様々で、その取り組み自体に地域性が見えて興味深かった。

##### 【今回のテーマに関する課題や提言】

- ・県単位の講演でしたので、市・町単位の取り組みも聞いてみたい。
- ・具体的にどう支援したらよいのか、ノウハウとか事例が集められるとよいのかもしれない。
- ・民俗文化財の存続について、行政がどこまで関与していけるか、またどう関わっていけるかが課題。

##### 【無形民俗文化財の保存・活用に関する問題や課題】

- ・史跡等の文化財に比べて無形民俗文化財の「活用」について具体的なイメージが持てない。
- ・地域の過疎化、高齢化における後継者不足、資金不足。
- ・文化財保護法が改正され、個々の文化財の「保存活用計画」が法的に位置づけられたが、無形の「保存活用計画」策定についてイメージがわきにくい。



### 【今後取り上げてほしいテーマ、要望等】

- ・今回のテーマを連続的に取り上げて欲しい（市町村や民間団体の事例紹介など）。
- ・民俗芸能の映像記録の作成について具体的に知りたい。
- ・ネットワーク（同一市町村や府県での連絡会、同一の芸能等の連合会など）作りと運営に関する事例や問題点。
- ・無形民俗文化財に用いる用具の修理とその実践例など。

## 4. アンケート抜粋

### （1）テーマに関する課題・提言

#### 【無形文化遺産の危機に関する意見】

- ・「危機」の捉え方によって、対処の仕方も変わってくるし、当事者の目線か部外者の目線かによっても違ってくると思う。文化財保護法の改正を受けて、「危機」にある無形文化遺産とどう向き合うのか、その価値をどう理解、認識し、記述し、活用していくかが、改めて問われていると思う。
- ・弊財団では無形文化財の記録映像を制作してきたが、記録することの意味を改めて感じた。地方自治体の役割とともに、公益財団法人がなすべきことを改めて考える必要性を感じた。
- ・活用ばかり注目される昨今の社会情勢に「本質的な価値」の喪失の危機が全国的に存在することを再認識するきっかけになった。
- ・人口減少や地域再生という社会全体の問題と深く関わっているテーマなので、今、目の前の消滅をどう防ぐかということと同時に、日本人がどう暮らし、生きるか、民俗芸能の意味など全てが問い直されているように思う。
- ・後継者育成は地域振興対策とも繋がる問題であり、多角的な視点で考えていくべきである。
- ・変化することを大前提としながらも、オーセンシシティをどこで、誰が担保すべきか難しい問題だと思った。
- ・今回話題になったことは、実は都市部においても起こっている。帰省する人の多い都市部では、祭りや芸能をどう維持していくか、声が聞こえにくい。

#### 【伝承者・伝承地域に対する課題】

- ・地域の伝統文化に対する意識の変化が継承に影響している。「なくなっても困らない」という層は一定数いる。確実に残していくためには、やはり学校である程度子供の時分に広めることが効果的だと思う。
- ・無形民俗文化財の継承や復活、記録保存はもちろん重要であるが、担い手はそれを行う「意味」を理解した上で継承しているのでしょうか。「昔から行われてきた伝統的な行事だから続けないと……」のような形式的な持続なのか、意味や本質を伴った継承なのか。その部分が今回見えにくかった。
- ・人口減少によって伝承者がいなくなるということはもちろんあるが、信仰心の変化という側面もあるのではないか。
- ・民俗芸能を取り巻く環境はかなり悪くなっている。後継者が何とかいても、今後大きな問題となる要因が多いと感じる。

- ・子供がいない、人口が減ることが最大の問題だが、これの根本的解決は私共には無理。新しいうねりに飲み込まれてしまうのか、その中で違った芸能が生まれてくるのか？記録保存が急務である。
- ・休止に至る伝承者たちの苦悩があまり見えてこなかった。
- ・伝承には大学～小学校が中心となった活動が最も有効だと再認識した。
- ・どうやったら地域に人が増えるのかを考えねばならない。例えば、人を増やすためには定住者促進だけでなく、毎年祭日になったら必ず来てくれる「お祭りバカ」を増やす方法なども考える価値があるかもしれない（「(観光) 客を呼び込む」という意味ではなく、「第2のふるさと」的に参加者として「Iターン」的に定期的に来ていただくということ）。
- ・地域外に呼ばれていき、他所(シアターなど)で公演することは1つのモチベーションになったり、他団体との交流によって自分たちのあり方を見直す機会になると保存会の人からお聞きしたことがある。オーディエンスや他者のまなざしや関係性を作ることが大事だと思う。
- ・地元で民謡が伝承されていて、「細く長く」を合言葉に地元で頑張っている。子供達は参加しているが、10代後半から20代、30代がいないので不安だ。

### 【行政の関わり方に関する課題】

- ・民俗文化財の存続について、行政がどこまで関与しているか、またどう関わっていけるかが課題。
- ・無形民俗文化財に関して、行政と保存団体（有志団体）の間で生じる問題や、解決までのプロセスなどあったら教えてほしい。
- ・行政関係者と実際に活動する人達との協力活動のあり方、プラスの意志をどう活性化させるか。
- ・行政の支援、あるいは主体的な活動は大事だが、どうしても予算・人員が限られ、本腰を入れた動きがとりづらいところがあると思う。そうした中でも何か成果をあげているところがあれば、是非知りたい。
- ・過疎の問題によって、地域としての伝承が難しくなっているので、地域の力だけに頼らず、県単位、国単位で無形民俗文化に対する関心を広め、高めていくことが唯一の解決策ではないか。

### 【活用に関する課題】

- ・獅子舞のような宗教行事の目的があるものに対し、観光客を巻き込む、外から舞い手を呼ぶということは行事目的を見失うことになるのではないか。無形民俗文化財を継続させるために外から人を呼ぶことも重要だが、伝統芸能の本来の意味、目的とのバランスをどのように取るか。

### 【記録撮影に関する課題】

- ・記録を取ることは重要だが、教育委員会、研究者などで全てをカバーするには人材や時間の制限もあって難しい。ビデオ等の材料が比較的入手しやすい現代において、各保存会である程度の質の記録がとれるようなマニュアル？手法があればと思う。
- ・民俗芸能であれば映像を残すことにより、危機的な状況の際には映像を用いて復元など可能だと思うが、民俗技術の場合は民俗芸能ほどうまくいかないのだろうと思った。

### 【今回のテーマ内容に係る提言】

- ・地域における無形の文化財の継承をどうしていくのか。行政としてどう支えていくのか考えていきたい。
- ・伝承は強制されるものではないとはいえ、続けたいコミュニティに対しては支援も必要となるだろう。具体的にどう支援したらよいのか、ノウハウとか事例が集められるとよい。
- ・今回の報告は県レベルのみであったが、可能であれば市町村担当者の方の報告事例も聞いてみたい。
- ・各発表は県教育委員会が多く、県として県内の文化財をどのように保存記録等を行っているのかという話だった。市町村の文化財担当職員の関わりをテーマにした話もあればよかった。
- ・ユネスコに登録されたものについて、継承という面から見た登録前と登録後の違いについての話も聞いてみたいと思った。登録前と後で意識の違い、継承体制などに変化があったのか知りたい。
- ・限界集落や少子化で伝承者がいなくなった民俗について協議（問題提起）してみても良いのでは。

### 【その他】

- ・武田氏のコメントにあった、そこにいる人たちだけでなく、面として少し広げて捉え、未来を見据えていくという考え方は面白いと思った。

## （2）無形民俗文化財の保存・活用に関する問題や課題

### 【体制・制度づくりの問題】

- ・地域コミュニティの維持、生活基盤のサポート、観光や地域活性化事業の両立、調整といったことを総合的に議論したり、具体的な実践に繋げていく取り組みやその方向性などを、国、県、市町村や保存団体と自治会、町内会などが情報を提示したり、共有していく体制づくりが急務。
- ・過疎地で完全に人が居ない場合、確実な伝承、存続にはどのような方法があるか。映像や報告書などに終わってしまうのか。
- ・保存会同士の横の繋がりが乏しく、伝承活動に係る情報が不足している。県をまたいだ交流がもっとできればよいと思う。
- ・無形の文化財の伝承について、行政サイドがどこまで手を出して良いのか？伝承をしていくための変化を促して良いのか。

### 【公開やイベントへの出演に関する課題】

- ・イベント等で芸能の公演を依頼するが、イベントへの出演自体が高齢者の多い団体への負担となりつつあるように感じる。
- ・無形の文化財の「公開」に要する経費や労力が保存会の負担になっている一方で、「公開」することが演者のモチベーションとなり、練習にも熱が入るという意見も聞く。相対するような両方の意見をうまく融合しながら伝承していける方策があればと考えている。
- ・活用＝公開の場を増やすとなりがちであるが、それだけでいいのかどうかと思う。
- ・披露（舞台に立つ）機会を創出、提供したいと個人的に思うが、当館では県民に求められる役割、性質が無形民俗文化財に向いていないなと感じることが多い。どうしても有形文化財資料を優先して取り上げざるを得ない雰囲気がある。

- ・保存団体の活躍の場がない。例えば六斎念仏でいえば、お盆の時期に各家をまわるが、それ以外に特に出番がないため、毎月、練習をしてもやりがいを感じない人もいる。

### 【活用に関する課題】

- ・無形民俗文化財の「活用」については具体的なイメージが持てない。
- ・観光以外の活用で行政を納得させるのが難しい。
- ・無形文化遺産に登録されたことにより活用を図ることが主張されるが、伝承者にとって見物人が増えるだけで何のメリットもないという意見がある。地元の商店や観光業者は観光客が増加することで収入がふえるが、伝承者にはそうした収益も上がらない。

### 【担い手や後継者に関する課題】

- ・資金不足もあるが、それ以上に後継者や人手不足が問題である。
- ・転入者⇔地元の交流がうまくいっていない。
- ・子供が少なくなっている。
- ・保存団体が「義務的」に継承活動を行っている現状を変えたいと思っているが具体的な策がまだ見つからない。
- ・担い手が高齢化する中で、若い人へのPRがうまくいかない例が多い。
- ・リーダーの育成をどうしていったらよいのか悩んでいる。

### 【予算や調査事業に関する課題】

- ・祭礼や芸能などを映像で記録しても未編集のまま積まれてしまう。編集しても、それを公開するためにアーカイブ化、DB化する予算がない。さらにいえば、それらを行う人がいないため、どうしても後回しになってしまう。
- ・保存のために対象となる補助金が少ない。
- ・文化遺産総合活用推進事業の補助金で調査研究メニューがなくなったことが非常につらい。活用発信ばかり重視されても、元となる資源が資源化できないので、薄っぺらい発信になりがちである。
- ・調査を行うにあたり、団体、市町村ごとに協力の温度差がある。
- ・市の補助金が後継者育成に有効活用しづらい。
- ・行政としてどこまで手を出したらいいのか、資金や人的関わりについて、とくに県の立場では特定のものに偏らないよう配慮も必要。

### 【無形民俗文化財の変容に関する課題】

- ・無形文化財は変わりゆくものですが、どこまで変化を許容してよいのか悩んでいる。例えば、門前市の様子を残す市を文化財にしているが、飲食店の商売の出店が軒を連ねる形態に変わりつつあり、昔の古着や古道具を売る姿はない。区の文化財として残す意義について、見直すことも必要かもしれない。
- ・無形である上は変化するものと思いますが、複数ある演目のダイジェスト的な演目が生まれるなどの動きもあり、それをどう捉えてよいかわかる。



### 【道具や技術の継承に関する課題】

- ・ 伝承に必要な技術の伝承に課題を感じている。例えば、当地では祭礼時につくられる用具や設備に以前は縄を使用していたのが、近年では結束バンドが多用されるようになった。後継者がいて、一見順調に継承されているようでも、実は以前とは大きく異なる姿になっている場合もある。記録することの重要性、継続的に関わっていくことの必要性を痛感している。
- ・ 道具の修理や伝承の方法などに関する具体的な助言（例えば、人形や衣装の修理技術者はどこにいるのか、資金調達の方法）をするのが、専門職のいない本市では行うことができず困っている。

### 【指定解除に関する課題】

- ・ 保存会が解散してしまった場合、指定の解除をしなければならないのか。
- ・ 指定無形民俗文化財の解除に関して、休止が長引いているものがいくつかあり、あまりに長く復活の見込みのないものが解除に至っている。ですが、解除について、個別に考えてよいのか、何か基準が必要なのか、これから休止になるものが増えてくると予想されるなか、どうすべきなのか。

### 【その他】

- ・ 映像等撮影する場合、個人情報に関係で顔（表情）を記録する事が難しい。
- ・ 市内のある団体が小学校で公演を行なおうとしたところ、宗教性があるので断られたことがある。
- ・ 最近では講を終えるところが多く、近世から伝承されてきたお道具類の処分が行われているようだ。寺社や博物館に持ち込まれたものは保管されるが、「いらないもの」とされてしまった道具類をどのようにレスキューしていくか、考えていかななくてはならないと思っている。

### (3) 今後取り上げてほしいテーマ等

- ・ 地域を越えた民俗芸能の保存、継承を積極的に推進していくために、荒馬座やわらび座などの全国各地の民俗芸能を学び、継承しようと活動している団体とも連携して欲しい。
- ・ 指定無形民俗文化財の解除のプロセスと事例。
- ・ 一度断絶した芸能が復活した場合の問題点。
- ・ 保存団体同士のネットワーク構築、活用の例。
- ・ 文化財（無形文化遺産）の活用と保存のバランスの取り方。今回の法改正に伴い、観光偏重になる危険性をどう対応するか。
- ・ 無形民俗文化財について、博物館の展示はどのような形で保存・活用・伝承に寄与できるのか。
- ・ 無形民俗文化財を支える人や技術。
- ・ 無形民俗文化財に用いる用具の修理とその実践例。
- ・ 工芸技術や民俗技術に関するテーマ。
- ・ 今回のテーマを継続的に取り上げてほしい。
- ・ 代表一覧表へのシリアルノミネーションの可能性について。
- ・ 無形民俗文化財と無形文化遺産の違いについて整理し、今後の国としての展望を知りたい。
- ・ 芸術性の追求と伝承保存のモチベーション。存在価値（質）、芸術と歴史（古さ）。
- ・ 文化財指定の未来像（増えつつける指定。増えない担当者、予算頭打ち、休止する団体など）。

- ・継承存続のための他部局（または民間）との連携体制、制度について。
- ・今回はいわゆる「へき地」の事例が多かったが、都市の祭礼などでも同様に休止・廃絶といった問題を抱えている事例があると思われる。

## ■ 参考資料 2

## 参加者一覧 (50 音順・敬称略)

相原 知香	練馬区地域文化部	柿本 雅美	大津市教育委員会
青沼 伸悟	長野県教育委員会	角 美弥子	北海道教育大学
東 祐子	川崎市立日本民家園	景山 和也	金沢市文化スポーツ局
阿部 信幸	神奈川県教育委員会	加藤 勝康	水と緑のふれあい館
阿部 礼子	登米市教育委員会	加藤 隆行	北海道教育庁
荒木 真歩	神戸大学大学院	加藤 拓也	山北町教育委員会
安齋 順子	くにたち郷土文化館	加藤 元信	文教ふるさと歴史館
飯島 満	東京文化財研究所	金澤 寿彦	秦野市市民部
井口 崇	袖ヶ浦市郷土博物館	金子 征史	八王子市教育委員会
石井 和帆	栃木県立博物館	亀山 善弘	岐阜県環境生活部
石井 聖子	常陸大宮市教育委員会	狩野 萌	東京文化財研究所
石垣 悟	文化庁	川波 久志	福井県立歴史博物館
石田 千恵子	川越市教育委員会	川邊 絢一郎	大磯町郷土資料館
石村 智	東京文化財研究所	神崎 良介	茂原市教育委員会
石山 裕雅	武州里神楽石山社中	菊田 祥子	東京文化財研究所
板橋 春夫	日本工業大学	菊池 健策	東京文化財研究所
伊藤 京子	軽井沢町教育委員会	菊池 理予	東京文化財研究所
伊藤 暁	秩父市教育委員会	岸田 裕一	人吉市教育委員会
伊藤 茂樹	まつり同好会	岸本 圭	福岡県教育庁
伊藤 純	川村学園女子大学	城所 恵子	神奈川県民俗芸能保存協会
井野 千春	群馬県教育委員会	北島 恵介	森町教育委員会
今井 雅之	宮城県教育庁	木下 裕雄	青梅市郷土博物館
入江 宣子	日本民俗音楽学会	木原 悠子	国際文化財株式会社
入澤 紀	東京八重山古典民謡保存会	木原 善和	千葉歴史学会民俗部会
岩崎 まさみ	北海学園大学	金 昭賢	東京文化財研究所
上田 喜江	安堵町歴史民俗資料館	桐村 久美子	袖ヶ浦市郷土博物館
鶴飼 均	亀岡市文化資料館	串田 紀代美	
牛村 仁美	東京文化財研究所	久保田 恵友	桑名市産業振興部
内田 篤呉	MOA 美術館	久保田 裕道	東京文化財研究所
内田 幸彦	埼玉県教育局	熊谷 博人	神社新報社
遠藤 健悟	東北歴史博物館	栗田 香穂	公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団
王 麗	景德鎮陶磁大学	小岩 秀太郎	公益社団法人全日本郷土芸能協会
大久根 茂	埼玉県立川の博物館	肥沼 隆弘	小鹿野町教育委員会
大久保 優美	公益財団法人日本ナショナルトラスト	児玉 信	
大島 建彦		小林 力	八戸市教育委員会
大森 韶光	西福寺	小林 裕美	千葉県立中央博物館
大山 孝正	福島県文化財センター白河館	小林 稔	文化庁
岡崎 光司	船橋市教育委員会	斉川 昭二	板橋区立郷土資料館
岡本 直也	春日部市教育委員会	坂本 要	
岡本 夏実	行田市郷土博物館	佐久間 かおる	町田市立博物館
尾上 泉	富士吉田市教育委員会	笹川 紗希	新座市教育委員会
小野寺 節子	国士館大学	笹本 倫	北杜市郷土資料館
尾曲 香織	北海道博物館	笹生 昭	公益社団法人全日本郷土芸能協会

佐野 正晴	水口歴史民俗資料館	仁ヶ竹 亮介	高岡市立博物館
佐野 真規	東京文化財研究所	西岡 陽子	大阪芸術大学
澤田 善明	荒川ふるさと文化館	西山 幸生	NHK
篠崎 茂雄	栃木県立博物館	沼田 愛	仙台市教育委員会
清水 博之	茨城キリスト教大学	根本 瑞穂	稲城市教育委員会
菅沼 万里奈	公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団	野尻 かおる	荒川ふるさと文化館
杉浦 あおい	文化庁	能登原 孝道	熊本県教育庁
鈴木 英恵	群馬パース大学	野村 優子	印西市立歴史民俗資料館
須永 敬	九州産業大学	萩原 麗子	伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス
住宅 正人	桃太郎のからくり博物館	長谷川 一樹	上尾市教育委員会
関 孝夫	上尾市教育委員会	長谷川 奨悟	佛教大学宗教文化ミュージアム
関口 健	瑞穂町郷土資料館けやき館	長谷川 嘉和	
瀬原 史織	軽井沢町教育委員会	波田 尚大	武蔵野ふるさと歴史館
蘇理 剛志	和歌山県教育委員会	畑井 洋樹	仙台市歴史民俗資料館
田井 静明	瀬戸内海歴史民俗資料館	畠中 栄子	高知県教育委員会
平良 宣子	毛呂山町歴史民俗資料館	原島 知子	鳥取県教育委員会
高鳥 邦仁	羽生市教育委員会	半戸 文	東京文化財研究所
高梨 友子	千葉県教育庁	東玉盛 靖修	東京八重山古典民謡保存会
高橋 一矢	登米市教育委員会	引地 幸市	株式会社メディアム
高橋 淳子	さいたま市教育委員会	引間 隆文	飯能市博物館
高橋 史弥	福井県教育庁	樋口 昭	
高濱 雄介	CN インターボイス	平林 洋子	静岡県教育委員会
高久 舞	神奈川県教育委員会	福田 拓也	荒尾市教育委員会
高松 悠希	板橋区教育委員会	福田 雄	東北大学東北アジア研究センター
高宮 なつ美	大分県教育庁	福原 敏男	武蔵大学
武田 俊輔	滋賀県立大学	福持 昌之	京都市文化市民局
武田 剛朗	大網白里市教育委員会	藤沼 昌泰	桶川市教育委員会
館野 太朗	東京文化財研究所	藤原 宏夫	島根県教育庁
田中 英機	くらしき作陽大学	伏見 英俊	智山伝法院
田中 雄介	兵庫県教育委員会	藤原 彰久	下関市教育委員会
田中 葉子	飛鳥山博物館	舟山 直治	北海道博物館
土屋 和章	安曇野市教育委員会	星野 紘	東京文化財研究所
土屋 みづほ	大阪府教育庁	堀越 光信	四日市市教育委員会
堤 涼子	一般財団法人宮本記念財団	前田 俊一郎	文化庁
ディララ・ディリジャティ	東京文化財研究所	前野 進	大串ささら保存会
土居 浩	ものづくり大学	前原 恵美	東京文化財研究所
戸田 剛	浜松市都市整備部	蔭田 隆行	大垣市教育委員会
富永 優	写真家	牧野 哲	浜松市市民部
鳥本 浩平	岐阜市教育委員会	正木 喜勝	公益財団法人阪急文化財団 池田文庫
中川 英之	相模原市教育委員会	増山 一成	中央区立郷土天文館
中村 茂子	民俗芸能学会	増田 由貴	公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団
中村 規	都市民俗研究所	松岡 薫	東京文化財研究所
中藪 規正	一般社団法人文化財共働	松崎 睦彦	東村山ふるさと歴史館



松山 秀行	アスツナグエイゾウ
丸尾 依子	山梨県立博物館
丸谷 仁美	秋田県立博物館
丸山 妙子	民俗芸能学会
三田村 和夫	杓見御田植祭保存会
道澤 明	横芝光町教育委員会
宮下 聡史	八千代市教育委員会
宮前 功	東京都教育庁
宮本 瑞夫	一般財団法人宮本記念財団
向田 明弘	京都府教育庁
村上 梢	福山市経済環境局
森 裕之	杓見御田植祭保存会
森下 春夫	公益社団法人全日本郷土芸能協会
盛永 未来	山形県郷土館「文翔館」
森本 仙介	奈良県教育委員会
守山 弘子	文化庁
柳貴家 勝蔵	水戸大神楽総本家柳貴家勝蔵社中
柳貴家 小勝	水戸大神楽総本家柳貴家勝蔵社中
山川 志典	東京文化財研究所
山下 祐樹	熊谷市立江南文化財センター
山中 千紗子	文化庁
山村 恭子	館山市教育委員会
ヤンセ・ヘルガ	東京文化財研究所
横出 洋二	京都府立山城郷土資料館
吉田 純子	文化庁
吉田 政博	板橋区教育委員会
吉原 睦	倉敷市教育委員会
吉村 麗月	荒尾市教育委員会
米岡 亜依子	文化庁
米村 創	国分寺市教育委員会
渡瀬 綾乃	東京文化財研究所
渡辺 栄二	文化庁

第 13 回 無形民俗文化財研究協議会報告書

Report of the 13th Conference on the Study of Intangible Folk Cultural Properties

## **いま危機にある無形文化遺産—無形民俗文化財の休止・廃絶・継承をめぐって—**

Intangible Cultural Heritage in Danger:

Concerning the Disappearance, Discontinuation and Transmission of Intangible Folk Cultural Properties

平成 31 年 (2019) 3 月

Issued in March, 2019

### **編集・発行**

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 TEL 03-3823-4925

Edited by the Department of Intangible Cultural Heritage,

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage

13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo 110-8713 JAPAN